

八重山歌謡にみる地名

波照間 永 吉

はじめに

本稿は八重山歌謡にあらわれる地名について、立地・歴史そして状況などについて説明したものである。このような仕事は地名辞典や歴史地名事典の範疇に入るものであろうが、これらの辞典類では歌謡に即した説明や伝承的事柄がどうしても割愛されがちである。このことに鑑みて本稿は作成された。歴史的な事柄については細かに原史料にあたり該当部分を逐一掲げるべきであるが、これについては紙幅の都合もあり、関係史料名あるいはこれまで刊行された歴史書類を典拠として掲げ、参考に供するようにした。手を煩わせることになるが、この点はそれぞれの文献や公刊された地名辞典類にあたっ

ていただきたい。

本稿で取り上げた八重山の地名は『南島歌謡大成 IV 八重山篇』（外間守善・宮良安彦編 1979 年 角川書店）所出のもので、原則として比定地の明らかなものを取り上げたが、比定地未詳のものもある。もちろんこれら以外にも比定地の明らかなものを含めて多数の地名がうたわれている。これらについては別稿で取り上げる機会をまちたいと思う。

本稿で掲げた地名の項目の表記は原則としてテキスト所出語形としたが、一部、漢字表記をひらがなに改めたものや表記上不適當と認められるものについてはより適切な語形に改めた。また、歌謡の詞章はテキストとした『南島歌謡大成 IV 八重山篇』に基づくが、句切れの形は語句の構成が分かりよいように筆者で改めた。また詞章の解釈も新たに筆者が付したものである。原則として引用文中の数字は原典が漢数字であっても算用数字で示した。

主な参考文献は以下のとおりである（所出順）。本文中でこれらの文献の後ろに示したページはいずれも活字本によるものである。

〔参考文献〕

- ・『琉球国由来記』（1713 年）。外間守善・波照間永吉編『定本琉球国由来記』（1997 年 角川書店）。
- ・川平村の歴史編纂委員会編『川平村の歴史』（1976 年 川平公民館）
- ・喜舎場永珣『八重山民謡誌』（1967 年 沖縄タイムス社）
- ・知念政範『黒島史』（1970 年 自家版）
- ・『慶来慶田城由来記』（成立年不明）。石垣市史編集室『慶来慶田城由来記・富川親方八重山島諸締帳』（石垣市史叢書 1）（1991 年 石垣市）
- ・喜舎場永珣『八重山古謡』（上・下）（1970 年 沖縄タイムス社）
- ・宮良当壮『八重山語彙』（1930 年初版・1966 年再版 東洋文庫）
- ・外間守善『沖縄の歴史と文化』（1986 年 中央公論社）
- ・八重山歴史編集委員会編『八重山歴史』（1954 年 八重山歴史編集委員会）
- ・山城浩『小濱島誌』（1972 年 小浜郷友会）
- ・安里武信『新城島^{バナリ}』（1976 年 自家版）
- ・『君南風由来并位階且公事』（写本。琉球大学附属図書館蔵）。沖縄久米島調査委員会編『沖縄久米島 資料編』（1983 年 弘文堂）
- ・宮良当壮「八重山古民謡歌詞の研究」『宮良当壮全集』11 巻（1980 年 第一書房）
- ・牧野清『登野城村の歴史と民俗』（1975 年 自家版）
- ・沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典』（1983 年 沖縄タイムス社）
- ・宮良当壮「琉球八重山諸島の民謡」『宮良当壮全集』11 巻（同上）。
- ・球陽研究会編『球陽』（読み下し篇）（1974 年 角川書店）。
- ・『八重山島大阿母由来記』（18 世紀初頭成立）。『南島』第 1 輯（1940 年 南島発行所。復刻版 1976 年 東京・八重山文化研究会）
- ・宮良安彦「平得村ギシユク御嶽の年中の願いごと」『沖縄文化』29 号（1970 年 沖縄文化協会）
- ・上勢頭亨『竹富島誌一民話・民俗篇一』（1976 年 法政大学出版局）
- ・大浜老人クラブ長寿会編『大浜村民俗誌』（1976 年 自家版）
- ・「宮古島在番記（写）」『平良市史』第 3 巻 資料編 1 前近代（1981 年 平

良市役所)

- ・「忠導氏家譜 正統」『平良市史』第3巻（上同）
- ・『参遣状』（1686年～1765年）。石垣市史編集室編『参遣状拔書』（上・下）（石垣市史叢書8・9）（1995年 石垣市）
- ・『御手形写』（1771年～1830年）。石垣市史編集室編『御手形写』（石垣市史叢書13）（1997年 石垣市）
- ・川平永美述、安溪遊地・安溪貴子編『崎山節のふるさと—西表島の歌と昔話—』（1990年 ひるぎ社）
- ・宮良当壮・宮良長包編『八重山古謡』第2輯（1930年 郷土研究社）
- ・与那国町文化財調査委員会編『与那国町の文化財』（1979年 与那国町教育委員会）
- ・宮良高弘『波照間島民俗誌』（1972年 木耳社）
- ・笹森儀助『南島探験』（1894年）。東喜望校注『南島探験—琉球漫遊記—』1・2（1996年 平凡社）。
- ・石垣市史編集委員会編『石垣市史』各論編 民俗 上（1994年 石垣市）
- ・沖縄在鳩間郷友会編『鳩間島誌—沖縄在鳩間郷友会十五周年記念誌』（1983年 沖縄在鳩間郷友会）
- ・池間栄三『与那国の歴史』（1972年 琉球新報社）
- ・宮良村古謡保存会『宮良村古謡誌』（1979年 宮良村古謡保存会）
- ・牧野清『新八重山歴史』（1972年 自家版）
- ・温故学会所蔵「八重山古地図」（明治20年代成立？）。石垣市史編集室『八重山古地図展』（1989年 石垣市）
- ・アラン・ダンドラス編、池上嘉彦他訳『シンデレラ』（1991年 紀伊国屋書店）
- ・喜舎場永珣『八重山民俗誌』（上・下）（1977年 沖縄タイムス社）
- ・新本ニルムイ「《聞き書き》桴海のマユンガナシ」『八重山文化』第4号（1976年 東京・八重山文化研究会）
- ・『大波之時各村之形行書』（1776年以後の成立か）。石垣市史編集室編『大波之時各村之形行書・大波寄揚候次第』（『石垣市史叢書12』（1998年 石垣市）。

- ・『八重山島規模帳』（1700年）。玻名城泰雄翻刻「八重山島規模帳」『石垣市立八重山博物館紀要』第4号（1979年 石垣市）
- ・『八重山島年来記』（成立年不明）。石垣市史編集室『八重山島年来記』（石垣市史叢書13）（1999年 石垣市）。
- ・星勲『西表島の民俗』（1981年 友古堂書店）。
- ・『八重山島諸事由来記』（18世紀初期の成立）。『南島』第1輯（1940年 南島発行所。復刻版 1976年 東京・八重山文化研究会）

なお、本稿は『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』（1986年 角川書店）のために執筆した旧稿（1984年）に補筆・修正を加えたものであることをお断りしておきたい。

1. あーる（東）・いーる（西）

竹富町鳩間島の字鳩間内の集落。鳩間は一字であるが、祭儀等では東村と西村^{イール}の二つにわかれる。アールとイールの境界はサンシキと呼ばれる祭儀広場と鬚川御嶽^{ビナイ}の間を島の中央部にむかう縦道路で、その道路の東側がアール、西側がイールである。サンシキと鬚川御嶽の角にあたる十字路がアイザムトゥである。アール、イールそれぞれにトゥニムトゥがある。このことからすると、鳩間はアールとイールの両トゥニムトゥを中心とする2集落が合してできた村ということになる。豊年祭^{プー}は、アールとイールの2組に分かれて綱引き、芸能などが競われる。綱引きの前に謡われる「いじくなー」（『南島歌謡大成Ⅳ』豊年祭の歌19）は「〈西村〉あーるぷーる あーるぷーる しなぬみんば ゆーしくーば しなんぎす ゆーしくーば しなんぎす 〈東村〉いーるぷーる いーるぷーる しなみんば ゆーしくーば しなんぎす ゆーしくーば しなんぎす」〈東村の豊年祭 東村の豊年祭、綱の耳を寄せてくれば綱を繋ぐ、綱の耳を寄せてくれば綱を繋ぐ。西村の豊年祭 西村の豊年祭、綱の耳を寄せてくれば綱を繋ぐ、寄せてくれば綱を繋ぐ〉と、相手方を煽る。次に、自村にある自慢の文物を次々と謡いあげ、相手方より優れていることを主張する歌にかわっていくが、これは綱引きの前哨戦として、気分を昂揚させるための歌合戦である。

2. 赤イ口目宮鳥御嶽

石垣市字川平にある。川平の4^{ヤマ}御嶽の一つで、ア^{オン}ーラ御嶽と別称される。川平の集落はこの御嶽を境にして上の村と下の村にわかれる。豊年祭等の中行事が行われる他、雨^{アーミングイ}乞いの祭儀もここで行われる。神名は嶽名と同じ。イベ名はマカコ大アルジ（外間守善・波照間永吉『定本琉球国由来記』493頁）。御嶽の由来は、野^{ヌー}補^ブ佐^サ・馬^{シムヌムラ}補^{シムヌムラ}佐^{シムヌムラ}の牛馬監督の報告は石垣の宮鳥御嶽にする慣例であったが、川平に出向く宮鳥御嶽の司^{チカサ}の苦労は大きかった。それを省くため、宮鳥御嶽の神を川平に分祀したのが始まりという。御嶽に安置されているピッチェル石は海中より上げられた霊石であるという（川平村の歴史編集委員会『川平村の歴史』69・346頁）。川平村を讃えた「川平口説」に（『南島歌謡大成IV』口説1）「6. 群星御嶽に山川え／赤い宮鳥 観音堂エイ／御守護賜り 有り難い／千秋万歳 目出度けれ」と、川平村を守護する聖地として群星御嶽、山川御嶽、観音堂とともに挙げられている。

3. あがりざき（東崎）

与那国島の東端の岬。岬一帯は草地で、与那国馬や牛の放牧地となっている。与那国は絶海の孤島であり、ふだんは四囲に島影をみとめないが、気象条件のよい日には、この地から東方に西表島がうっすらとみえることがある。この地は与那国と他の八重山の島々とを結ぶ最短の線の一方の基点である。岬の手前にあるダティグチディの火番屋（烽火台）はそのような立地条件によって設立されたのであろう。島を出る船の見送り人もこの地で航海安全を念じたようである。船出の別れの悲しみを歌った「どなんすんかに」（『南島歌謡大成IV』スンカニ3）に、「1. なたはま うりて むちやる さかじちや／みなだ あわ むらし ぬみぬ ならぬ 2. なたはままでや とぢに うくらりて／やていく あがりざき みやるび たまし」〈ナンタ浜に下りて、手にした別れの盃は、涙があふれて飲むことができない。ナンタ浜迄は妻に送られて、ダティグ頂、東崎での見送りは恋人の役分だ〉とみえるのも、ここで見送りするならわしのあったことをうかがわせる。

この地が他島から最も近い位置にあることは上記のとおりだが、「オヤケアカハチの乱」（1500年）の後で宮古からやってきた与那国討伐軍はここに

船をつけて上陸したようだ。「いんしが一ぬ金盛ゆんた」(『同上書』ユンタ 216)に「16. あらばなぬ^{ふな}船しいき ま始^{はじ}みぬ 旅^う下り 17. 東崎^{あがるさき}や 船しき 島崎に旅下り」〈最初の船着け、真初めの上陸は、東崎が船着け所だ。島崎が上陸地だ〉と謡われていることに、それがうかがえよう。

4. あがろうざあ

比定地は未詳であるが、石垣市字登野城のことかとされる。喜舎場永珣は「『アガロウザ』は東の里の転訛である。(中略)(大川村)の東の里、すなわち登野城村」と大意述べている(『八重山民謡誌』51頁)。アガロウザと登野城が対語であることから十分推察できることである。「あかるざ節」(『南島歌謡大成Ⅳ』節歌78)は「1. あかるさの む中に／登野城の む中に 2. 九年母木は 植とし／香しや木は さしとし 3. 九年母木の 下なか／香はしやん木の 下なか 4. 子守たが 持よて／抱きなたの 揃ろよて」〈東里の真中に、登野城の真中に九年母の木を植えて、香ばしい木を差して、九年母の木の下に、香ばしい木の下に、子守達が寄り合って〉と歌い出す。以下、子守達が自分の守る子に、立派な役人となって沖縄島からの旅の土産に美しい着物を買ってきなさい、と歌っている。「あがろうざ」(『南島歌謡大成Ⅳ』ユンタ 32)では「あがろうざあぬ んなかによ」に対して、「とみぐしくぬ うすばによ」と謡っているが、この「とみぐしく」は「トゥヌグスク」(登野城)の異伝と考えられる。宮古島の「東里真中^{あがいざとうんなか}」(『南島歌謡大成Ⅲ』アグ 106)は類歌であるが、ここでは「あがいざとう」に対し「どうぬぐしく」と歌われている。

5. あだてい (阿立)

竹富島西表島の祖納の周辺にあった集落。祖納の前方海岸にある「マルマ盆山」を歌った「まるまふんさんふし」(『南島歌謡大成Ⅳ』節歌 45)の第3節は「阿立 大立 おかりに 下原 真山 浮道 成屋 舟浮」と地名を列挙している。これらの地名のうち「成屋 舟浮」の二村を除く他の村々はいずれも、現在の西表祖納を形成するものである。『慶来慶田城由来記』(18世紀後半成立か)に「あ立人数八大嵩の東せいら盛」(阿立の人は大嵩の東に

稲叢^{シラ}を積み）とあり（『慶来慶田城由来記』12 頁）、祖納の大嵩の近隣に位置したことがわかる。

6. あだどうなー（安多手）

石垣市字宮良の小地名か。宮良村にあった小村名かとも考えられるが未詳。アダドゥと称される地名があるようで「アダドゥ井戸」という古い井戸がある。この井戸は、ナカヌ井戸^{カー}、オーセーヌ井戸^{カー}と並んで古来より村の共同井戸として利用されてきた。雨乞いの時に謡われる「雨乞ちいぢい」（『南島歌謡大成IV』雨乞いの歌①アマチヂィ 3）に「1. みすきぴやい ひいど あみふちやぬ 2. むむがぴやい ひいど あみふちやぬ 3. めーらむらすかさぬ あみふちやぬ 4. あだどうなーぬ ぶなんちぬ あみふちやぬ（中略） 11. めーらむらういげ たぼり 12. あだとうなぬ ういげ たぼり」〈三ヶ月の日照りがして雨が欲しい。百日の日照りがして雨が欲しい。宮良村の司が雨が欲しい。安多手村の女頭^{ぶなず}が雨が欲しい。〈中略〉宮良村の上に雨を下さい。安多手村の上に雨を下さい〉とある。ここではアダドゥナーは宮良村の対語として謡われているが、宮良村とは別にある村の名なのか、宮良村の異称かが問題である。現在、宮良村で行われている年中行事に「アダドウニガイ」がある。旧暦 6 月の行事で、アダドゥの神—水の神—に、豊饒の感謝・祈願をなす祭祀である。

7. あらかー（新川）

石垣市字新川。石垣の中心街・四ヶ村を構成する古い村である。新川村は、東からウラバルハカ、ターブナーハカ、キドゥムリハカ、タキニシィミユトウハカ、タキニシィウフパカ、アラカーフウパカ、ンナティーマスイパカの七パカ（区域）で村内が構成され、更に西方にサクバルパカが隣接している。村の信仰の中心地の真乙姥御嶽^{マイチイパーオン}はキドゥムリハカに、長崎御嶽はンナティーマスイパカにある。村の創建は、1757 年石垣村の人口 1938 人のうち、968 人を分けて新村としたことによる。1757 年の村分けでは、大川村が登野城村より独立しており、それに因んで新川、大川の両村は互いに「兄弟村」と称している。「婚礼の本神祈願^{ぬざーにがい にがいふつ}の願口」（『南島歌謡大成IV』ニガイフチィ

19) に「あらかーむら たきにしばかぬ 長栄氏」(新川村の嵩西パカの長栄姓)、「屋敷願の祝詞」(『同上書』ニガイフチィ 23) に「あらかーきだむりぱか」(新川村の慶田盛パカ)等と、下屬パカ名とともに出てくる。用例の中の「長栄氏」は、士族の名前の頭に「信」の字のつく一門である。士族の居住地域であったことがこれからも知れる。

8. あらびけー (荒引川)

石垣市字新川に河口をもつ人工の川。この川はふつうはシードー (水道)、フナーシードーの名で呼ばれる。流水路は、石垣市字平得の後方から西へ向かい、河口は四ヶ村のはずれ、新川村の西方部分に位置している。凹地帯を掘削し人工河川とした (1868 年。1937 年改修)。河口付近には通称「一の橋」と呼ばれる橋がかかっている。「久場本節」(『南島歌謡大成Ⅳ』節歌補遺 31) に「6. 水道原^{しーどうばるあぶ}溢らし／溢らしぬ^{あぶ} 余^{あま}いや 7. 平田原^{びいさたばるあぶ}溢らし／溢らしぬ^{あぶ} 余^{あま}いや 8. あぶな^{あぶ}ー井戸^{かー}ば溢らし／溢らしぬ^{あぶ} 余^{あま}いや 9. 荒引^{あらびけー}ば 溢^{あぶ}らし／つ^{あぶ}き出しぬ^だ 余^{あま}いや 10. 大石垣^{ふしゃぎどうー}渡^{あか}ば 赤^{あか}まし」(水道原を溢れさせ、溢れさせての余りは、平田原^{あふ}を溢れさせ、溢れさせての余りは (中略)、荒引^{あふ}を溢れさせ、突き出しの余りは、大石垣の海を赤く染めて) と歌われている。この歌は雨乞い歌で、大雨が降って水道原、平田原、アブナー井戸等のシードー一帯が水浸しとなること、そして荒引川をも溢れさせ、四ヶ村の前方の海が赤土色にそまるまで大雨を降らせて下さい、と願ったものである。ここに出てくる地名はシードーの上流より下流へという順にならんでおり、「荒引」がシードーの、海＝大石垣渡に注ぐ付近の名であることが知れる。

9. ありしん (東筋)

竹富町字黒島を構成する集落。黒島の中央より東方に位置する。方音でアースン。集落は、サキバル村、アロスク村、サーバル村、フナト村、ナンザト村という小邑を一つにして、東筋村と呼称されるようになったと伝えられている (知念政範『黒島史』1 頁)。黒島内の 5 集落 (東筋、仲本、宮里、保里、伊古) のうち、最も大きい集落である。「ひやんかんふし」(『南島歌謡大成Ⅳ』節歌 37) に「5. 東筋みやらひ へな崎の／げしくん こうすひ」

〈東筋村の乙女はヘナ崎のギシクン貝を漁るよ〉と歌われているのは、東筋近くのヘナ崎が貝のよくとれる所だったからであろう。「いやり節」（『同上書』節歌補遺 43）には「3. 東筋乙女のいやりや／しんなまぬあしど いやりす」〈東筋村の乙女の土産はシンナマ魚の塩漬けを土産にする〉と歌われている。蔵元から巡検のためにやって来た役人の順路を想像させるのは「親廻り節」（『同上書』節歌補遺 45）で、宮里村→仲本村→東筋村→伊古村→保里村→保慶村の順に歌いこまれている。「ありしん」を「ありしじ」「あらしじ」と歌うこともある。

10. あるじしま（主島）

石垣島の異称。琉球国時代石垣島は王府の八重山統治の根拠地であった。王府より派遣された八重山在番の仮屋、蔵元はじめ、統治機関は石垣島の四ヶ村（登野城・大川・石垣・新川の四箇字の称）に置かれていた。それ故、八重山のその他の島々から見れば石垣島は、御主前〈役人の尊称〉の坐す島であり、八重山の島々を統べる主島であった。新城島で謡われてきた「二月ジラバ」（『南島歌謡大成Ⅳ』ジラバ 110）は、「二月の朔日になると、八重山の島々村々の青年達の中から優れた者が選抜されて、ウフイシャナギィ（大石垣）・アルジシマ（主島）に集められる。若者達は朝早くから起きて、鑿や槌をとって造船につとめる。船が出来あがると男も女も出揃って綱を握って船おろした。船泊に浮いた船の姿の見事さよ」という内容の歌である。この歌謡には貢祖を搬入するための八重山地船を建造するために、属下の島々から青年達が石垣島に寄せ集められたという一つの歴史が語られている。他の歌謡でも石垣島の異称・大石垣の対語として歌われている。歌謡語としては「主人島・あるじ島・あるし島」等と表記されている。

11. あるざてー（東里）

比定地未詳。古謡にうたわれる地名であるが判然としない。「あるざてー」「ありざて」「東里」「東里」などと表記されている。「ある」「ある」が八重山方言で東を表す「アーリィ、アール」（[a:ri], [a:ru]）に相当し、「ざてー」が「里」を表す「サトゥ」の訛音であるとすれば、「東里」と考えることはで

きる。「あろざてー」の謡いこまれた歌謡には「あろざてー」（『南島歌謡大成Ⅳ』ユンタ 52）、「あるざてーゆんた」（『同上書』ユンタ 93）、「東里^{ありざてい}ゆんた」（『同上書』ユンタ 12）、「ありざてゆんた」（『同上書』ユンタ 133）、「東里^{あらざとう}じらば」（『同上書』ジラバ 26）等があり、それぞれ、石垣村、登野城村、川平村、大浜村、白保村、黒島で採録されたものである。この採録地域の広がりも「東里」がどの村を指すかを考えるのに不利な要素となっている。歌の内容は「アロザテー村に手先の器用な女子が生まれた。幼い頃からその器用さは、遠く沖縄島までもうわさされ、国王の耳にも達した。そんなある時、村の役人から娘にお呼びがかかり、困難な綾上布の織り上げを命ぜられた。役人の命を拒むこともできず、娘はやむなく布織りにかかり、ついに美しい上布を織り上げた。そして、そのために、いよいよ高名になった」というものである。このような、困難な織布の命令→拒絶→織布に着手・完成→評価という物語構造をもつ歌謡は他にもあり、一つの歌群〈型〉をなしている。その背景には先島に集中的に課された人頭税の貢布代納制があるのは言うまでもない。「あろざてー」歌中に「あろざてーぬ^{ユンチュ} 与人主ぬ まいから」〈東里の与人役人様の所から〉とあることから、この村は与人在任の村かとも考えられるが、他例では「あろざてーぬ 主ぬ前かい」〈東里の役人様へ〉となっており、速断はできない。「アルザテ村は判然としない」（喜舎場永珣『八重山古謡』上 28 頁）と言うしかない。

12. あんとうり（網取）

竹富町西表島網取。西表島西南部崎山半島にあった古集落。「網取^{あんとうりい}ゆんぐどう」（『南島歌謡大成Ⅳ』ユングドゥ 40）は「1. 網取ぬ^{あんとうりい} ばが島ぬ^{しいま} 上なが 2. しいまがまぬ ふんがまぬ 生れるんちょ 3. しいまがまや あらん ふんがまや あらん 4. 米盛^{まいむりい}どう 栗盛どう やれりちょ 5. 米盛や^{まいみしゃぐ} 米神酒 造りようり 6. 栗盛や^{あーむりいざき} 泡盛酒ゆ まらしょうり」〈網取の、我が島の上に、小島が、小さな国が生まれているというよ。しかし、それは小島ではない。小さな国ではない。米叢、栗叢が積んであるというよ。米叢では米神酒を造り、栗盛では泡盛酒を造って〉と謡いだす。そして、村を守る神、祖神^{おやがみ}を村にお招きし、造りだした神酒を捧げて祭りを行うことを謡っている。

この歌謡は豊饒の世を感謝・祈願する祭り（プーリィ・^{シチイ}節祭など）に謡われたものと思われる。歴史の長い集落であったから、種々多様な民俗・芸能等が伝承されていたであろうと思うが、残念なことにそれらの記録は多くはない。山田武男著、安溪遊地・安溪貴子 編『わが故郷^{シマ}アントゥリー西表・網取村の民俗と古謡一』が貴重な一書。喜舎場永珣『八重山古謡』には上記のユングトゥと「^{まい}前^{とう}ぬ渡じらば」（『同上書』ジラバ 68）の 2 篇、喜舎場永珣『八重山民謡誌』に「ウルチィ岳節」が収録される。

13. あんぱりい（網張）

石垣市字名蔵に属する。名蔵湾が大きく湾入した名蔵・崎枝間の湾岸、名蔵川の河口部の名蔵小橋付近の地名。この地域には多数の小河川が流れ、大・小規模のマングローブ林が発達している。「あんぱるぬみだが一ま」（『南島歌謡大成Ⅳ』ユンタ 38）は「1. あんぱるぬ みだが一までんど（囃子詞記載省略。以下同じ） 2. すや ぴしや ^{しむ}下ぬ ^や屋一かい 3. ^{しむ}下ぬ ^や屋や 瓦ぶきでんど 4. すや んちや ^{うい}ういぬ 家かい 5. ^{うい}上ぬ 家や がやぶきでんど 6. みだが一ま まりどしでんど 7. かんかじぬ ぎのうぬ あんど」〈網張の目高蟹は潮が引くと磯の下の家へ行く。下の家は瓦葺きというよ。潮が満つと上の家へ行く。上の家は茅葺きというよ。その目高蟹の生年祝いにすべての蟹の芸が披露されるよ〉と謡い出す。以下、この歌謡は亜熱帯の海岸沼沢地に棲息する蟹＝ギダサ蟹・ダーナ蟹・ピンギャー蟹・キガラン蟹・ムミンピキ蟹・ヤクジャマ蟹・アブシ蟹・バダレー蟹・フサマラ蟹・ガーシメー蟹・ハモウリ蟹・ハルマ蟹・ユーニ蟹（全て方言名）の姿形と動作の特徴をうまくとらえ、それを祝宴の場に働く様々な準備人・芸人の姿に重ねる。ここには自然の風物と深くとけ込んだ島人たちの、小動物に対する観察の確かさと比喻の豊かさが溢れている。

名蔵川河口から網張一帯は、以前は潮干がりの適地で、旧暦 3 月 3 日の浜下りの時には石垣市街から繰り出す人々でにぎわった。しかし、昭和 30 年代後半より顕在化した公害・自然破壊の影響をまともに受け、近時は潮干がりを楽しむ人も少ない。

14. いく（伊古）

竹富島黒島の集落。島の東北部、東筋集落の北方にある。「伊古」は方言でヤフ、歌謡などでイクといい、「伊久」と書かれることもある。集落の北方海岸には仲盛御嶽がある。また、西方には廃村となったサーバル村の跡があるという。「ひゃんかんふし」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌 37）は黒島の宮里、仲本、東筋、伊古、保里、保慶の6ヶ村の青年男女が、それぞれの漁り場で獲った海産物を歌いあげていくという内容であるが、その中で伊古集落は次のように歌われている。「7. 伊久村宮童 山崎の しんなま すくゑい 8. またも ひきりいた 野原表の まくがん とふれい」〈伊古村の乙女は山崎のシンナマ魚を掬うよ。また、青年達は野原方面のヤシガニを捕るよ〉。蔵元の役人の地方巡検ともいえる親廻りは、「親廻節」（『同上書』節歌補遺 45）によると、宮里、仲本、東筋とまわって、伊古に到り、次いで保里、保慶という順路であったらしい。

イク（イコ）の語源は「伊古村は往昔は保里村の管轄区域内にあった所で、保里村の人が農耕・漁労に通う際の休息場であったため、「ヤコウ」「ヤクイ」（休憩）がイク（イコ）となったもの、と伝えられている（知念政範『黒島史』12頁）。

15. いしすく（石底）

石垣市字登野城、小字バンナにある。石垣市街地より北方約 1.5 kmの地点である。ここにはかつて巨大な岩山であった石スク山があったが、建設資材として採掘され、山容をとどめていない。石底山（石城山とも書く）は神の居所として古来より島民の崇敬をあつめてきた。それは石垣四ヶ村の中心・石垣と登野城の祖の一人・マタネマシズがそこに住んでいたからであろう（『定本琉球国由来記』488頁参照）。また、島のユーヌヌシ（世の主）たる弥勒が籠っていた所とも伝承されてきた。「猪垣願の祝詞」（『南島歌謡大成Ⅳ』ニガイフチィ 30）は、「くぬ しいや 石底ぬ 神ぬまいとう ^{なかもみつけー}仲間満慶とうしどう、しいぬ うちえー、ゆちあしゃーぬ、ふあいじーで あんきどう しい まーし、かく まーし、しこーれーだちけんや、しいゆ とうびくやー ならぬどー」〈この猪垣は石底の神様と仲間満慶とで積みめぐらせ

たものだ。猪垣の内は四つ足＝猪の食い分だといって猪垣を積んであるから、猪垣を飛びこえてはいけないぞ」と述べる。豊饒の神である石底の神と英雄仲間満慶を出すことによって猪垣の侵さざるべきものであることを獣に知らしめているのである。

石底山には〈ハンナー主〉の墓がある。また、1977～1978年に行われた「石城山緊急発掘調査」の結果、現地から骨器・石器・土器・陶器・青磁の人工遺物が発掘された。

16. いせに

石垣市字川平の小字名。地籍では「山川」となっている地域の方言名である。川平村のほぼ中央部にあたり、旧慶田城村はここにあったと伝えられる。イセー二井戸^{ガー}があり、古くは慶田城村、久場川村の一部がこれを利用したようである。イセー二井戸は湧水を堰堤で囲った堤井形式である。「ひせにしよう」（『南島歌謡大成Ⅳ』アヨー2）は、イセー二の高台から、川平湾（きふあ港）に停泊する八重山の公用船の姿を、大意、次のように謡っている。

「イセ二の岡の頂の木に登ってキファ港を見ると、首里への貢物を満載した八重山船が停泊している。その姿は、もやい綱を張り、帆柱を立て、羽のような帆を引き立てている。首里への上国旅には柔らかい南風を受け、そして、八重山への帰郷の旅には和やかな北風を受けて、愛しい人に迎えられるよ」。イセー二のあたりは川平のうちでも高台になっているから、川平湾が一望できたのである。

17. いっぷんじま（一本島）

与那国島の異称。「一本島」の字をあてるのは、この島が絶海の孤島で、荒野に根をおろした一本の草木^{ひとつもと}にその姿をとえる心意があったからであろうか。別れのつらさを歌った「与那国すんかに〈節〉」（『南島歌謡大成Ⅳ』スンカニ6）に「ばちむ だますんでいど どなんじま わったりわったんな／ばちむ くがらすんでいどう いっぷんじま わったりわったんな」〈私の心を痛めようと与那国島に渡ってこられたのですか。私の心を焦がらせようと一本島に渡ってこられたのですか〉と、「どなんじま」の対語で「いっぷんじ

ま」が歌われている。ところで「いんしが一ぬ金盛ゆんた」（『同上書』ユンタ 216）に「41. 与那国や 立ちゃぶる 一本や ありやぶる」とある「一本」が「いっぷんじま」の意であるのは、同歌の第 9 節に「与那国ぬ島や びすむとう ふん 一本ぬ国や」とあることから分かる。ただ、この歌では「いっぷん」と音読みではなく、「ぴすむとう」（「ひともと」の転訛）と訓読みになっている点は看過できない。何故ならば、「いっぷんじま」の呼称は、当初「ヒトゥムトゥ」であったのが、「一本」という文字につられて「いっぷん」と音読みした結果かもしれないからである。

18. いばるま（伊原間）

石垣市北部にある。方音でイバルマ、イバローマという。石垣島の村落の中では古い方に属し、古くから北部石垣の中心地である。マユンガナシ（真世加那志）の祭祀がかつては行われていたことなどから、川平・桴海・野底といった石垣島北西部を一円とする文化圏の一角を占めていたことが分かる。明和の大津波（1771 年）の被害をまともに受けたため村敷をかえて再建された。新村は、生き残った人々と隣村の船越村、それに離島・黒島よりの寄人で形成された。強制移住という悲劇にみまわれた黒島の人々は「船越ゆんた」（『南島歌謡大成Ⅳ』ユンタ 212）でその新村建てを、大意次のように謡ってきた。「伊原間・舟越の村を建てるために我々を島分けしたのは、宮里村ではいなふく稲福・びさは平得屋の兩人だ。仲本村ではまりむり生盛・んかいばる向原の兩人で、東筋ではさきばる崎原・まいなは前仲の兩人、保里村では石盛・いしむり金城の兩人だ。こいつらが我々を異郷の地に追いやったのだ。今回は我々が分けられたが、その次にはそいつらを島分けにしてやろう。それを許した役人衆はかしら頭職にもめざし目差職にも昇進してくれるな。そう思って泣く泣く伊原間・船越に渡ってきたのだ。しかし、暮らしてみたらこの伊原間・船越の方が住みよいよ。粟や黍を作っては実らせているよ」。生れ育ち親しんできた故郷から、未だ見たこともない土地へ狩り立てられてゆく 165 人の怨嗟の声。自分達に身心の苦痛を与えた者を名指しで挙げ「その次は貴様らだ」と叫ぶ激しさ。この激しさは他の八重山のどの歌謡にもない。因みに、同じく伊原間の村建てを歌った「舟越節」（『同上書』節歌 9）では、島分けに加担した上記の人々の名は一切歌われていな

い。「船越ゆんた」に謡われたこれらの名前の人々の存在が歴史的事実か否かは明らかにしえないが、歴史伝承の手段としての歌謡の役割が表れており、注目される。

19. いりむてい（西表）

竹富町西表。方音でイリムティと呼ばれる。この呼称は西表島全体をさす場合と西表島の西表村をさす場合があるが、一般には西表島のことである。西表村の名は『琉球国由来記』や『球陽』などにみられ、現在の祖納、干立、上原、浦内等の集落を包含していた。「竹富ぬぎらいちえーまゆんた」（『南島歌謡大成IV』ユンタ 214）に「19. ^{いりむてい}西表ぬ まなしゃま／ゆくむていぬ 女童 20. まなしゃまぬ 生りや／女童ぬ うしいでいや 21. 焼かり ^{しいとうちい}蘇鉄ぬ／^や焼 ^{しいとうちい}き蘇鉄生りば し」〈西表のマナシャマ女、横の方の島の乙女、マナシャマ女の生まれは、乙女の生まれは、焼け蘇鉄のような真黒な生まれで〉とある「西表」は西表村をさすものである。それは、同じ西表島にある古見が第13節で「古見浦ぬ ぶなれまよ／^{すく}みゆ底ぬ みやらびよ」〈古見浦のブナレマ女、美与底の乙女〉という形で既出していることから知られる。「イリムティ」の語源は「入り表」、すなわち、日の入る方処の意からきたものであろう。与那国島と鳩間島を除く八重山の他の島々からみると、夕日は西表島の島影に沈み入る。

20. いんだ・ふくはま（インダ・福浜）

西表島の北部海岸の地名。鳩間島とほぼ相対する地帯で、古くから鳩間島の人々が出耕し開拓した田地であった。船浦の湾を形成している東側の岬がインダ崎で、この一帯がインダと呼ばれる地域である。フクハマはインダの東に位置する。さらにその東がシィザパナリである。「鳩間ゆんた」（『南島歌謡大成IV』ユンタ 154）には、米納を義務づけられた鳩間島民が、西表島の上原や船浦の人々の敵意を克服し、未開の原野であったインダ、フクハマ、シィザパナリを開拓し豊饒を克ち得た喜びを次のように謡っている。「1. ぱとうま中むり ぱり登ぶり／くばぬ しいたに ぱり登ぶり 2. かいしゃ ^ま生りだる むにんぬ くば／たかさ ^む生いたる ちいじいぬ くば 3. ま

いぬ と一ゆ みわたしば／いく舟 くる舟 うむしるや 4. まいば し
 みしき うむしるや／あわば しみしき さてい みぐとう(中略) 8. いん
 だ 福浜 しいざぱなり／ふのうらからや ましいぬじい (後略)」(鳩間の
 中杜に走り登り クバの下に走り登る。美しく生えた中杜のクバ。高く生育
 した森のクバ。中杜から前方の海を見渡すと、行く舟、来る舟の賑わいが見
 物である。舟には米を積んで、粟を積んで、面白く、実に見事である。この
 ように豊かな実りをもたらすインダ、フクハマ、シィザパナリの土地はこれ
 まで借地していた船浦の土地よりも優れた所である)。

21. ういぬむら(上の村)→くばがーむら, ぴいさいむら, しいむぬむら

22. ういばる(上原)

竹富町字上原。西表島の北部にある古い集落。方音でウイバルという。村
 の西方には真地牧場〔mazimaki〕があった(宮良当壮『八重山語彙』31
 頁)。山岳部の占める割り合いの高い西表島にあって、上原・船浦地域は平野
 部にあたり、古くから耕作地として開墾が進められてきた。鳩間島への寄人
 もこの地域の水田経営を意図してのものだったらしい。「鳩間ゆんた」(『南島
 歌謡大成IV』ユンタ 154) は、上原・船浦の耕作地をめぐる上原・船浦の人
 と鳩間人との間に確執があったことをうかがわせるものである(喜舎場永珣
 『八重山古謡』下巻 406 頁～408 頁参照)。

上原の名をひろく知らしめたのは「でんさ節」(『同上書』節歌 18) である。
 一般に「1. 上原ヌ ^{ウイバル}デンサ／昔カラヌ ^{デンサ}／島ヌ アルマディヤ／イ
 チン ^{カワ}変ラヌ ^{デンサ}」(上原のデンサ、昔からのデンサ、島のある迄は何
 時も変らない、デンサ) (喜舎場永珣『八重山民謡誌』319 頁) で始まり、「3.
 もの いらは つゝしみ／口の外 むちやすなやう／出ちから またん／ぬ
 みの ならぬ 4. 島持と やもち／船乗と ゑのものてん／勢頭 舟子 親
 子／そらねは ならぬ」(物を言うときは慎みなさい。口の外におろそかに出
 してはいけないよ。口外してからは、再び吞むことはできないよ。社会の維
 持と家庭の維持は船の航海と同じである。船頭と船子、親と子の心が揃わね
 ばならない) といった教訓的な内容を歌いついでいる。封建道德の普及・婦

女子の徳化を目的とした歌で、沖縄各地で広く歌唱されている。

23. うがんざき（御神崎）

石垣島屋良部半島にある岬名。^{カンダカサル}神高い土地（霊地）で、そこからの土石草木の移動は忌まれてきた。また岬付近の海洋は、古来、航海の難所とされる。

「なかやまじらば」（『南島歌謡大成Ⅳ』ジラバ107）は、「機織り巧者の娘が沖縄島の国王のお召しを受けて上国旅をすることになる。娘は旅の不安を訴えるが容れられず、占いなどを頼りに出船。ようやくのことで公用をはたし、いよいよ高名になる」という内容を謡うのであるが、その中に次の詞章がある。「25. あがろんま船から／うわでいすぬ みようにから 26. 出だしんな 出だしば／走らしんな 走らしば 27. うがんざき いきんな／筆ぬ崎 ならびんな 28. 浪荒さ ありぶり／風つうさ やりぶり」〈東方の船・上手《東》の島の美御船を走らせに走らせて行った。^{ウガンザキ}御神崎に至ったところが、筆の崎に並んだところが、そこは浪が荒れ、風が強く吹いているところである〉。風波厳しい、航海の難所の姿が描かれている。八重山域内で「うがんざき」を求めれば、屋良部半島北端のこの岬となるが、対語が「筆の崎」とあることから宮古島の北東方の大神島の岬を考えることもできる。宮古歌謡には「うがむぐす／ふじならび」〈大神島の後方／筆岩の瀬〉と出る（「人頭税廃止運動のクイチャーアーク」。外間守善『沖縄の歴史と文化』217～221頁）。

^{ウガンザキ}御神崎の名は沖縄地方の方々に見出される地名である。それは、これらの崎々が、古来、神の^{うしわ}領く聖地であり、岬を航くわが身の安全を^{おが}拝み、祈らずには居られないような難所であったからに他ならない。

昭和27年12月に40余名の船客を乗せた八重山丸が遭難したのはこの岬の沖合いであった。岬にはこの遭難事件の犠牲者の鎮魂と航海の安全を祈願する観音像が立てられている。

24. うしゃぎいやま（大石垣山）

石垣市字大川にある。ウシャギ^{オン}御嶽と呼ばれ、大川村の信仰の中心地であった。大川の集落は丁度、この御嶽を^{うし}後ろ^{だて}盾にするように南方に展けてい

る。「明治 32 年（1899）境内の木を濫伐し、土地を分割公売にふして現状」の嶽域となった（八重山歴史編集委員会編『八重山歴史』166 頁）。御嶽の周囲には福木やデイゴの老木が並び往時をしのばせる。入り口にはコンクリート製の鳥居が立ち、敷地のほぼ中央にイベの前（^{イビヌマイ}拝殿に相当）の建物がある。この建物も明治 35 年（1902）瓦葺きに改築された後、何度かの改築を経て現在に至っている。イベの前の奥にサンゴ石灰岩の石を直方体に積み上げた墳墓型のイベがある。これは、この御嶽の祭神であるタルファイの墓と伝えられている。

御嶽の由来は稲作の起源神話を語るものである。すなわち、八重山に稲の未だ入らない時代に、アンナン・アレシンの国からタルファイ、マルファイの兄妹が稲の種子を携え八重山に来た。タルファイはクバントゥ原で島民に稲作を教え、マルファイは収穫された米の調理法を教え、稲作農耕を八重山に広めた、というもの。

また、この御嶽の神は水神としても崇敬されている。「雨乞の歌詞〈二〉（3）—水撒きの時—」（『南島歌謡大成Ⅳ』雨乞いの歌③—2（3））に「1. くばんといやなし 2. いやなしど 水主 3. 大石垣 ^{うふいしゃぎ} たるふわい 4. たんでとど もーしん神 ^{がん} 5. がーらとど たるふわい 6. 雨欲しやぬ ならぬ（以下略）」〈小波本御嶽のイヤナシ神よ、イヤナシ神こそ水の主、^{ウシャギィ オン}大石垣御嶽のタルファイ神よ、あな尊、モーシン神・タルフワイ神、雨が欲しくてなりません〉と謡われている。波照間島の雨乞い歌「^{ぶいしおがん}大石御嶽の雨乞」（『同上書』雨乞いの歌③—2）にも「38. 大石垣 ^{うぶいさし} まるばいよ」と謡われており、小波本御嶽のイヤナシ神とならんで、雨・水を宰領する神として広く信仰されていたことが分かる（波照間島では大石垣御嶽の神をマルパイ神として伝承している点が注目される。）

25. うちいばれーむら（内原村）

石垣市字川平を構成する二つの集落のうちの一つ。「内原」は「大津原」とも書かれる。川平はもと、九つの小集落よりなっていたが、近世初期より風水学上の理由等により集落移動が行われた。この集落移動は明治 42 年に終了したと言われる。「大津原村」は前記 9 集落のうちの一つで、久場川村と

は別に、他の集落を吸収合併して残ったものである。地理的には久場川村より下方に位置するので「下の村」^{シムヌムラ}とも称される。川平村の三大祭祀の一つである節祭^{シチイ}に出現する真世加那志^{マユンガナシイ}も久場川村とは別々である。真世加那志の神口^{カンフチイ}を両者比較してみると、全体の分量は久場川村の方が長大である。内原村の神口は、1. 耕作地への真世の神の来臨 2. 畑の作物（麦・粟・稲・黍・赤豆・甘藷）の豊穰予祝 3. 新魂の付与 4. 子孫繁昌 5. 牛馬繁昌 6. 貢納完進、という順で村落共同体とその成員の果報を予祝・祈願するものとなっている（『南島歌謡大成IV』カンフチイ 2「内原村の真世ガナシイ^{うちいばれむらぬまゆん}の神詞^{かんふちい}」参照）。

26. うちいみじい（内水）

竹富町西表島の祖納を構成していた小集落名。祖納の前方海上に浮かぶ「マルマ盆山」をうたった「まるまふんさん節」（『南島歌謡大成IV』節歌45）の第3節で「阿立 大立 おかりに 下原 真山 浮道 成屋 舟浮」と列挙されている地名のうち「浮道」はウチミジイのことである。「浮道」という表記は方音の類推表記によるもの。喜舎場永珣『八重山民謡誌』には「内道^{ウキミチ}」とある。宮良当壮「琉球八重山諸島の民謡」（『宮良当壮全集』11巻331頁）では「ウチ°ミジ」（「チ°」は〔tsi〕、「ジ」は〔dzi〕を表わす）と表記され、「内水」と訳されている。

27. うふあんおん（大阿母御嶽）

石垣市字平得にある御嶽。平得村の集落の中にあり、村の信仰的中心地である。種子取り祭^{タニドゥリイ}や豊年祭^{ブーリイ}はこの御嶽を中心に執り行なわれる。この御嶽は、オヤケアカハチ討伐軍の無事帰還を真乙姥とともに祈り、後に大阿母職に任ぜられた多田屋遠那理^{タダヤヲナリ}の墓が、村人の尊崇をあつめて御嶽となったものという。大阿母御嶽の名はそれに因むものである。ところで、大阿母は方音でホールザー^{ホールザー}といわれる。よって、ホールザー御嶽^{オン}とも称される。平得村の豊年祭の「御神酒」（『南島歌謡大成IV』フミシャギイ 8）の冒頭に「大阿母^{うふあん}ぬ 神元ぬ^{かんむとう} 御神酒／神^{うみしやぎい} 響まれ^{かん ていゆ} 上^{うい} 響まれ^{ていゆ} 御祝い^{うゆわ}」（大阿母御嶽の、神元の御神酒よ。神の讃えられる、上が讃えられる御祝）とある。この歌は、

この御嶽の神庭で行われる世果報を感謝する厳肅な神酒献進の祭儀のときに謡われるものである。

28. うふいし（大石）

竹富町新城上地島西方海岸にある岩石の名。「上地島の西方の海中に大岩石が数個」有って、そのうちの高い岩が大石である（喜舎場永珣『八重民謡誌』268頁）。「くいの花節」（『南島歌謡大成IV』節歌42）の第2節に「大石に登て／前干瀬よ みれは／まつか 蛸といや／面白きやうがい」〈大石に登って前の干瀬を見ると、松《男性名》が蛸を取るさまは、本当に面白い狂言をみるようであるよ〉とある。島の前方の干瀬で蛸穴の蛸と悪戦苦闘する松叔父さんの姿が面白い狂言をみるかのように大石の上から眺められるというのである。島の生活の牧歌的な一場面である。

29. うふいしゃなぎ（大石垣）

石垣島の美称。イシャナギは「石垣」の方音。これに、ものの偉大さ・立派さを意味する接頭語「うふ〈大〉」がかぶさった形で石垣島を尊称（美称）したものである。首里王府の統治下にあって、王府の八重山統治の為の諸機関は石垣島に集中していたから、属下の島々としては石垣の上に「大」を冠して尊称せねばならなかったのであろう。しかし、この呼称が常に他島の人々からのものでなかったことは、大川の^{ウシャギイオン}大石垣御嶽という嶽名、また配流された男が故郷の父母を偲んで歌い出したという「いやり節」（『南島歌謡大成IV』節歌4）で、生地ウツの石垣島を「大いしやけ・あるじ島」と歌っていることから分かる。

また、石垣島の美・尊称であったのが、石垣島の中でも統治機関の集中して置かれた石垣の四ヶ村に限定して使われる場合もあったようである。例えば「まやゆんた」（『南島歌謡大成IV』ユンタ17）で、ガラ岳付近にいた母猫は「かいしじゃ」（身分良き人＝士族）にみつけれ、縄で縛られ「^{うふいしゃぎ}大石垣・^{うやむら}親村」に拉致されることになるが、ここの「^{うふいしゃぎ}大石垣・^{うやむら}親村」は「かいしじゃ」達の居住する四ヶ村である。同様に、「^{うふいしゃぎ}大石垣 ^ぬ上ぶりようり／^{うら}蔵元ぬばな ^{うら}上ぶりようり」〈大石

垣村にお上りになり、蔵元にお上りになり」とある「大石垣」も、対語の「蔵元」から、蔵元の置かれている四ヶ村を指していることが明らかである。

歌謡の中で「うふいしゃぎい（大石垣）」の対語は「あるじ島」「親島」「大本」「親村」「蔵元」などで、いずれも石垣島、石垣四ヶ村の性格を示している。

「うふいしゃなぎ」は、「大石垣」「大石垣」「大石垣」「大石垣」「大いしやけ」「うぶいちなぎ」等々と表記されている。

なお、「竹富元口説」（『南島歌謡大成Ⅳ』口説歌謡 11）、「竹富口説」（同上 13）の例のように単に「石垣」とのみ歌う例もある。

30. うふだき（大岳）

竹富町小浜島にある山。標高 99.4m。島の中央部より北方にあって、集落はその南側に開けている。小浜島の象徴的な風物であり、「小浜節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌 21）は「1. 小浜てる 島や／かほの 島やりは／大嵩は 後当／白浜 前 なし 2. 大嵩に 登て／おしくたし みれは／稲粟の なをり／みろくよかほ」〈小浜という島は果報な島であるから、大岳を腰当て＝後ろ盾にし、白い浜を前にして。大岳に登って見おろしてみると、稲や粟の稔りは弥勒の世果報である〉と歌っている。また、「小浜口説」（『同上書』口説 10）にも「2. 雲と 語ゆる 大岳に／清く 流れる うていんがー／命長ゆる 岳の上」〈雲と語る大岳に、清く流れるウティンガー。命を長らえる岳の上〉とあって、大岳に対する島民の心情がうかがえる。大正の中頃（？）の大岳は「芝山で茅（かや）が一面に生えていて茅を束ねて作った茅馬の根っこをつかまえて馬乗りして頂上から滑り下りて遊んだ」という（山城浩『小濱島誌』2 頁）。

また、雨乞い祭儀の時には、霊石であるカンドーラ石を屈強の若者が大岳の山中にかつぎ上げ、ヤマニンジュ（山人数＝祭祀集団）の祈願の後、この石を頂上からころがし落とすことになっていた。これは雷と降雨を期待する類感呪術である。大岳は祭儀の舞台でもあったのである。

なお、「鳩間口説」（『同上書』口説 8）に「3. あれに みゆるは うむとうだき／やらぶ たきどうん くばまだき／くんぬ やいだき ぱとうばな

り」〈彼方に見えるのは、於茂登岳、屋良部、竹富、小浜岳、古見の八重岳、鳩離れ島〉とみえる「小浜岳」は大岳のこと。

31. うふだてい（大立）

竹富町西表島の祖納の周辺にあった集落名。祖納の前方海岸にある「マルマ盆山」をうたった「まるまふんさんふし」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌 45）の第 3 節は「阿立 大立 おかりに 下原 真山 浮道 成屋 舟浮」と地名を列挙している。これらの地名のうち「成屋 舟浮」の二村を除く他の村々（地名）はいずれも、現在の西表祖納を形成するものである。「大立」はウフダティとよむ。「大立」に関するその他のことについては未詳。

32. うふどーちいじい（大道辻）

竹富町新城上地島の高台。「大道」はウフドーで、上地島の地名。ウフドーには古くは集落があったと考えられるらしいが、明和の大津波の頃になくなったかという（安里武信『新城島』4 頁）。集落のあった一帯を「大道原」と呼び、その部落はずれには、パナリ焼き作成のための「土を掘り取った跡や焼がまの跡がある」という（『同上書』59 頁）。「大道辻」はこの地—大道—の高台・頂の名である。「こいの花節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌 42）の第 5 節に「大道辻 登て／にし 向て 見れば／片帆舟て 見は／真帆と やよる」〈大道頂に登って北にむかって見はるかすと、片帆船かと思っていたら、なんと真帆船であるよ〉とある。「大道辻」の「辻」は頂の意で、高所を意味する。「大道辻」は「ウフドームリ」（大道森）とも歌われる（『同上書』4 頁）。この場合の「森」も岡、高所の意である。

33. うむとうやま（於茂登山）

石垣島にある沖縄最高の山。標高 526m。島のほぼ中央にあり、与那国島を除く八重山の島々から望見することができる。「鳩間口説」（『南島歌謡大成Ⅳ』口説歌謡 7）に「3. あれに みゆるは うむとうだき／やらぶ たきどうん くばまだき（下略）」〈彼方に見えるのはウムトゥ岳、屋良部岳、竹富島、小浜岳〉とあって、鳩間島から東方をのぞむと、まっ先に目に入るものであ

るのがうかがえる。また「しきたぶんあゆー」（『同上書』アヨー 42）に「1. 竹富^{たきどうん}ぬ 仲立^{なかだてい}ぬ／島^{しま}や（中略） 3. 大石垣^{うふいしやぎ} 大むとうぬ／真正面^{ましようみ}に」〈竹富の、仲嵩の島は（中略）、石垣島、ウムトゥ山の真正面に〉とある。ここでは石垣島の対語として「大むとう」は謡われており、石垣島の象徴と考えられていたらしい。

この山は古くから神の山といわれ、白石御嶽の由來說話に「世間ヲ守護シ玉フ、オモト大アルジト申御神」が出てくる。『君南風由来并位階且公事』に「（昔神）代之時二姉妹御三人女あり御姉は 首里弁（の御嶽に御住）居御兩人は久米嶋御渡海御住居を御分たまふ（御姉は東御嶽）妹は西嶽御住居被成候処御姉は八重山嶋御（渡海おもと嶽に）御住居為被成由候」（『沖縄久米島資料編』63 頁）とあって、首里弁の御嶽の神、久米島君南風神と姉妹である神がウムトゥ山には鎮座していると信じられていた。竹富島の「久間原御嶽願い口」（『南島歌謡大成IV』ニガイフチィ 74）に「17. うむとうだぎ 屋良部^{やらぶだき}岳^う 降りみそーる 大やん^{うー} 主やん^{しゅ}」とあって、ここでもやはり神の降りる杜嶽であることが語られている。同じ竹富の「清明御嶽願い口」（『同上書』ニガイフチィ 79）にも「8. うむとうてらす まそーば 降りみそーる 大やん^{うー} 主やん^{しゅ}」とある。この他、数篇の呪詞・歌謡にウムトゥ山と神との関わりがあらわれている。

ウムトゥ山の神の全機能については未詳である。しかし、「水の元願い口」（『同上書』ニガイフチィ 99）に「5. うむとうていらす まーそーばぬ^{かん} 神^{まい}ぬ前^{かん} 6. ぶねら ふーすきぬ^{みじ} 水^{なな} 七んがーらくいぬ^{しるみじ} 白水^{みじ} かい水ぬ^{かん} 神^{まい}ぬ前^{かん}」〈オモト照ラス、マソーバの神様／ぶねら、ふーすきの水、七の川越えの白水、美しい水の神様〉とあり、また、「井戸祭りの願い口」（『同上書』ニガイフチィ 61）「おーとうどう とおーどう、大本山^{う むとやま} 照らし山ば 元ばし、七川良、七谷拔（中略）、何某ぬ^{ばりふけ} 圈内^{かくうち}、城内に、掘り当てあれーる 井戸ぬ神、水元ぬ神」〈ああ尊、尊、ウムトゥ山、照らし山を基にして、七つの川、七つの谷を潜り抜けて（中略）、何某の圈内、城内に掘りあてられた井戸の神、水元の神〉とあって、この山が水源地であり、この山の神は水を宰領する神であることが知られる。

この山と人間の生活の関わりの中で大きいことは、木材の供給地として

あったことである。「松金ゆんた」(『同上書』ユンタ 111)に「8. なら ぶ
いぬ／やまとうぶいぬば とうりやむち 9. うむとう山 ていらすしぢ
ぬぶりようり 10. きやんぎ木ば／しるみいじようば きりだし 11. ま
どう いらな／とうき いらな とうりだし」〈自分の斧を、大和斧を取り
持って、ウムトゥ山、照らし頂にお登りになり、榎木を、白身のイク木を伐
り出して、時間をかけずに取り出して〉とあり、「盆和物献上祝詞」(『同上
書』ニガイフチィ 29)に「14. 箸、うむとていらしぬ、むたいさかい しょー
る ぱしんがら」〈箸はオモト照ラシが繁茂させた材木の箸〉とあるように、
家屋の建築材、日用品の材木などの供給地であったことを示している。

ウムトゥ山は八重山歌謡の中で主に次のように呼称されている。対句とと
もに示す。「うむとうやま・ていらしやま」「うむとうやま・すく木やま」「う
むとぬり・照しぬり」「しるうむとう・あかみていらし」「うむと・ていらし」
「ていらすぢぢ・まいぬやま」等である。「ウムトゥ」の漢字表記については、
長く「於茂登」が当てられ、他に「思度嶽」「思度嵩」「宇武登岳」「宇本嶽」
(『遺老説伝』『球陽』)と当てられてきた。これに対し、喜舎場永珣・宮良当
壮は、ウムトゥ山が「島又大本」であるという伝承をうけて「大本山」とす
るのが正しい旨を記している(八重山歴史編集委員会編『八重山歴史』59
頁・喜舎場永珣『八重山古謡』上巻 387 頁・宮良当壮『八重山語彙』42 頁
・「八重山古民謡歌詞の研究」『宮良当壮全集』11 巻 456 頁)。

34. うやきどーかにむりぱか

石垣市字登野城を構成するパカ(住居区画)の一つ。登野城を構成するパ
カは東から、ミユトゥパカ、ナリトウナリカサナリトゥノーパカ、ナカヌハ
カ、ウヤキドーカニムリパカ、キチィパカと位置している。1771 年の明和
大津波後、ウヤキドーカニムリパカ(牧野清『登野城村の歴史と民俗』では「ウ
ヤキドウムリィカニムルパカ」となっている)は区画整理され、東端の南北
一屋敷並みを残し、廃道の上で他はキチィパカに統合された(牧野清『登野
城村の歴史と民俗』42 頁)。

このパカのトゥニムトゥ(宗家)は石垣殿内である。「婚礼の本神祈願の
願口」(『南島歌謡大成Ⅳ』ニガイフチィ 19)に「とうぬすくむら うやき

どーかにむりばか 長戴氏^{ひつじ}ぴちでいまり うとうくまり、うまでいまり ぶ
なじまりとうぬ、なしだせーる うーでいまり ぶなじまりとう、あらかー
むら たきにしばかぬ 長栄氏^{ひつじ}うまでいまり うとうくまりと、(以下略)」

〈登野城村のウヤキドーカニムリィパカの、長戴氏の末年生まれの男子と午
年生まれの女子とが生んだ卯年生まれの女子が、新川村のタキニシィパカの
長栄氏の午年生まれの男子と……〉と出てくる。ここで注目されることは、
人の出自を述べる時にその人の属するパカ名から語り出している点である。
これは、古いパカがトゥニムトゥという村落における信仰的中心をもつのと
関係があるものであろうか。

35. うらかいじ

竹富町竹富島の地名。竹富島の南西部、皆治原^{カイジバル}の一地域を指すものと考え
られる。「うらかいじ」の対語は「むとうかいじ」で、「うら」「むとう」はお
そらく美称辞であろう。とすると、名称の実体は「かいじ」となるはずで、
皆治原の「かいじ」と同一であることが分る。八重山の蔵元は、まず、竹富
の皆治原に開かれ、後、石垣島に移転された。皆治原には蔵元跡、鍛冶屋跡
が残っている。「うらかいじ」の「うら」は蔵元の八重山方言名ウラ〔ura〕
に因むものであろう。「むとうかいじ」の「むとう」は「元」であろう。これ
は「しきたぶんあゆー」(『南島歌謡大成IV』アヨー 42) に、「7. 大蔵ぬ 玉^{うふうら たま}
蔵ぬ／はじまる 8. むとうかいじ うらかいじ／はじまる」〈大蔵元の、立派
な蔵元の始まりは、元皆治、蔵元皆治が始まりである〉と謡われていること
からも了解されよう。「幸本御嶽願い口〈神口〉」(『同上書』ニガイフチィ 72)
(「久間原御嶽願い口〈神口〉」《同 74》も同) に「27. むとうかいじ 浦^{うら}かい
じ 降りみそーる 大やん 主やん^{しゅ}」〈元皆治、蔵元皆治にお降りになる大親
主親〉とあり、神の降り訪う神聖な土地と考えられていることがわかる。

36. うらたばる (浦田原)

与那国島の宇良部岳の北の麓にひろがる水田地帯。田原川の流域にあたり、
祖納村の人々の耕作地である。宇良部岳から流れ出る水の恵みをうけて格好
の水田が開かれていた。与那国島に伝えられる「雨乞の歌」(『南島歌謡大

成Ⅳ』雨乞いの歌③－23)の後半部に「11. うらぶだき まういから
12. ふらしわいひり かんぬまい 13. ぬらしわいひり かんぬまい
14. みとぬ んびん ふぎるたん 15. ふらしわいたぼり ぐしゆび あぎ
る 16. うらたばる みでぬかみ」〈宇良部岳の真上から降らしてください、
神様。雨で濡らしてください、神様。川尻の穴が抜けるほど降らしてくださ
い。伏し拝みます。浦田原の水の神〉とあって、水神の坐す土地と考えられ
ていたことがうかがえる。

37. うりちいだき（うりちい岳）

西表島西端部、網取・崎山の両集落のあった半島の根元にある山。網取村の後
方（南東方向）に位置し、村を守護するように聳えている。標高 223m。

「うりちい岳節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌補遺 15）は「1. うりちい岳 上
なが／遊びみやば くさい／遊びぬ 談合 相談す 2. にびさそう いち
やすがよう／炬火ぬ 火し 招かばよう／うくりぱんけり 走りくよう
3. 女童ぬ 出でい乳やよう／かぬしゃまぬ 玉乳やよう 4. 誰るたるん
どう 取らしよるよう／じりじりんどう むましようるよう（以下略）」〈ウ
リチイ岳の頂きに遊び庭をこしらえて、遊びの計画を相談する。遅れて来る
者はどうしよう。松明の火を目印にしてやるから急いで走って来いよ。乙女
の可愛らしい乳房、愛しい娘の素敵な乳房は、一体誰に触れさせるのだろう、
揉ませるのだろう。〉と始まる。全体が網取の青年達の夜遊びをテーマとした
歌だが、青年男女がウリチイ岳にこしらえた「遊び庭」に集まって来る情景
が彷彿とする歌い出しである。喜舎場永珣によると「両部落（網取・崎山——
引用者注）からゆるやかな坂道で岳上に登ると、そこには約 1 アール程度の
平坦なる広場がある。これが歌の中に謡われている所の『遊び庭』である」

（『八重山民謡誌』397 頁）という。安溪遊地・貴子氏の調査によると網取
の南東部の地名にウルチムリ、ウルチ道、ウルチヌシチャン、ウルチ浜など
がある（川平永美述、安溪遊地・貴子編『崎山節のふるさと』57 頁）。ウリ
チイ岳が村の人々の生活と深い関わりを持っていたことが分かる。網取の郷
友会ではその名をウルチ会と称し、ウルチ岳に寄せる心情を表現している。

なお、上記の安溪氏の報告ではウルチと表記されているが、喜舎場永珣は

ウリチィと表記しており、両者の間に異同があり、問題である。因みに宮良当壮『八重山語彙』には立項されていない。

38. おかり

竹富町西表島の祖納の周辺にあった集落。方音でウカリと呼ばれる。古くは西祖納の一部であり、^{ぎらいきだぐすく}慶来慶田城用緒の出た所であった。西祖納の村はウカリとオハタキ等から構成され、大正2年(1913)、村の盛期には78戸もあったが、水の便の悪さのため、昭和15年には1戸を残し、全戸がスンバレーへ移村した(星勲『西表島の民俗』60頁)。「まるまふんさんふし」(『南島歌謡大成IV』節歌45)の第3節は「阿立 大立 おかりに 下原 真山 浮道 成屋 舟浮」と地名を列挙している。これらの地名のうち「成屋、舟浮」の二村を除く他の村々(地名)はいずれも、現在の西表島祖納を形成するものである。「おかりに 下原」とあることから、この両集落が近隣関係にあったこと、ウカリからスンバレーへの移住もこの近隣・親交関係が基礎となっていたらしいことがうかがえる。

39. かーらやま(川原山)

石垣市街北方約4kmにあるマイシ岳と^{タラマンニ}多良間嶺(詳しく言えばツカラ岳=『沖縄大百科事典』)の間の低地。この谷間状の低地を通る道路は、石垣の四ヶ村・平得村などから名蔵方面の耕作地へ通ううえで非常に重要な交通路であった。「川原山節」(喜舎場永珣『八重山民謡誌』101～104頁)は、石垣と名蔵に別れて居住する男女の恋の思いを歌うのであるが、その中でカーラ山道は次のように歌われている。「1. 川原山ヌ ネヌラバ／山道ヌ ネヌラバ 2. ナホシキヌ 川原山／イカシキヌ 山道 3. 薙^ナギ倒シヌ 川原山／伐り倒シヌ 山道(中略) 8. 川原山ヤ 布^ナ長ギ／山道ヤ 巾^{サジ}長ギ 9. 肝ヌ ザギ 思ウカラ／山道ン カヌシャマドウ ヤリィ」〈川原山がなかったら。山道がなかったら。どのような川原山だ。如何様な山道だ。木を薙ぎ倒して、伐り倒して開いた川原山道である。川原山の長さは布・手巾の長さである。心でさえあなたのことを思えば山道も愛しいものだ〉。この歌の中で、「川原山」は「山道」と対語となっており、山そのものではなく、川原山道を指し

ている。この川原山道は「山陽姓二世、長重翁が1649年（慶安2年）ごろ私財を投じ、万難を排して開さくした大事業であり、これが開道の嚆矢であった」。その後、「しばしば来襲する風雨の災禍に逢ったため、宮平長延翁が祖父の遺志を貫徹すべく、1742年（寛保2年）ごろ山道改修の大工事」にかかり、完成したものである（喜舎場永珣『八重山民謡誌』103頁）。

なお、宮良当壮によると「川原山節」は一名「名蔵節」とも呼ばれ、1737年の石垣・登野城両村住民の名蔵への「分離以前に夜な夜な一緒に三味線を弾いて唄って遊んだ平民の女即ち^{カーレーヤマ}メーラビ（宮童）が名蔵村に分け移されてから昔語らつた四箇の士族の若い男即ち^{ノーラ}ビラーマに対してやるせない思ひを歌つてゐる」ものという（宮良当壮「琉球八重山諸島の民謡」『宮良当壮全集』11巻372頁）。

40. かびや（紙屋）

竹富町西表島干立村南方の地名。西表島の祖納村に住む「恋の氏神」と世に知れた「殿様」と船浮村の娘「カマドマ」の恋愛をこまかく歌った「とのさま節」（『南島歌謡大成IV』節歌60）に「8. いつよまで、にやからまでで／染たる とのさま／思ひの外 以の外、紙屋して おふりに
 のよう 9. 夜や 真胸 おけ／昼や まん辻 かみ／願い すばよう／紙屋から、舟浮主前／上りおふり給ふれ」〈何時の世まで、後の世までと思いを染めた殿様は、思ひの外、意外にも紙屋の方に行ってしまったよ。夜は頭の上に押し戴き、昼は真胸の上で手をあわせてお願いをしますから、紙屋から、船浮の御役人様となっておいでください〉とある。祖納に住む「殿様」に、何時も船浮村に居てもらいたいカマドマが、船浮の御役人様となって来て下さいと歌いかけた部分である。「紙屋」の名は石垣島にもあり、そこは紙漉き工場があったところから命名された。すなわち、紙を漉く所が「紙屋」であったのである（壺を製造する所は壺屋であり、瓦を焼く所は瓦屋である。紙屋《カビヤー》、瓦屋《カーラヤー》は石垣の屋号にもなっている。これらの家の先祖がその役職に就いていたことによるものである）。西表の紙屋も紙の製造所であった（喜舎場永珣『八重山民謡誌』350頁）。

41. かびらむら（川平村）

川平村は、石垣島にある村落の中では古い歴史をもつ伝統的な村のひとつで、石垣島西北部の文化・行政等の中心地であった。「桴海布晒節」（『南島歌謡大成IV』節歌補遺 10）に「1. 桴海ている 島や／川平内どう やだそぬ」〈桴海という村は川平の村内であったそうな〉と歌われるように、川平湾岸の地域を広く占めていたようである。作者及び作歌年代不明の「川平口説」（『南島歌謡大成IV』口説 1）は川平村の風物を次のように讃美している。

「1. 浮世に 名立つ 川平村／島ぬ 流れや 南北に／黄金お山の その中に（中略） 3. 実や 豊かぬ 島やらん／野山 田畑 入江も あり／きふわぬ 流りゆ 見渡しば 4. 真謝と 仲筋 打ち渡して／彼方 此方ゆ 見渡しば／民ぬ 竈ぬ 賑わいて（中略） 6. 群星御嶽に 山川え／赤い宮鳥 観音堂 エイ／御守護 賜り 有難い／千秋万歳 目出度けれ」。川平の村の岡に立って四方を見はるかして作ったのであろうか。「前に於茂登の連山を見、集落は南北に位置している。すぐ前にはキファの湾（川平湾）が青々と水をたたえ、真謝や仲筋の集落が湾の向う岸に見える。そして川平の村内は、^{ユブシイオン}群星御嶽、山川御嶽、赤イロ目宮鳥御嶽、観音堂の神々の御守護を受けている」と歌っている。川平は歌謡語として「川平、川平、^{かびいら}かびら、かびらむら」等と表記されている。

42. かみんぐばた（亀久畑）

与那国島の地名。島の中央部よりやや南に寄ったあたり、ドウナン岳とインビ岳に挟まれた地域である。インビ岳に寄った所がウイミグチである。農村の男女の直截的で健康的な恋の手管を披瀝する「かみんぐばた〈どんた〉」（『南島歌謡大成IV』ユンタ 233）は「1. かみんぐばた／ういみぐて／ぬぶりょうり 2. うるぢみや／ばがなちや／なりょうりば 3. みやらびば／かぬさすば／まりひょうり 4. うぶまちぬ／ながまちぬ／むながに 5. かたてしや たぐさ とり／くぬてしや くびば だき」〈亀久畑、ウイミグチに登って、初夏、若夏になったので、乙女、愛しい人を連れて、大田・長田の真中に、片手では田草をとり、この手では乙女の首を抱き〉と始まる。歌はその後、日没になって、女が男に道づれを頼み、ついには自分の寝所まで男を誘

い込んでゆく、という風に展開する。亀久畑は、近年のサトウキビへの換作にいたるまで水田であった。田でありながら畑と呼ばれたのは、「往昔は畑であったものが、その後に田圃も開拓して『亀久^{マシイ}舛』と称えたのであるが、元来の呼称であった亀久畑と、後に開拓した田圃をも併せて、称するようになったとの事である」。また、「亀久舛（田）の面積は、約 30 アール位で、畑も 30 アール程ある」（喜舎場永珣『八重山民謡誌』48 頁）という。

43. からだき（カラ岳）

石垣島の北東部にある禿山。標高 136m。字白保より星野・大里方面に到る途中にある。旧桃里村の前方に位置している。その名称は「枯岳。空岳」とも書かれ、いずれも「草木なきが故に云ふ」（宮良当壮『八重山語彙』65 頁）。「やうさて節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌 62）に「1. 桃里てる 島や／果報のしま やれは／から嵩は 前 なし／おやき繁昌 2. から嵩に 登て／押し下り見れは／稲・粟のなをり／扱見事」〈桃里という村は果報な村であるので、カラ岳を前にし、富貴繁昌している。カラ岳に登って、下方を見下ろしてみると、稲・粟の稔りはさても見事である〉と歌われている。桃里村の人々にとっては重要な岳であったようだ。現在は牛の放牧が行われている。なお、目下、立案計画されている新石垣空港は、カラ岳の東麓から海岸部に建設されるという。カラ岳の将来が注目される。

44. がらだき（ガラ岳）

比定地未詳。石垣市字名蔵あたりにある山の名。「まやゆんた」（『南島歌謡大成Ⅳ』ユンタ 17）は、「1. 大岳ぬ ^{うふだき}すばなんが 2. がら岳ぬ くしいなんが」〈大岳の側に、ガラ岳の後に〉と始まって、この地に子供を生みおいた母猫が、あまりの出汁の欲しさ^{だし}に名蔵川の河口周辺の砂地である大潟原^{ウフカタバル}に下りて漁り^{いざ}をするうちに、石垣四ヶ村の士族の青年に捕えられてしまうという、寓意的な歌である。この歌に出てくる大岳が「元名蔵の後方にある岳で高さは 98 メートル」（喜舎場永珣『八重山古謡』上巻 80 頁）であること。また、名蔵川河口周辺である大潟原^{ウフカタバル}が歌われていることなどから、ガラ岳が、名蔵付近にあるらしいことが推察される。喜舎場永珣は「コイナーユンタ」（『八

重山古謡』上巻 151 頁) に「1. ガラ岳ヌ^{ダキ} 後ナガ／大岳ヌ^{クシイ} スバナガ 2. 大アコウヌ 生ヤリ／実リアコウヌ^ナ 差シヨリ」〈ガラ岳の後に、大岳の側に、大アコーの木が生えていて、実アコーの木が生えていて〉とある「ガラ岳」を「名蔵村のガラ岳」と訳しており、ガラ岳の所在地を名蔵と明示している。

45. かんぬんどう（観音堂）

石垣市川平の川平公園入り口にある。木造瓦葺きの小堂宇に仏像を祀ってある。観音堂は首里王府時代にあつて、海上交通の平安祈願をこめて沖縄各地に造営された。川平の観音堂は川平湾内のキファ湊を眼下にする隆起した石炭岩台地に建てられているが、これはいうまでもなく、ここが、キファ港に出入りする船舶の航海の平安を祈願する適地であったからであろう。堂造営の由来は、キファ湊で風待ちしているうちにあわや船に乗りそこねようとした寺僧が、神仏の力によって船を港に差し戻し、無事乗船。沖縄島に帰ることを得た。この時の神仏の加護に報ずるため、この地に観音堂を造営したもの、という。戦前にあつては出征兵が必ず参詣し、またその家族が兵士の無事を祈願する聖地であった（『川平村の歴史』74 頁）。川平村を讃えた「川平口説」（『南島歌謡大成Ⅳ』口説 1）に「6. 群星御嶽に 山川え／赤い宮鳥
観音堂 エイ／御守護賜り 有難い／千秋万歳 目出度けれ」と、群星御嶽^{ユブシイ}、山川御嶽、赤イロ目宮鳥御嶽とともに村を守護する聖地として歌いこまれている。なお、石垣島南西部の富崎にも 1742 年、順天氏西表首里大屋子の手によって^{カンダンドー}観音堂が創建されている（『球陽』234 頁。「きふあ」の項参照）。

46. ぎしゅくおん（地城御嶽）

石垣市字平得の北方約 3 km の地、バンナーヤマの南麓の平原・地城にある御嶽。平得村・真栄里村の人々の尊崇する聖所である。御嶽創設の由来は『八重山島大阿母由来記』に「上古神代之時悪鬼那嘉那志弁之御嶽御いべ御三休之内御壺体は御欠無之に付不思議成事にて國中騒動仕さかし奉り候得共不相知候処きまもの御みすすりに是より南方八重山と申島に御移り被成候其島之内白鷺多く集り居所に御栖ひ悪鬼納嘉那志八重山御守被成候由御みすすりに付尋来候得は地城に白鷺多く集居右之御いべ有之候付則霊地に仕候其後悪鬼

納嘉那志を御主に拝為申由伝有之候依之御使者御在番衆御下着被成候時初て御拝被成候事」(『南島』第1輯23・24頁)とある。現在は平得村より司(神女)が出ているが、古くは真栄里村の御嶽であった。真栄里村の旧集落が地城御嶽の南方にあって、この御嶽をクサティ(腰当て)にする形になっていたらしい。真栄里村の馬補佐は毎朝この御嶽に詣でて、逃走牛馬の害のないように祈願したものという(八重山歴史編集委員会『八重山歴史』176頁)。

平得村の司が年頭に捧げる願い口(『南島歌謡大成IV』ニガイフチィ39)は「きそくおがん かんぬまいぬ まいんたかい かんぬしえー まいりきったゆ／くじゅぬ とうすゆ ぶじっ に うつなしめとーうり あらたまる くんどうぬ いいとうしゅ むかいしめたぼうり」(地城御嶽の神様の前に神主は参上しました。去年の年を無事に過ごさせて下さり、新たまる今度のよい年を迎えさせて下さい)と始まっている。地城御嶽の信仰的位置の語られた詞章といえる。地城御嶽の神名・イベ名は五つあるが(宮良安彦「平得部落ギシュク御嶽の年中の願いごと」『沖縄文化』29号38頁)、その一つが「オモトティラスヌカミ トゥス」である。この神名はオモト岳の水の神に因んだものである。「新本節」(『同上書』節歌補遺29)は「1. 地城御嶽^{あらんとうぶしい}ぬ 親神／^{うやがん}神元ぬ^{かんむとう} 大主^{うふぬしい} 2. 雨給うり^{あみたぼ} 大主／^{うふぬし}水給うり^{みじいたぼ} 親ぬ神^{うや かん}」(地城御嶽の親神、神元の大主、雨を下さい大主。水を下さい親神)と始まる雨乞いの歌である。地城御嶽と水神との関わりが端的にあらわれている歌謡といつてよい。この御嶽のおかげで、一般の人々は遠いオモト岳まで行かずに雨乞いの祭儀をとり行うことができるようになったという(八重山歴史編集委員会『八重山歴史』175頁)。

この御嶽は「キソクオ(ガ)ン」「チソコオ(ガ)ン」とも謡われる。

47. きだむりいばか(慶田盛パカ)

石垣市字新川を構成するパカ(住居区画)の一つ。方音でキドゥムリハカと称される。新川村は七箇のパカで構成されるが、このパカは村の中央部より東側、村の信仰の中心地である真乙姥御嶽を腰当てにして南方に延びている。このパカのトゥニムトゥ(宗家)は伊良皆家である。「屋敷願の祝詞」(『南島歌謡大成IV』ニガイフチィ23)は「うーとーどう、きゅーぬ 二月八日

いいぴにち、かいぴ日なんが、あらかー きだむりばか四十三番地ぬ、やしきぬし、やーだいしょー、とらでいまり、うとうくまり、みやぎしんばんぬ、くぬ なんちゃやしき、くんがにやしきぬ にがい あぎるんで」〈あー尊今日の二月八日のよい日、清らかな日に新川、慶田盛パカの四十三番地の屋敷主、家大将、寅年生まれの宮城信範のこの銀の屋敷、金の屋敷の祈願を上げると〉と始まっている。

48. きふぁ（キファ港）

石垣市川平にある。川平湾は古くはキファンナトゥと呼ばれていた。キファは川平湾周辺を指す地名であるが、小字大兼久・内原の海浜をキファパマと呼んでいる。川平湾は湾口に小島^{クシマ}はじめ多数の離れ島があり、このため、湾内は風波がおだやかである。湾内の水深もあり、船舶の停泊には適していた。王府時代にあって「沖縄上国旅は、必ずいったん川平港に入港し、気象状況を見定めた上で再出発する慣例になっていた」という（喜舎場永珣『八重山古謡』上巻 341 頁）。川平で謡われてきた「ひせにあよう」（『南島歌謡大成Ⅳ』アヨー 2）は、「イセ二岡の頂に登って、キファ^{フチ}口（港）を見上げると、貢物を積んだ八重山の公用船がもやい綱を張って停泊している。帆柱を立て、羽のような帆を張って風を待っている。上国の旅には柔らかな南風を受け、帰郷の旅には和やかな北風を受けて愛する者の所に戻ってくる」と、停泊船の平安を予祝した内容を謡っている。

キファ津は王府文書に「川平津」「川平津口」と書かれ、首里王府によって石垣島登野城の美崎津、西表東部・高那村の西方に位置するユチン津とともに重要な津口（港）に指定されていた（「富川親方八重山島諸締帳」『石垣市史叢書』1 巻 56～60 頁）。

キファ港は古謡の中では「キフワ、キフワフチ、キワ港」と謡われ、「カビ^{フチ}ラ口^つ」とも対称されている。「かんぬんどう（観音堂）」の項参照。

49. きんぶたき（金武岳）

石垣島北部にある山の名。標高 201 m。大浜村に伝えられる雨乞い歌「すばんがに^{ふち}節」（『南島歌謡大成Ⅳ』ニガイフチィ 53）は、雨を降らせる水神が

黒雲とともに石垣島の北方からやってきて、雨を降らせるようにと祈った呪謡だが、この中で「水神の最初の登りは、安良岳^{やしら}にお登りになり、安良岳には根を下ろさずに、それからの登りは、金武岳^{きんぶ}にお登りになり、金武岳には根を下ろさずに、それからの登りは、大岳にお登りになり、大岳には根を下ろさずに、それからの走り下りは、美しい低地^{しなんがーら}に下り、(中略)七川原に根が下りて」とある。水神は先ず平久保半島の安良岳に降り、次に金武岳、そして大岳（ウムトゥ岳とされる）に降りるが定着せずに、水源の地とされる七川原^{ナナンガーラ}に行き着くことになっている。ここにあげられた山々の対語はすべて「かんぬたき〈神の嶽〉」となっている。それからするとこの山は石垣島北部にあって、信仰の対象となっていたことが考えられる。

50. くいぬばな

竹富町新城^{バナリ}の土地島の西北部にある小丘陵。新城の土地・下地島ともに平坦な島であり、山と呼ばれるものはなく、この「はな」（端）が高所に属する。「くいの花節」（『南島歌謡大成IV』節歌 42）に「1. こゑのはな 登て／浜崎よ めりは／まかか 布晒し／見物^{みもの}だいもの」〈クイの端に登って浜崎を見ると、マカ女の布晒しの見物であることよ〉とある。「こゑのはな」は方音でクイヌパナと呼ばれる。その語源については以下の諸説がある。その一つは「往古『クイヌ武士』と称する酋長がその側方にいて、自然の丘陵を基礎にし、更に大石を運んできて積み上げ、土を盛り上げ、見張台に眺望台を兼ねた頂をつくっていた。その当時、波照間島の酋長とも戦って勝利をおさめたと伝えられ、この酋長が請地（コイジ）をして築き上げた『請^コいの端^{ハナ}』からきた」。「大浜祖良古老は、『クイヌ武士』酋長が『請地^{コイジ}』して築いた岡（盛り）の端^{バナ}であるから、この酋長の名を取って『クイヌ端^{ばな}』と命名されるようになったと伝承せられた」とする説（以上、喜舎場永珣『八重山民謡誌』267 頁）。第2の説は宮良当壯の所説で、「此地名に就て従来『恋の花』と記す者ありしが不可なり。パナは陸地の高き所にしてハ（端）に『ナ』の接尾語の結びし語なり。縦には上端なれども、横には岬などの意にも用ふ。クイは『越え』とも見ゆれども此地を実地に見れば越ゆべき所にはあらず、物見台やうに出來たる所なり。或人は地請ひの請ひなりと云えども、これに賛意を表し難し。

クイはユクイ即ち憩ひの略なるべし。それ故クイヌパナは『憩ふべき高き所』の義となる」（宮良当壮『八重山語彙』74・75頁）という説（喜舎場の「請ひの端」説、宮良の「憩いの端」説は相方によって否定されている）。ところで、安里武信『新城島』^{パナリ}（4頁）に次のような注目すべき記述がある。即ち「クイヌパナ（地名・景勝地として有名）一帯には、『クイ』という小さな部落があったように伝えられている」という。クイという小部落があったとすると、前記の大浜祖良翁伝承の「クイヌ武士」という人物のクイという名称についても納得がゆく。すなわち、クイの部落の首長が「クイヌ武士」であったのである。これらのことからクイは新城上地島の古地名であり、そこにある端がクイヌパナ（クイの端）と称された、と考えることができるように思われる。

51. くーしく（小城）

竹富町竹富島の地名。島の中央部よりやや北方、玻座間村の後方の小丘上にある。石炭岩の石垣を数メートル台形状に積み上げたムリ（盛り）があって、これがクスクムリ（小城杜）である。方音ではクックバーという。八重山における穀物栽培神話の舞台で、穀物の種子を携えて来た神は竹富島のこの地に登って、竹富島には特に優れた穀物・麦の種子を授けたという（上勢頭亨『竹富島誌—民話・民俗篇—』3～6・152頁）

ムリの上部は平坦に均らされ、烽火の監視所であったことが分かる。この火番盛^{ヒバンムリイ}は、正保元年（1644）尚賢王時代に火番所として建てられ、海上の監視や出入りする船の通報のため烽火を揚げたという（八重山歴史編集委員会『八重山歴史』205～207頁参照）。おそらくは、小浜島や黒島、石垣島の屋良部半島方面の烽火を受け継ぐための施設であっただろう。「竹富口説」（『南島歌謡大成IV』口説13）に「2. 波座間小城^{はざまくうしく} 走り登てい／四方ぬ^{はぬぶ} 景色^{よもけしき} ゆ^{なが} 眺むれば／心ゆたかぬ^{こころ} 頂の上^{ちじうえ}」〈玻座間村の後ろの小城に走り上って、四方の景色を眺めると、いかにも心豊かになる頂の上である〉とあるのは、この岡とそこから眺望する景色の良さを讃えたものだろう。クースクの隣所には幸本御嶽^{こんとうおん}があり、玻座間集落周辺には世持御嶽、弥勒奉安殿、慰霊塔、忠魂碑、頌徳碑などがある。また、玻座間御嶽が世持御嶽の左方にある。こ

の一带は、村の信仰及び祭儀等の中心地となっているわけである。

52. くばがーむら（久場川村）

石垣市字川平を構成する二つの集落のうちの一つ。「久場川」は「古場川」とも書かれる。近世初期より始まった川平の九つの小集落の移動は明治 42 年には終了した。その結果、仲間、大口、仲栄、田多、西村、慶田城、玉得の 7 村は久場川と内原の 2 村に吸収合併された。久場川村は、川平村の発祥の地とされる仲間村の五つの^{ムトゥヤ}元屋が移転したことにより、親村と称される。また、地理的に内原村より上方に位置するので「上の村」とも称される。現在、久場川村の二・三男の分家は内原村の方に伸び、ここには家元（本家）だけが残る傾向にある。節祭の^{シチィ}真世加那志は内原村とは別で、一般にこの村の真世加那志の神は女性とされる。真世加那志の^{カンフチィ}神口にも差異がある。久場川村の神口は、1. 大年（豊饒の年）の神の来臨、2. 田畑への真世加那志の来臨、3. 畑の作物（麦・粟・稲・黍・甘藷・赤豆）の豊穰、4. 命果報（長寿・健康祈願）、5. 子孫繁昌、6. 御用布完納、7. 牛馬繁昌、という順で、村落共同体とその成員の果報を予祝するものとなっている（『南島歌謡大成Ⅳ』カンフチィ 1. 「久場川村のまーゆんがなしいの^{かんふちい}神詞」参照）。

53. くばんとうおん（小波本御嶽）

石垣市字登野城にある。方音でクバントゥオンという。現在は御嶽の付近まで学校や諸競技場、住宅が進出し、かつてのような神さびた聖地らしい雰囲気はうすれつつある。嶽域はそれ程大きくはない。御嶽の周囲はかつては石垣が積まれていたらしく、現在も石積みを確認できる。鳥居などの建造物はなく、すぐに神庭である。神庭には建造物はなく、奥処にイビがある。イビと神庭の境界を示して石垣が積まれ、イビ正面の部分で石垣が中断、そこに石製の香炉が置かれている。イビにはマーニ（クロググ）や灌木が茂みをなしている。

御嶽の由来は石垣島における稲作の起源神話を語るものである。すなわち八重山に稲の未だ入らない時代にアンナン・アレシンの国からタルファイ、マルファイの兄妹が稲の種子を携え八重山に来た。タルファイはクバントゥ

御嶽後方のクバントゥ原で島民に稲作を教え、マルファイは収穫された米の調理法を教え、稲作農耕をひろめた、というもの。この由来に従って、登野城の種子取り祭（播種儀礼）はこの御嶽と隣所にあるイヤナシ^{オシ}御嶽を中心に行われる。また、両御嶽は豊作を祝うプーリ^{オシ}の御嶽プーリ^{オシ}の舞台の一つでもある。ちなみに、本御嶽はタルファイ、マルファイ兄妹の屋敷跡、イヤナシ御嶽はマルファイの墓と伝えられている。

この御嶽の神は水神としても崇敬されている。「くばんと節」（『南島歌謡大成IV』節歌補遺 25）に、「くばんとの いやなし／うしやぎ山 まるはい／雨ぬ主 いやなし／水ぬ主 まるはい／雨 給ぼり いやなし／水 給ぼり

まるはい」〈小波本御嶽のイヤナシ神よ。大石垣御嶽のマルファイ神よ。雨の主であるイヤナシ神。水の主であるマルファイ神。雨を下さいイヤナシ神よ。水を下さいマルファイ神よ。〉と謡われている。クバントゥ御嶽の神を水神とする信仰は八重山では広く伝えられており、平得、竹富、波照間などでも雨乞い歌の中にそれが見出せる。歌謡中では、「くばんと、くばんと、久場本、小波本」などと表記されている。

54.くも一ま(小浜)

竹富町小浜。小浜島。西表古見の村人が移住してできた村落という伝承がある（後述）。しかし、往古、ニシン田の北側にカニク村、西海岸近くにヤサキ村、仲山御嶽の前方にクファンテ村という集落があったという別伝承もある（山城浩『小濱島誌』76 頁）。山城氏によると、上記の3村を現集落の位置に集合せしめたのは、加武多という百姓出身の人で、その人が小浜目差在任中のことという。島には、仲山御嶽、イリヤマ、ナカンドゥ御嶽、嘉保根御嶽、アールムティ御嶽、コーキ御嶽、カンダカー、川田御嶽、ユンドレスクといった御嶽がある。島の祭祀・習俗の中で特異なものは豊年祭のアカマタ・クロマタ祭祀である。小浜のこの祭祀は古見から伝えられたものとされる。このことは小浜が古見の分村であることの一証とされる。

小浜島の中心は大岳で、集落はその麓に開けている。「小浜節」（『南島歌謡大成IV』節歌 21）はそれを「1. 小浜てる 島や／かほの島 やりは／大嵩は 後当／白浜 前なし」〈小浜という島は、果報な島であるから、大岳を腰

当て＝後ろ盾にし、白い浜を前にして」と歌っている。

小浜の異称は、「なかすに」「なかんすに」「なかんずに」で、例えば、次のように用いられる。「1. 大国ぬ 福祿寿 小浜村いもちスリ（中略）。3. ばか 小浜上なか／なかんずにぬ 上なか スリ」〈大国の福祿寿が小浜村においてになり、我が小浜の上に、仲宗根の上に〉（『同上書』節歌補遺 42「福祿寿」）。

小浜は方音で「クバマ、クモウマ、クンママ、クママ等と発音しているが、島の古老達は、『クママ』が正しいと教えている」（喜舎場永珣『八重山民謡誌』277頁）。また、その語源についても、「小浜は最初古見から分村してできた小村であったので、『クンママ』すなわち『小さい古見村』の意で称えられていたが、これが縮約されて、『クママ』となり、小浜の漢字^(ママ)によって、クバマとか小浜に転訛してきている」（喜舎場『前掲書』277頁）という。

55.くらぬばま(小浦の浜)

西表島の北部の海浜名。「鳩間島の南方対岸、西表島の北海岸で、鳩間から約6キロ位にある白砂の浜で、鳩間島から展望すると宛然上布を引き延べたように真白く見える」（喜舎場永珣『八重山民謡誌』328頁）。「鳩間ゆんた」（『南島歌謡大成IV』ユンタ 154）に「5. まんが はいばた みわたしば／浜ぬ みるすや くらぬ浜 6. かいしゃ まりだる くらぬ浜／しるさしいでいたる しるはまゆ 7. くらぬ浜から かよる ぴとうや／うらぬまいぬ ぴとうぐくる」〈真向うの南端を見渡すと、浜の見えるのはクラヌ浜。美しく造形されたクラヌ浜。白く形成された白浜よ。クラヌ浜から通う人は、蔵元の前の大路を歩く人のようだ〉と謡われている。クラヌ浜の美しさを叙景的に讃えただけのようにみえるが、その深層には、船浮・上原人の圧迫のため、未開の原野であったインダ、福浜、シィザパナリに新たに開田するという痛苦と、それが報いられて豊かな実りを得てクラヌ浜から稲穂を積みだす喜びがある。今も、クラヌ浜の白砂の輝きは、西表島の山なみの濃緑色を背に美しく映えているが、これは鳩間島の人たちが、豊稔の喜びのなかで讃えた美しさの一部である。鳩間島から出作りして開いた水田は今は殆んど耕されないばかりか、アスファルト道路に踏み固められてしまったものもある。

クラヌ浜の賑わいは現在はみられない。

56.くるしむら(黒石村)

石垣市字大浜のうち。明和の大津波（1771 年）の後、南大浜村、フルスト村等と共に大浜村に吸収合併された。「くるし」の名は、黒石御嶽にとどめられ伝えられている。この村の村敷は「コルセ御嶽の前方周囲子の方二組東よりと三組の西よりの一角」で、「黒石屋の北角に黒石森があったと伝えられている」（大浜老人クラブ長寿会編『大浜村民俗誌』5 頁）。大浜村の豊年祭に謡われる「東節」（『南島歌謡大成Ⅳ』ユンタ 109）は、「豊饒の国のある東方から船がやってくる。どんな船かと思うと、船頭のいない船だ。船には粟俵、米俵を積んでいる」と謡い、この豊饒の世が「9. 大浜村^{ハイホウマ} 上なが^{グリシ} 10. 黒石村^{ニヌ バア} 上なが^{ブーリィ}」〈大浜村の上に、黒石村の上にやってくる〉と続ける。ここでは黒石村が大浜村とパラレルな関係で謡われている。「雨乞い歌」（『同上書』雨乞いの歌③アマグイ 4）にも「8. 七くむりぬ ある 水 9. 大浜村 上 10. 黒石村^{くるしむら} 上^{うい} 11. どうりどうりし 給ぼらる」〈七小堀にある水を大浜村の上、黒石村の上にドーリドーリと下さい〉とあって、やはり黒石と大浜が並んで謡われている。このことから、黒石村が大浜村の中で大きな地位を占めていたのがうかがえる。

57.くん(古見)

西表島東部にある集落。八重山でも有数の古邑で、古くは八重山の文化・経済の一つの中心地として栄えたが、現在は激しい過疎の波にあらわれ、寒村化してしまった。古見は北方に 470m の古見岳、西方に 421m の御座岳^{ゴザ}をひかえ、これらの山に連なる山岳がすぐ背後まで迫っている。また、村の前には前良川^{マイラ}、後良川^{シーラ}の二河川が流れている。このような立地を「古見の浦」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌 43）は、「古見の浦の 八重嵩。八重かさひ 美よ底／いつん みほしやわかり」〈古見の浦の八重嵩、八重に山の重なっている美与底。いつも見たいものだ〉と歌っている。また、古見と他の集落との交通を遮断する前良・後良の二つの川に石橋を架けたことを歌ったのが「橋よば節」（『同上書』節歌 51）である。同歌の大意は次のようなものである。「古

見の浦は昔から河口にひらけた自然な湊であった。夏になれば南風、冬になれば北風で河口に波がたって渡河に難渋していた。そのため、古見の御役人様が石垣島に渡り、国王様に窮状を訴えたのだ。願いは容れられて、八重山中の人々を寄せて、女達には石を運ばせ、男達にはそれを積み上げさせた。このようにして出来た橋の頑丈さよ。美しさよ」。つまり古見は重畳たる山岳を背に、二つの河川に挟まれた地域に立地していた。この悪条件を克服するために王府に訴え出て八重山中から夫役を募り、前良橋（幅 4m, 長さ 227m）、後良橋（幅 4m, 長さ 380m）の 2 つの石橋を 1715 年に完成したのである。

古見が往古にあって大邑であったことは、頭職の次位である首里大屋子職が置かれたことでも分かるが、次の歌もやはりそのことを知らしめる。すなわち、鳩間村の来歴を謡った「ばが鳩間じらば」（『同上書』ジラバ 71）で、「我が鳩間村の創建の初めは古見村の名子・属邑であった。そのため王府の巡見の役人が来るたびに、西表島の海岸沿いに古見村まで検査を受けにやっけてきていた」と述べているのである。この歌謡の伝承するところは古見村の一小邑として鳩間が組み込まれていたことを語っている。なお、鳩間村の新村建てのための寄人として「古見の浦のうちから 男衆八十を乞とり 女衆六十を乞い」（古見の浦の内から男衆を 80 人乞い取り、女衆 100 人を乞い）取ったことが「鳩間元じらば」（『同上書』ジラバ 70）には謡われている（「ばとうま」の項参照）。

ところで、古見村と造船との関わりは深く、スラ所（造船所）の跡が現在も確認される。しかし、歌謡では小浜島のアカマタ祭祀に謡われる「ふにのはりちゅら(さ)や こみふにど やゆる／うまの はりちゅらさや わーしゅぬ うまさ」（船の走りの美しいのは古見船である。馬の走りの美しいのは、我が主の馬よ）（『同上書』ユンタ 167 - (5)）という形で謡われるだけである。

古見の語源について柳田国男は、「海上の道」構想のもと、稲作＝米（コメ）→コミ（古見）と考えていたようである（柳田国男『海上の道』）。古見は歌謡では「古見の浦」と呼称されることが多い。また、古見の異称は「美^ミ与^ユ底^ス」である。

58.くんだき(古見岳)

西表島にある山で、標高 470m。西表島一の高山。西表島周辺の島から見ると先ず最初に目に付く山である。米作のために西表島に出耕している男性と竹富島に残っている女性との恋を謡った「真栄ゆんた」(『南島歌謡大成IV』ユンタ 180) には、この山が実に美しい景物としてとりあげられている。すなわち、「6. 古見岳^{くんだき}ぬ 八重岳^{やいだき}ぬ まういなか 7. 三日月^{みかしき}ぬ 若月^{ばがしき}ぬ 立ち^たちゅらば 8. 三日月^{みかしき}てい 若月^{ばがしき}てい 思い^{うむ}おんな 9. まさか^{まさかい}いてい 里主^{さとうぬし}てい 思い^{うむ}ひより」(古見岳の、八重岳の真上に、三日月が、若月がかかったら、三日月だと、若月だと思いなさんな。マサカイだと、あなたの恋人だと思って下さい) というものである。

また、この山は古くから、神の坐す聖山と考えられていたらしく、竹富島の「久間原御嶽願^{くまーらおんにがふち}い口」(『同上書』ニガイフチィ 74) に「22. 古見岳^{くんだき} 青木山^{あうきやま} 降り^うみそーる 大やん^{しゅ} 主やん」(古見岳、青木山に降りなさる大親、主親) と、古見岳に降臨する神を讃えることばが見えている。

59. けーんふち (喜屋武口)

黒島東南方にある津口。喜屋武口はケンフチィと呼ばれる。「口」(フチィ) はリーフがきれて、船舶の往来が可能となっている場所である。「南風保多ふんたか (ゆんぐとう)」(『南島歌謡大成IV』ユングトゥ 59) に、宮古島までガーラ玉 (勾玉) を買い求めに行ったパイフタフンタカが首尾よく目的を達して、意気揚々と帰島する場面がある。パイフタフンタカは船を操って「我島^{ばがしま} 生島^{まりしま}は 向し^{んか}／大島^{うふじま}ぬ 東^{あーる}はら 走来^{ばらしき}／喜屋武口^{けーんふち} 割口^{ばれふち} 入^{いり}んど」(我が島、生まれ島に向けて、大きな島の東側から船を走らせてきて、黒島のケンフチィ、バレーフチィの津口に船を入れる) ことになる。

ケンフチィをうたったユングトゥには他に「南の浦南崎」(『同上書』ユングトゥ 64) があって、それでは「我舟^{ばがふに}よ 我が舟^{とのふに}／殿舟^{とふに}よ 殿舟^{とふに}／あさらじるんぬん 乗^ぬすぬんかや(中略)／きや口^{ふち} 出^{いだ}しょうり／ばれふち いだしょうり／うぶとばる^{ばうし} 走^{ばうし}ようり」(我が船よ、我が船。殿の船よ、殿の船。アサラ瀬でも乗せないかな。ケンフチィから船を出して、バレーフチィから船出して、大海原を走らせて) とある。これからみると、ケンフチィ、バレーフ

チィといった津口は、黒島と外の島々とを往来するのに重要な役割をもった津口であったことが分かる。

60. さきだ（崎枝）

石垣市字崎枝。石垣島の西部、屋良部半島にある集落で、村そのものは石垣島の中では古い方に属する。「さきだ」はサキユダ（サキヨダ＝崎枝）の訛音である。サキユダは『おもろさうし』に出てくる「さきよた」と同じで、島の突端・半島が海に枝のように突き出ていることから、そう呼びならわされたものであろう。崎枝村の名も屋良部半島が地理的にサキユダとなっている故のものと考えてよい。

交通不便な往時にあっては、石垣の中心地への往還は困難をきわめた。

「大田節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌 57）は、そんな困難を省りみず、崎枝村の美女のもとへ通う石垣四ヶ村に住む士族を嘲る歌である。「1. 大田やのかたかもりやま／嵩かく道よ 通たす／たるか よやんと かよたる 2. 崎枝こやまの よやんと、宮童の つにやんと 3. 網張みぢゆや 潮や 満ち、やつと、かつとの、こいかた。」〈大田家の片禿げ者が嵩カク道を通ったのは誰の故に通った。崎枝のクヤマ女の故に通ったのだ。網張の滞は潮が満ちて、ようやくのことで網張を越えた〉。崎枝へは新川村北西方向から名蔵湾方面へ向かう嵩カクの山道を越え、網張の渦を渡らなければならなかった。このような難路を経て崎枝村の入り口であるトゥマタへ辿りついたのである。

崎枝村と近隣関係にあった村は川平村である。1727年の時点では川平村の小村であった。両村の人々の往来は種々の伝承を生んだ。その一つに「たていしばれあよう」（『同上書』アヨー 4）がある。この歌は村外婚の許されない時代の、崎枝村の娘と川平村の若者の悲恋を「4. 川平かい 越さでんきゃー 越さりいぬ／崎枝かい 越さでんきゃー 越さりいぬ 5. あんば しん／かんば しん ぬきらるぬ」〈川平に二人で引越そうとしても引越せない。崎枝に二人で引越そうとしても引越せない。ああしても、こうしても二人は別れられない〉と謡っている。

61. さきだおん（崎枝御嶽）

石垣市字崎枝にある御嶽。崎枝村の御嶽で、現在はオンヤー（拝殿に相当）の瓦葺きの建物がたち、奥の方にイビがある。「あかばれーゆんた」（『南島歌謡大成Ⅳ』ユンタ 89）に「1. あかばれーぬ みようまいぬ うはち 2. ばん ぶどぬ うきいなーたびば うきよーりど（中略） 4. なぐらおん ねがい しーなど いくんで 5. なぐらおん ねがい しーぬ むどりん やー 6. さきだおん ねがい しーなど いくんで」〈アカバレー家の、美御前家のウハチ女は、自分の夫が沖縄旅に出かけたので、名蔵御嶽に安全を祈願しに行くといつて、名蔵御嶽でお願いしての戻りには崎枝御嶽にお願いしに行くといつて〉とあつて、公用で首里へ上国する男の安全を祈願する御嶽であることが謡われている。これが『八重山嶋大阿母由来記』に「定納船両艘上下両度七嶽（美崎・天川・糸数・宮島・長崎・名蔵・崎枝の各御嶽—引用者注）御願」云々（『南島』第1輯 21 頁）とある「七嶽御願」である。この「七嶽御願」という祭儀が行われる御嶽であつたということからも、この御嶽の格が推察される。

62. さきやま・さきやーん（崎山）

西表島の西部、崎山半島にあつた集落。1948 年に廃村となつた。崎山村の創建は 1755 年で、「波照間島から 280 人、網取村から 63 人、かぬか村から 93 人、祖納村から 10 人、その他の村から 13 人、計 459 人」で始まつた（八重山歴史編集委員会編『八重山歴史』251 頁）。一番多数の人々が島分けの悲哀にみまわれた波照間人の中から、崎山村の創建とそこでの生活の一端を折り込んだ「崎山ゆんた」（『南島歌謡大成Ⅳ』ユンタ 141）が謡い出された。同歌は「1. ^{さきやま}崎山ぬ ^{あらむら}新村ゆ たていだす 2. ゆなぐぐち ^{ぐち}崎山口ぬ ゆやんどう 3. ぬばまじい かにくじいぬ ゆやんどう 4. たるどう ばき じりどう ばきで うもうだら 5. 女 ^{みどうな} むむ 男 ^{びふな} やす ばぎられ」〈崎山の新村を建てたのは、与那国津口、崎山津口の故に、野浜地の、兼久地の故にである。誰を分けるのか、いずれの者を分けるのかと思ったら、男の 80 人、女の 100 人が分けられた〉と始まる。ここには、崎山村の村建ての理由として、良港のあること、肥沃な土地のあることなどがあげられてい

る。これは首里王府の記録と合致する（『球陽』350頁。『八重山島年来記』76頁）。上記の理由の他に「西表島の西北部に村落がないために異国船の監視と難破船の救助のため」「波照間島の人口の調節のため」（『八重山歴史』251頁）の新村建てであったことも十分に考えられる。「崎山ゆんた」のその後の展開は「島分けを許してくれと頼むのだが、これは国王様の御意で如何ともしがたいとのことだ。天の雨なら笠や蓑で防げるが、国王の言いつけはどうしようもない。そういうわけで、嫌な崎山と思いつつやってきた。しかし、暮らすうちに崎山もなかなかよい所だ。そんな、ある祭の日、ユクヤ頂に登って憩っていると生れ島の波照間が見えるよ。ふとおこった望郷のはげしい思いに、島を見ようとしても涙で見えず、手に取ろうとしても島影が遠ざかって取れない。行こうにも波照間は船路であるから行けないよ」と、深い絶望感の吐露をなしておわる。この歌は、^{シイマバギ}島分けの悲哀を謡った代表的な歌であるが、その悲哀を一層深くしているものは、崎山という村が、多数の人生の努力の甲斐もなく、今はもう無いということであろう。

なお、崎山村の民俗文化については、川平永美述、安溪遊地・安溪貴子編『崎山節のふるさと—西表島の歌と昔話—』（1990年 ひるぎ社）がそのありし日の姿を伝えていて貴重である。

63. さきやまふちい（さきやま口）

西表島崎山の津口。港は、一般にリーフの切れ目（環礁の開口部）のあるところにつくられる。よって、港のことをフチィ（口）という。この港も、基本的には崎山の津口の事を意味するとみてよいだろう。崎山は、波照間島からの^{よせびと}寄人を中心として新たに創建されたものであったが、この地が新村の村敷として選ばれた理由の一つが、好い津口に恵まれているということであった。「崎山ゆんた節」（『南島歌謡大成IV』節歌補遺16）の冒頭にそのことが次のように歌われている。「1. 崎山ぬ 新村ゆ 建てたる 2. 与那国口 崎山港ぬ ゆやんど 3. 野浜地 金久地ぬ ゆやんど」〈崎山の新村を建てたのは、与那国津口、崎山津口があるからで、野浜地、兼久地があるからで〉。津口・港に恵まれていることと肥沃な農地を有していることが村建ての第一の要件だったことがよく分かる部分である。

64. さふしま（サフ島）

竹富町黒島の異称。八重山の島々はそれぞれ異称をもっている。例えば、竹富は仲嵩^{ナカダキ}または仲立^{ナカダテ}、小浜は仲宗根^{ナカンズニ}、波照間は下八重山^{シムヤイマ}、鳩間が友利^{トウムリ}というようにである。異称の命名法については今は不明とせざるを得ないが、美称あるいは島の象徴あるいは特徴となるものを異称としたことは推測できる。

サフ島及びフシマ（黒島）という名称について喜舎場永珣は「サコ島である。サコは石の島すなわちサンゴ礁の島の意である。黒島の方言は力行が八行に転ずるのでサコがサフに転じてサフ島になり、サを省いて『フスマ』になっている。それでフスマとサフジマとは同義語である。」とし、「サフ島とサキ島と誤解する者が多い」と指摘した（喜舎場永珣『八重山古謡』下巻 185 頁）。この語源説のうちフシマ（黒島）がサフ島の転訛であるというのは誤りで、フシマは黒島からの転訛である。サフ島の語源について「サコ」を石とみる点にも疑義がある。八重山方言で石はイシ、イチ、イチブグ、ウールであり（宮良当壮『八重山語彙』乙編 59 頁）、サコ・サクなどはみえない。サコ・サクは迫の意（小浜島・サコーラ《坂》）か、サクマイ（粳米）などにみられるサクの例が考えられるが、黒島が隆起珊瑚礁によってできた平坦な島であるから、迫・坂などを冠することは考えられない。これに対し、サクマイなどのサクは「もろい」「粘り気がない」等を意味する形容詞サクサン（首里）、サクセン（今帰仁）、サクハン（久米島）の語幹であり、サフ島のサフは、このサクの転訛とみられるのではないかと考えたい。喜舎場永珣が「サコは石の島」としたのは、黒島が水の乏しい「粘り気がない」サンゴ礁の島という点に着目したからではないか。

黒島は「7. 我黒島^{ばがふしま}や 干島^{からしま}やりば 8. さふ島^{しま}や 石島^{いしま} やりば」〈我が黒島は乾燥した島だから、サフ島は石島だから〉（『南島歌謡大成IV』雨乞いの歌③-15）と島人が認めるような水無し島の不便を永くかこってきたのであった。この点から、サフ島のサフは「粘り気がない」即ち、水気に乏しいというサンゴ礁低島の特性を表現した語と推察されるわけである。「サフ島」は「先島」「さく島」「作島」とかかれることもあるが、これらはいずれも、「サク島」の「サフ島」となる以前の音「サク」の表記である。

65. ざらだぎ（座羅岳）

比定地未詳。石垣島内にある山の名。「こいなーゆんた」（『南島歌謡大成IV』ユンタ 6）に「1. 座羅岳ぬ ^{ざらだぎ}麓なが／大岳ぬ ^{あしい}側なんが 2. ばぬぎゃ木 ^{うふだぎ}ば ^{すば}植びゃとうし／香ばさ木ば ^さ差しとうし」〈ザラ岳の麓に、大岳の側に、バヌギヤ木（桑の木）を植えて、香ばしい木を植えて〉とある。これだけでは「座羅岳」がいくどこにあるか分からないのであるが、対語の「大岳」が一つの手がかりとなろう。大岳は「まやゆんた」（『南島歌謡大成IV』ユンタ 17）にも出ている山で、元名蔵村の後方にある（喜舎場永珣『八重山古謡』上巻 80 頁）というから、「座羅岳」も元名蔵村方面にあるかと思われる。「こいなーゆんた」系歌謡には、前掲の例にみえた大岳、ザラ岳という地名とは別に、ガラ岳、^{カラダキ}空岳の名もみえる。ガラ岳については前出の同項参照。^{カラダキ}空岳は石垣島の字桃里の前にある山だから、「こいなーゆんた」は桃里を中心とした歌と考える説もある（宮良当壮・宮良長包『八重山古謡』第 2 輯 77 頁）。

ところでザラ岳は、例示した「こいなーゆんた」とは別に「^{まや}猫ゆんた」（『同上書』ユンタ 7）、「ざらだぎいゆんた」（『南島歌謡大成IV』ユンタ 97）等の「^{まや}猫ゆんた」系歌謡にもみえている。ここで注目されるのは「まやゆんた」（『同上書』ユンタ 17）の物語の中心地が名蔵付近であることで、「^{まや}猫ゆんた」系歌謡に出る「座羅岳」は名蔵周辺である可能性がある。「座羅岳」の語源について宮良当壮は、「さら（沙羅）は『へご』の異名。『へご』の生えた山の謂か」とした（『八重山古謡』第 1 輯 20 頁）。

66. さんにぬだい（サンニヌ台）

与那国島の東部、東崎の南方にある景勝地。島の大地がなだれをうって海中におちこみ、太平洋の大波が岩石をかんで白い飛沫をあげるといった雄大な風景がひろがるところである。また、この地域は植物学上も貴重で「ヨナグニイソギク、ヒメサヤバナ、ヤエヤマスズコウジュの群落地帯である」（与那国町文化財調査委員会『与那国町の文化財』2 頁）。「与那国^{どうなん}すんかに」（『南島歌謡大成IV』スンカニ 6）に「15. むちんどうりかでいぬ にちなたや／うぶはいむとう さんにぬだいていんき／みやらびとう たいんとう／ながんかいとう んたいんとう」〈もしも、風ぎ風が北風になったら、ウブハイム

トゥ、サンニヌ台に行って、乙女と二人で、仲迎えと三人で」とあるのは、北風にのって石垣あたりからの船がやってくるのを心待ちにしている情態をうたったものであろう。船の出迎えにサンニの台に行くというわけである。

67. しいざばなり（下離）

西表島北岸の地名。鳩間島の人々が耕作した水田のある地域で、鳩間の人々が開墾した水田地帯であった。インダ、フクハマの東に位置し、鳩間島から6 km余の距離がある。「鳩間ゆんた」（『南島歌謡大成Ⅳ』ユンタ 154）に「8. いんだ 福浜 しいざばなり／ふのうらからや ましいぬじい 9. ふのうら人ぬ みる みる／^{ういばる}上原人ぬ しいく みる 10. 粟ば 作り なうらし／うんば 作り みーらし」〈インダ、福浜、下離は船浦よりはましな土地である。船浦人の見る目にも、上原人の聞く耳にも、粟を作っては稔らせて、芋を作っては稔らせて〉と謡っているのは、船浦・上原の耕地を追われ、インダ、福浜、下離に新しく耕地を拓かなければならなかった鳩間人の気概がこめられているといえよう。

68. しいさぶむら（白保村）

石垣市字白保。石垣島の東部に位置する村である。方音でシィサブ [sɪ̞abu] という。古い村で、白保・真謝の2村があったが、1771年の明和の大津波によって壊滅的打撃を受けた。その後、波照間島からの寄人により村が再建された。村には、^{マージャーオン}真謝御嶽、^{カチガラオン}嘉手苅御嶽、^{タバルオン}多原御嶽、^{バチローマオン}波照間御嶽等がある。波照間御嶽は波照間島からの寄人が波照間の^{アスクワー}阿底御嶽を分祀・勧請して建てたものである。村の創建説話は、『琉球国由来記』では宮良村の創建とともに説かれている。波照間御嶽を除く上記の御嶽も『琉球国由来記』では宮良村所属となっている。もとは宮良村と一つであったのである。

「しやんとうそれ節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌84）は「1. 白保てる 島や／果報の しま やれは／真謝ん井ば こしやて／おやき 前 なち 2. 野名森 登て／おし下り 見れは／稲粟の なをり／弥勒よかほ」〈白保という村は果報の島だから、真謝井戸を腰当てにして、富貴を前にしている。ユナ岡に^{ムリイ}登って下方を見下ろすと、稲粟の稔りは弥勒の世界報《豊年》〉であ

る」と歌っている。「白保節」(『同上書』節歌 27) に「1. 白保村 上なかい／みろくよは 給ふられ (中略) 5. 五日まり 御祝ひ／七日まり 御祝ひ (中略) 7. 真謝の主は つかいし／目差おやは つかいし」〈白保村の上に弥勒世《豊饒の世》をくださり (中略)、五日廻りの御祝いをする。七日廻りの御祝いをする。真謝村の御役人様をお招きし、目差役人様をお招きし〉とあって、白保村における真謝村の地位の大きさが知れる。

69. しーどうばる (水道原)

石垣島の南部にある原野。「しーどう原」の名は、水道^{シードー}に由来するものであろう。その水道とは、フナーシードー^{シードー}の名で呼ばれる、石垣市字平得の後方から西方・字新川の海岸へ流れこむ人工の河川である。自然の凹地帯を掘削したもので、八重山の農業史上でも特筆される工事であった。シードー原はこのシードー^{くばんとうぶしい}一帯の原名であろう。「久場本節」(『南島歌謡大成IV』節歌補遺 31) は雨乞い歌で、久場本御嶽のイヤナシィ神に雨乞いの祈りを捧げたその夜から大雨が降ってきて、「給うられぬ 余^{あま}いや 6. 水道原^{シードー} 溢^{あぶ}らし 溢^{あぶ}らしぬ 余^{あま}いや 7. 平田原^{びいさたばる} 溢^{あぶ}らし 溢^{あぶ}らしぬ 余^{あま}いや 8. あぶな^{あぶ}一井戸^{がー}ば 溢^{あぶ}らし…」〈給わった雨の余りは、水道原を溢れさせ、水道原を満たした余りは、平田原を溢れさせ、その余りは、アブナー井戸を溢れさせ…〉と、山野に溢れる程の降水のあることを幻視的に謡っている。この歌に出てくる平田原は石垣島の東南部を流れる宮良川の中流域にあるから、シードー原の位置についてもおよその見当はつけられるだろう。

70. しいむぢい (下地)

竹富町新城を構成する二島のうちの一つ。もう一つの島は上地^{カンヂィ}という。上地と下地は小海峡によって隔てられている。島の最高所は標高 21m。島はほぼ円形をなしている。「島廻りじらば」(『南島歌謡大成IV』ジラバ 100) に「7. 新城^{ばなり}なは ぬしきやまヨホ／下地^{しむじ}なは 乙女^{みやらび}ヨ 8. ぬしきやまの 生^{うま}りやヨホ／乙女^{みやらび}の う産^{いきぬみじ}やヨ 9. 池の水^{まり} 生^{あう}ばしヨホ／青だまり^{あう} う産^{あう}ばしヨ」〈新城の中に生まれたヌシキャマ女、下地島の中に生まれた乙女。ヌシキャマ女の生まれは、乙女の生まれつきは、池の水が淀んだ色のような生

まれをして、池の水の青溜りのような色の生まれつきで」と謡われている。

^{バナリ}新城の対語として下地が謡われるのはこの他に「^{バナリ}ぱなりちい^{ばがむぬ}ちい^{しいむじい}や^{みやらび}一みゆんた」(『同上書』ユンタ 218)がある。その歌は「1. ^{バナリ}ぱなり若者 ^{バナリ}下地女童ぬ」
〈^{バナリ}新城の若者 ^{バナリ}下地島の乙女が〉と始まって、下地島の若者たちが新城特産の「ちい^{ばがむぬ}ちい^{しいむじい}や^{みやらび}一み」〈土甕〉を製造し、隣島の黒島の保慶村に交易にでかけることを活写する。島々の生産と経済交流を考えるうえで貴重な伝承である。

下地島が^{バナリ}新城の対称とされるのは、この島が^{バナリ}新城の主島であったからである。^{アラスク}新城を上地・下地の総称としたのは、下地島の中央部にあった^{ナハスク}中城の名が、尚王朝の歴代長子の名に冠せられるため、同名の部落名を憚って、下地島の南部にあった^{アラスク}新城の名が選ばれたという。下地島には^{ナカスク}中城、^{アラスク}新城の他、ウイスク、フザトゥ、フクバレー、アラスウビ、ナアーシキの5集落があったという(安里武信『新城島』3・4頁)。

71. しいむぬむら (下の村)

石垣市真栄里の異称。真栄里と平得は東西に走る道路一つで区画され、道路の南方が真栄里、北方が平得である。地形的には真栄里側が下がっており、このため、真栄里を下^{シイムムラ}の村、平得を上^{ウイムムラ}の村と称しているようである。「あかんに田ゆんた」(『南島歌謡大成IV』ユンタ 90)では、「1. ^{シイムムラ}ぴさいむら ^{ウイムムラ}ういぬむら ^{シイムムラ}かにびらヨー 2. ^{ウイムムラ}あかきんま ^{シイムムラ}くらば ^{ウイムムラ}かけヨー ^{シイムムラ}ぬりば ^{ウイムムラ}しヨー 3. ^{シイムムラ}なぐら田かい ^{ウイムムラ}あかんに田かいヨー ^{シイムムラ}ぬりば ^{ウイムムラ}しー 4. ^{シイムムラ}まじどむら ^{ウイムムラ}しいむぬむら ^{シイムムラ}いつけーま 5. ^{ウイムムラ}くるきんま ^{シイムムラ}くらば ^{ウイムムラ}かけ ^{シイムムラ}ぬりば ^{ウイムムラ}しヨー 6. ^{シイムムラ}なぐら田かい ^{ウイムムラ}あかんに田かい ^{シイムムラ}むかいば ^{ウイムムラ}しヨー」〈平得村・上の村の加仁兄は、赤毛の馬に鞍を懸けて乗って名蔵田・アカン二田へ行く。真栄里村・下の村のイツケーマは、黒毛の馬に鞍を懸けて乗って名蔵田・アカン二田へ向かって行く〉と、上の村と下の村の男女の野合とその結末を大浜村の男性まで登場させて謡っている。この3村の男女の関係はとりもなおさず、3村の近隣関係を語っていると言えるだろう。

72. しいむやいま (下八重山)

一般に波照間島の異称とされるが、波照間島の他、八重山、崎山、パイナー

ラヌ島の対語ともなっている。慣用的な観点からみると、波照間島との結びつきが一番のようである。「波照間の島節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌 38）に「1. 波照間の しまや／たんちゆ 名 とよまりい 2. 下八重山の 島や／たんちゆ 名 豊まり（下略）」〈波照間の島は誠に名高い島である。下八重山の島は実に高名な島である〉とあるのや、「崎山ゆんた」（『同上書』ユンタ 31）に「（前略）4. 波照間ぬ しむやいまぬ うつから 5. みどうな むゆ びふな やゆ ばきられ（後略）」〈波照間島の、下八重山の内から、女が6人、男が8人分けられた〉とあるような形である。この場合の「しむやいま」には、八重山の下の方という意味で、波照間島の地理的位置と呼応するところがあるといえよう。

次に、八重山と対語となっている例は「真乙姥ゆんた」（『同上書』ユンタ 55）で（「こいにや」（『同上書』補遺 1）は異名同歌である）、この歌の中で、首里の国王に拝謁した真乙姥は「9. ばん ^{や い ま}八重山 帰り行き ^{しいむ}下八重山 ^く下だり行き 10. 按司添ぬ 御果報や／天添ぬ みかふや 11. ^{びる}昼や ^{まちいじい}真頂 かめどうし／夜や 真胸に うき通うし」〈我が八重山に帰って行って、下八重に下って行き、国王様の御果報を、天添の御果報を昼は頭上に戴いて祈り、夜は真胸に受けて祈ろう〉と語るが、ここでは、八重山の対語である。

次に、崎山と下八重山の関係をみよう。西表の崎山村で謡われていた歌謡の「今日が日じらば」（『同上書』ジラバ 69）にそれがみえる。この歌は、豊年を迎えた喜びを謡った歌謡で、その末尾部に「10. 崎山ぬ しゅぬまいや めへんたら 11. しむ八重山ぬ さくあたりや ゆくだらよ」〈崎山村の御役人様はもっと嬉しいだろう。下八重山の作当り役人はなお嬉しいだろう〉とある。

最後にパイナールヌ島と下八重山の関係であるが、それは「雨乞の唄」（『同上書』雨乞いの唄③-15）に「11. ^{はい}南なあら ^{しま}の島はらよ 12. ^{しらくむ}白雲ば ^{あみ}雨 なしよ 13. ^{しむや い ま ぬ}下八重山の ふんはらよ 14. ^{くむ}ぬり雲ば ^{みじ}水 なしよ」〈パイナールの島から白雲を雨にして、下八重山の国から乗り雲を水に降らして〉とみえる例だけである。パイナールヌ島というのは、八重山人の想像の所産であって実在の島ではない。語義的に言えば「南の方の島」の意である。この「雨乞の唄」が黒島のものであることから、ここの「南なあら」の島が波

照間島を指すとする事は可能かもしれない。しかし、この解釈は、パイナラの島の用例から帰納されることと、八重山人の古代的な想像力の世界を狭めることになる。この観点から、ここの「下八重山」^{しむや いま}は、波照間も含めた八重山の南方にある島と考えた方がよいだろう。

73. しびらばなみち（祖平花道）

竹富町波照間島の旧港から名石村に通ずる道路。旧港は「現棧橋から東方へ約 200 メートル位の場所」にあつて「石垣への公用船が蔵元へ行く出入港であつた」（喜舎場永珣『八重山民謡誌』407 頁）。この道路にまつわる伝説は、「祖平宇根という有能な船頭がある年の公用旅で上国しようとしたとき遭難、中国へ漂着。そこで三年の年月をおくるうち、土地の女性と情を交わす仲となつた。女は『神秘的靈感の持主』で、祖平宇根は帰国に際して、女より波照間島の風水ならびに『航海安全図』を伝授された。その風水等に従つて道路を開通した結果、以後の航海は平安なものとなつたという。『祖平花道』の名は、祖平宇根の名に因んだものである」（喜舎場永珣『前掲書』407・408 頁の記事を要約した）というようなものである。「花道」とは道路を讃美したものである。「祖平花節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌 39）は、祖平宇根が新道開通の喜びを歌つたものと伝えられているが、内容は、首里の役人を迎えた慶事をうたう、ごくありきたりのものである。「1. そひらはな道から／嘉例吉の 道から 2. 嘉例吉の 道から／ないしやにの 道から 3. たるへとつかいす／づりへと おはらす 4. 浮名主と つかいす／主の前とおはらす 5. はん 女頭 御供す／是 みやらび あとから 6. あしやげに 御供す／御宿迄 つかいす」（祖平花道から、嘉例吉の道から、嘉例吉の道から、港の道から、誰々をお招きする、いずれの方を御案内する。沖縄の主様をお招きする。御役人様を御案内する。私、^{フナジィ}女頭が御供をする。私、乙女は後から。アシャギ屋にお供する。御宿迄お招きする）。

なお、新道の開通と並行して池が掘られ、見張台が築かれた。その池が「祖平池」「鏡池」で、見張台がコート^{ムル}盛であるという（宮良高弘『波照間島民俗誌』21 頁）。

74. しむたばる（下田原）

竹富町波照間島の原名。波照間島の北部海浜に面した低地帯。下田原貝塚（八重山考古編年第Ⅱ期遺跡）があって、古くは集落生活が行われていたようである。「波照間の島節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌 38）に「1. 波照間のしまや／たんちゆ 名 とよまりい 2. 下八重山の 島や／たんちゆ 名 豊まり 3. 首里の おゑか 願ようり／上の おゑか 願ようり 4. 下田原 水だき／たを田原 水だき 5. だん、のふれ 勝らし／階 登り まさらし（下略）」〈波照間の島は誠に名高い島である。下八重山の島は実に高名な島である。首里の御役を願って、上様の御役を願って、下田原の水のように、低地の田原の水のように、段を登るごとに勝れさせ、階を登る度に優れさせ〉と歌われる（下田原の所出例は本例のみ）。この歌詞からみると、下田原は比較的水に恵まれた土地であったようである。

大正4年、波照間島初の製糖場がこの地にできたが、「その小屋は釜の上だけに茅を葺いた程度の粗末なものであった」（宮良高弘『波照間島民俗誌』41頁）。しかし、その製糖場も翌年には西原に移されたという。

75. じらばが

石垣市字石垣を構成するパカ（住居区画）の一つ。石垣を構成するパカは東から、ナータハカ、ジラバガハカ、ピィサガーハカ、シィムシィクハカ、カニヌティハカと位置している（牧野清『登野城村の歴史と民俗』527頁）。ジラバガハカのトゥニムトゥ（宗家）は屋号マブネー家である。「じらばがぬそーそーま井戸^{かー}じらば」（『南島歌謡大成Ⅳ』ジラバ 15）に「1. じらばがぬそーそーま井戸^{かー}ぬ 生りや 2. 中ぬ村 年寄ぬ^{うしで} 仰出や（中略） 5. じらばがぬ 中ぬ村ぬ 真中 6. 宮鳥ぬ 神山ぬ 御側に 7. 井戸ぬ縁 水ぬ側 結い立てー」〈ジラバガのソーソーマ井戸の生まれは、中の村の年寄りの仰せに、（中略）ジラバガの、中の村の真中に、宮鳥御嶽の、神山のお側に、井戸の標^{しめ}・水の標を結い立てて〉と謡っている。ここには明らかにジラバガの位置が明示されており、このパカが石垣村のほぼ中央部に位置し、村の信仰の中心地宮^{メートゥリィ オ ン}鳥 御嶽とも近いことが知られる。

76. すない（祖納）

西表島の西部の古邑。古くから西部西表の中心地であった。方音でスネ。

「往古は村番所を置いて行政を司っていた。村学校（会所）もあって漢学を授けておった」（喜舎場永珣『八重山民謡誌』339頁）という。この村の周辺には慶田城村きだすくに属していた成屋・船浮村の他、上原村などがある。この村は、阿立、大立、おかり、下原、真山、浮水などの小集落の集合によって形成されていた。それは「まるまふんさんふし」（『南島歌謡大成IV』節歌45）の第3節に「阿立 大立 おかりに 下原 真山 浮道、成屋 舟浮」と祖納の地名（成屋・船浮は除く）が列挙されていることがよく語っている。成屋、船浮等を含めて、祖納がこれら西部西表地区の中心地であったことは、「そふすけま節」（『同上書』節歌75）に「12. 祖納村の 親村の 女頭きやよう」〈祖納村の親村の女頭達はよ〉と、祖納村と親村とを対語に仕立てていることから分かる。親村とは、親なる村の意である。

また、祖納村と船浮村との日常生活上での交流を語った歌に「とのさま節」（『同上書』節歌60）がある。この歌は「1. 浮世に 名 とたる、恋の 氏神／祖納の とのさま はんと やよる／かまとまの 事ば 思ひと／舟浮に 越いる」〈浮世に名を知られた恋の氏神・祖納の殿様というのは私である。カマドマ女の事を思って、船浮に渡ってゆく〉と始まるものである。

77. すないだき（祖納岳）

西表島西部、祖納村の東南方に聳える山。標高294m。山の周辺は水田地帯である。祖納村の象徴であるらしいことは「祖納岳節」（『南島歌謡大成IV』節歌11）が次のように歌っていることよりうかがわれる、「1. 西表の 祖納 嵩 上なか 2. むかし世は 神のよは、給ふられ 3. 五日まり 十日越の 夜雨ば 給ふられ」〈西表の祖納岳の上に昔の世を、神の世＝豊饒の世を戴いて、五日廻り、十日毎の夜雨を戴いて〉。豊饒の世の下されるところを祖納岳としているのがその証左である。おそらくは信仰的対象であったかと考えられる。

この山は与那国より西表・石垣方面へ航海する船乗り衆の重要な目標であった。与那国島で謡われてきた、航海の平安を祈り、予祝する歌謡「とぐ

るだきでらば」(『南島歌謡大成Ⅳ』ジラバ128)はこのことを「12. あんぬ
とや／たまぬ なり んきやして 13. まい みらる しまや／なゆ し
ま ありわら 14. うりど うり／うぶいりむて すないだぎ」(東の渡は玉
のように澄んで波もない。前に見える島は何という島であるか。これぞこれ、
この山が大西表島の祖納岳である)と謡っている。与那国から渡ってくる時
一番最初に目につく島の影であったのである。

78. すんばれー (下原)

竹富町西表島祖納の周辺にあった集落。方音でスンバレーと呼ばれる。古
くは西祖納の一部であって、平田の湿地帯であった。昭和8年頃より、これ
も西祖納にあったウカリ集落の人々の移住が始まり、昭和15年には1戸を
残してスンバレーへの移動がおわった。このウカリからスンバレーへの移動
の主因は、スンバレーの水の便のよさによるものだったらしい(星勲『西表
島の民俗』60頁)。「まるまふんさんふし」(『南島歌謡大成Ⅳ』節歌45)の
第3節に「阿立 大立 おかりに 下原 真山 浮道、成屋 舟浮」と地名
が列挙されているが、このうち、成屋と舟浮を除く6地点が現在の祖納の内
の小集落である。

「デンサ節と同様に教訓歌の一種である」と喜舎場永珣のいう「そんばれふ
し」(『同上書』節歌29)は「1. そんはりの 何某／たんてたうと 翁長し
やうま／水夫田は くい 作らし給うれ／桃中やの まらたらさあぎと／片
髪まん もづまれる ぞざして へ」(下原村の何某が「どうかお願いしま
すおなが翁長主様、水田を作らせて下さい。とうなか桃中家のマラタラ《男子名》でさえ敬
髻を結っている。ああうらやましい」と願っている)という歌い出しで、下
原村に住む男女のなりわいや結びつきを歌っている。この節歌の第6節は
「おとふさまの なまぶりもの／成屋村に わたりいけ／ぶうめいまば く
いぶりゝ／けふ 聞ばん 明日すけはん／ふうめいまば さあるん へで
い」(オト叔父のしれ者めは成屋村に渡って行って、ブーメイマという女性に
首ったけになって、今日聞いても、明日聞いてもブーメイマを娶るといつて
いる)というもので、下原と成屋の人々の往来のしげさを推測させる。

79. そうそうまカー（ソーソーマ井戸^{カー}）

石垣市字石垣にある井戸の名。石垣のジラバガハカにあることから、ジラバガヌソーソーマ井戸^{カー}と称される。掘抜き井戸である。「そうそうまじらば」（『南島歌謡大成Ⅳ』ジラバ12）に「1. じらばカーぬ そうへまカー うしでや 2. 中村ぬ としゆりやぬ くとばぬ 3. みやとれぬ かみやまぬ うすばによ 4. みぢぬ ふき かはぬ ふき ゆいたてよ 5. ひる なりば ぴとぬ かしあまうりどー 6. 夜 なりば 御神ぬ かしようりど 7. 湧水 すりき水 まらしようり（中略） 11. やいま島 ぷりカーぬ ばじまりよ」〈ジラバガのソーソーマ井戸の生まれは、中の村の年寄りの仰せに、宮鳥御嶽の、神山のお側に水の標^{しめ}、井戸の標を結い立てて、昼は人間が掘り、夜には神々が掘り続けて、湧き水、清水を生まれさせたのだ。（中略）この井戸が八重山島の掘抜き井戸の最初である〉。この歌にはソーソーマ井戸の位置、形態の他、由来までが語られている。まず位置がジラバガの、それも村の信仰の中心地である宮鳥御嶽の側にあること。形態が掘抜き井戸であること。由来としては神・人協力のもとに完成した由緒あるものであること等である。

ソーソーマ井戸^{カー}の語源については宮良当壮の人名由來說（井戸掘鑿者か、あるいはこの井戸に関して功労のあったソーソーマという人名に依るとする。宮良当壮『八重山古謡』第1輯40頁）、喜舎場永珣の伝える民間語源説（「掘抜き井戸を創掘した時に、地下水がソウソウと音を立てて湧出したので」そう称する。喜舎場永珣『八重山古謡』上巻163頁）がある。あるいは、この井戸の水が常に澄んで清冽であることを称えた「白々（シィソーシィソー）とした」からきたか。

この井戸は現在は2軒の屋敷の中間にあることからフタナカカー（二中井戸）という名で呼びならわされ、宮鳥御嶽の神水として今なお利用されている。

80. たかな（高那）

西表島東部にあった集落名。享保17（1732）年に小浜島からの寄人を中心に村が創建されたが、時代を経るに従って人口は減少し、ついに「明治39

年（1906）に、最後の1戸（3人）を残して廃村となったので、対岸の小浜島へ移転した（喜舎場永珣『八重山民謡誌』314頁）。この村の廃村となるべきは明治26年に同村を訪れた笹森儀助が既に予言したことであった（笹森儀助『南島探検』2 83頁）。

「高那^{たかな}ゆんぐとう」（『南島歌謡大成IV』ユングトゥ 54）は、高那村の南方の道を歩いて来た老人が木の枝にとまった青鳩が鳴いているのを見ようと見上げたところ、木の実が実っていた。それを取って食べようとして木の枝から落ちてしまったよ、という他愛のない話であるが、それが竹富島や小浜島で伝承されていることに意味がある。すなわち、小浜島は高那村の村人の故郷であり、竹富島は高那村周辺地域の水田の出耕を歴史的に続けてきたところである。このような事情がこれらの島民が高那村を舞台にする謡言を伝承させたのであろう。

高那の名は、^{ざい}麾をもって軽快に踊る「高那節」（『南島歌謡大成IV』節歌74）、一名「ザンザブロウ節」によってひろく知られるが、この歌の中には高那のことは特に歌われていない。また、歌詞の内容も大部分が不明である。

高那地域では現在牛の放牧が行われている。

81. たかなざき（高那崎）

竹富町波照間島の東南端の岬。波照間島は隆起サンゴ礁の島で、海岸線は一部の地域を除くと「数メートルの海崖となっている」が、その中でも高那崎は約10mの高さをもつ断崖となっている。太平洋の荒波は崖壁を断え間なく打ち続け、波しぶきをあげている。この地一帯は隆起したサンゴ礁がそのまま露出し、植物の生育はほとんどみられない。このように荒寥とした感じを与える所であるが、「新本御嶽のやまぬばん」（『南島歌謡大成IV』ニガイフチ 159）に「7. あるぴんがしい おーる うやーん 8. たかなざき おんざき おーる うやーん」〈東方に居られる大親。高那崎、御神崎におられる大親〉とみえるように、神の在所である。「大城御嶽^{ぶすくおがん}の雨乞」（『同上書』雨乞いの歌③-20）に、「14. 高那ばり おる 親神よ たくぬ主 雨ゆ 給り」〈高那バりに居られる親神よ、巧み主。雨を下さい〉とみえる「高那ばり」もやはり高那崎一帯にある地名と思われる。そこも神の在所の一つなの

であろう。自然の猛々しさを眼前させられるこの地が、神の在所の一つに考えられたのは自然な想念であろうか。

82. たかにく（高根久）

竹富町字新城上地島にある高台の名。「こいの花節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌 42）に「6. 高ねくに 登て／あかるかい 見れは／よりや花て 見れは／まるか かゝん」〈高根久に登って東方を見ると、ユリの花かと思ったら、マル女の白い下裳である〉とある。喜舎場永珣『八重山民謡誌』では、「5. 高根久ニ 登ブティ／北向カティ 見リバ／片帆船デ 見リバ／真帆ドウ ヤユル」〈高根久に登って北にむかって見ると、片帆船かと思っていたら、なんと真帆船であるよ〉と、かわっている。喜舎場永珣によると上記の歌詞は「自分の良人が、献納ザン魚を捕りに行ったが、数日になるまで帰島しないので良人を愛する妻は、人目を忍んで、一人北方にある高根久と称する『盛り』に登って、北方を（石垣島方向）展望して」いるのを歌ったものという（『八重山民謡誌』269 頁）。この説明で、タカニクが上地島の北部にあって、石垣島方面が望見できる土地であるのがわかる。この高台は、明和の大津波の「もどる波」（新城を洗い流した波が西表島にぶつかって返り波となった）によって形成されたものといわれている（『新城島』57 頁）。

83. たきどうん（竹富）

竹富町字竹富。竹富は玻座間・仲筋の二村で構成される。首里王府の八重山支配の政庁・蔵元は最初、島の南西海岸の皆治原^{カイジバル}に開かれ、竹富島出身の西塘が初代の首里大屋子に任ぜられたと伝えられる。この歴史的伝承をうけて「しきたぶん節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌補遺 12）は、「1. 竹富^{たきどうん}ぬ 仲嵩^{ふん}ぬ 島や 2. 島やりやどう 国やりやどう くゆさる 3. 大石垣^{うふいしやぎい} 大本^{うふむとう}ぬ 真正面^{ましようみ}に 4. しいきだぶん まうき島^{しま}で いやりる 5. うだいらぬ 頭主^{かしらしゆ}ぬ 始まり^{うふうら}いや 6. 竹富^{たまうら} 仲嵩^{うふうら}どう 始まる 7. 大蔵^{うやばしい}ぬ 玉蔵^{かりゆしい}ぬ 始まり^{むとう}いや 8. うらかいじ 元^{むとう}かいじ 始まる 9. 親鷺^{うやばしい}ぬ 嘉利^{かり}吉^{ゆしい}ぬ 始まり^{むとう}いや 10. ぶさし端^{ばな} 神^{ばな}ぬ端^{むとう} 始まる 11. 賢^{かし}くさや 打組^{ぐま}み 勝^{まさ}らし」

〈竹富の、仲嵩の島は、島だけが、国だけが小さい。大石垣島の、大本の真

正面に据えた盆、前置きの盆だといわれる。王府への御奉公、頭役様の始まりは竹富島、仲嵩が始まりである。蔵元の始まりは、蔵元^{うら}皆治・元皆治が始まりである。公用船・嘉例吉船の始まりは、武佐志崎^{フサシバナ}・神の崎が始まりである。賢いことは、仲間を組み共同するのが勝れている」と歌いあげている。この歌は、竹富島の象徴的歌謡として祝祭の場では必ずといってよい程歌われるものである。

この島は隆起サンゴ礁の島であるから、稲作には不適である。従って、古来より米の入用にかられた島民は自前の丸木舟で海を渡って、はるか遠く西表島の東南部、仲間方面へ稲作に出耕していた。「真栄ゆんた」(『同上書』ユンタ 180) はこのことを「1. まりや ^{たきどうん} 竹富 ^{すだ} 育ちや ^{なかま} 仲間ぬ ^{まさかい} 真栄 2. いきやる ゆい なぐぬ ゆやんどう ^{なかま} 仲間 ^く 越いおるた (中略)。 4. うふましぬ ^{なが} 長ましぬ ゆやんどう 5. ^{むちぐみ} 餅米ぬ ^{しろぐみ} 白米ぬ くり ふしゃんどう (下略)」〈生まれは竹富、育ちは仲間のマザカイ。如何なる故に、何の故に仲間に越え渡ったのだ。大舛田の、長舛田の故に、餅米の、白米の欲しさに(渡ったのだ)〉とうたっている。竹富島の島人の生活の歴史を伝えた歌謡である。

84. たきにしいぱか (嵩西パカ)

石垣市字新川を構成するパカ(住居区画)の名前。新川を構成するパカは東から、ウラバルパカ、ターブナーハカ、キドゥムリハカ、タキニシィミユトゥハカ、タキニシィウフパカ、アラカーフウパカ、ンナティーマスィパカと位置し、村の更に西にサクバルパカがある(牧野清『登野城村の歴史と民俗』527頁)。歌謡に出るタキニシィパカが上記のタキニシィミユトゥハカなのか、あるいはタキニシィウフパカなのかは未詳である。前者のトゥニムトゥ(宗家)はマイパナリ前新城シンニャーで、後者のそれは前イシャナギンシン^{ヤー}家である(八重山歴史編集委員会『八重山歴史』158頁)。「婚礼の本神祈願の願口」(『南島歌謡大成IV』フガイフチィ 19)に「あらかーむら たきにしばかぬ 長栄氏」〈新川村、嵩西パカの長栄氏〉とあるが、それ以上のことは述べられていない。

85. たていしばれー（立石割れ）

石垣市字川平と崎枝の中間にある土地の名。川平のスクジ湾岸を崎枝のカナマ浜方面に行った通称・越地牧場内にある（『川平村の歴史』350頁）。川平村と崎枝村の男女の悲恋物語が伝えられる場所である。ここにある畳石には二つの穴が穿たれており、穴の径が狭くて深い方が女性の穿ったもので、径の広く浅い方は男の穿ったものという。これは男女の愛情のあり方の違いを表わしていると語られている（同じ話が石垣島東北部のウラスククイチィ《浦底越地》のナナンガーラの伝説となっている）。「たていしばれあよう」

（『南島歌謡大成Ⅳ』アヨー4）に「1. たていしばれーぬ くいしばれーぬ
やなぎどう路^{みちい}から 2. 七^{なな}とー 越^くい／七^{なな}ばりい 越^くい／何^{なゆ}ぬ 故^{ゆう}ん 越^くい
だ／如何^{いぎや}ぬ 故^{ゆう}ん 越^くいだ（中略） 4. 川平^{かびいら}かい 越^くさでんきやー 越^くさ
りいぬ／崎枝^{さきだ}かい 越^くさでんきやー 越^くさりいぬ」〈立て石割れの、越地割れの低地の道から、七つの谷を越え、七つの割れ間を越えて来た。何のために越えて来たのだ。如何なるわけで越えて来たのだ。（中略）川平へ引越そうといっても引越されず、崎枝へ引越そうといっても引越されない〉と窮状を嘆いている。「たていしばれー」の対語が「くいしばれー」となっているのは、この地が越地、即ち峠状になっていることを示している。険阻な山道をいくつも越えてタティシバレー・クイチィバレーに到るという。

村外婚を基本的に認めない時代にあって二人は、川平村でも崎枝村でも一緒になることはできず、やむなく別れたという。歌では男女の名が「くいしまー」と「ちゅらまーち」になっているが、川平村の伝説では「阿波」と「カニシ」となっている。また、畳石に穿たれた石穴を「メーラアパー井戸^{カー}」と呼んでいる（『川平村の歴史』351頁）。

86. たぶさがー（田補佐井戸）

石垣市字大川にある井戸の名。現在は井筒もなく、埋められた状態になっている（『石垣市史』各論編 民俗 上 73・74頁）。「田補佐井戸節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌補遺6）には、この井戸の鑿削を次のようにうたっている。

「1. 大川村中に 田補佐井戸ゆ 掘らち／手しき 省かしゆる 手だてい
すらな／世持ちん 田補佐ん しきみしより 2. 男^{びふな}にや 掘らし 女^{みどうな}にや

持たし／掘り出しぬ^だ ゆたさ 持ちあぎぬ ちゆらさ／男ん 女ん 肝
 揃るてい 3. 幾世 取持ん たまる 井戸 掘る出だち^ん／嬉し^{うり} ふくらし
 やでい 土地ぬ 御神／汲ばん 汲ばん 出でいまさる」〈大川村の中に田補
 佐井戸を掘らせて、手間暇を省かせる手だてをしよう。世持ち役も聞いてご
 らん。男には掘らせ、女には持たせて、掘り出しのよろしさ、持ち上げの美
 しさ。男も女も心を揃えて、幾世まで汲み出しても溜まる井戸を掘り出して、
 嬉しい、喜ばしいと土地の御神も喜んでいる。汲んでも汲んでも更に湧く〉。
 この歌からすると、大川村の中で水利の悪い地域に新たに掘り抜き井戸を掘
 らせた、ということである。「田補佐」は、田畑耕作の監督をする村の下級の
 役職で、50歳を越えた人頭税の義務から外れた人望ある人物になった。

この井戸の名は、この村役人が井戸の鑿削に関わっていたことによる命名
 である。喜舎場永珣・宮良当壮によると上記の歌は崎原当貴（1846年生）
 の作という。伝承では崎原当貴が田補佐役に指示して掘らせたものという。

「東ぬ井戸節」（『同上書』節歌補遺5）の作家が「東ぬ井戸」を掘った崎原
 当貴であり、本歌の作家も同人であることからすると、崎原当貴は大川村
 の水事情の改善に相当な貢献をした人物ということになる（喜舎場永珣『八
 重山民謡誌』131・134頁。宮良当壮「琉球八重山諸島の民謡」『宮良当壮全
 集』11巻398・403頁）。

87. たらまんに（多良間嶺）

石垣市にある山の名。石垣島の南部にある。山の名称は「その山頂より宮
 古郡に属する多良間島を見得るが故に命ぜりと云ふ」（宮良当壮『八重山語彙』
 133頁）。「くさぎ野ぬ牛^{ぬー}ま^{うせ}」（『南島歌謡大成IV』ユンタ183）に「13. 多良
 間嶺^{まんに} 岳^{むる}や 頂^{ちじ} 登り^{ぬぶ}ようり^{にし}よー 14. 北ぬ^{とうー} 渡^たば 多良間^ら渡^まば 見^みやぎり
 ば^{ばん}よー 15. 片^{かた}帆船^{ふぶに} 諸^{むる}帆船^{ふぶに}ぬ 見る^{みる}すや^ふよー 16. うり^{うり}どう かり^{かり} 吾^わ
 び^びぎろ^ろまぬ^ま 船^{ふに} やる^やよー 17. 取^とらでい^ら しば^{しば} 遠^とさ^と ぬ^ぬき^き 取^とらる^らぬ^ぬ
 よー」〈多良間嶺、岳の頂に登りまして、北の海を見上げるとね、片帆船、諸
 帆船が見えるのは、それが私の愛しいお方の船であるよ。手に取ろうとす
 ると遠くに退いて取られないよ〉とうたっているのからみると、先に紹介した
 この山の名の語源もうなずけそうである。多良間島は多良間嶺からほぼ東北

の方角に位置する。

88. とうざとう（桃里）

石垣島東北部にあった村の名。1732年、尚穆王下の首里王府の一連の政策による新村として桃里村は建てられたが、村は衰微の道を辿り1914年には廃村となった。その桃里村を「やうさて節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌62）は次のように歌っている。「1. 桃里てる 島や／果報の しま やれは／から嵩は 前 なし／おやき繁昌 2. から嵩に 登て／押し下り 見れは／稲粟の なをり／扱見事」（桃里という村は果報の村であるから、カラ岳を前にして富貴繁昌で栄えている。カラ岳に登って下の方を見わたしてみると、稲や粟の実るさまがほんとうに見事である）。この「やうさて節」は「桃里節」とも呼ばれている（喜舎場永珣『八重山民謡誌』174頁）。

浦底越地のナナンガーラの石穴の伝説は桃里村の青年と野底の乙女の恋の物語であるが、この伝説は今はない桃里村の生活圏を知る上でも興味深いものである。

桃里村の跡地には第2次世界大戦後の1953年、琉球政府の計画移民（大宜味村出身者）により大里集落が創建され、現在にいたっている。

89. どうなんじま（与那国島）

八重山諸島の西端にある島で、日本の最西南端に位置する国境の島である。気象条件のよい日にははるか西方に台湾の大きな島影がみえる。与那国方言ではドゥナンという。石垣方言ではユノーンであるが、いずれもヨナグニからの転訛である。絶海の孤島で、異称「一本島」（いっぷんじま・ぴいすむとうしいま）はそれに因むものであろう。他の八重山諸島の島々と比べ、古くから他島との交流が少なく、独自の風物・文化をはぐくむこととなった。例えば、与那国方言は琉球方言のなかでも特異な方言で、琉球方言の区画は、与那国方言の位置づけ、即ち、与那国方言を八重山方言に属させるか否かで、三分説、五区分説にわかれるのである。このように独自の風物は島の文化・歴史にも反映しているが、15・6世紀頃の英雄の時代にはサカイイソバという女酋が島の統治者として君臨していたことが伝えられている。15世

紀末、この島に漂着した朝鮮人たちの見聞したところによると、鉄器が少なく、土器・石器を主体とした低生産性の社会であったようである。

オヤケアカハチの乱の後、この島は首里王府派遣の宮古軍によって討伐されるが、この史実を「いんしが一ぬ金盛ゆんた」（『南島歌謡大成Ⅳ』ユンタ216）は、大意次のように謡っている。「宮古の豊見親は八重山を統治しようとしていたが、八重山からは何の応答もなく、与那国島に渡った者はうち戻されるという始末であった。この事態を打開するため金盛は軍船を仕立て、与那国に到り東崎から上陸し、平和的に交渉を始めた。しかし、それも失敗してしまった。そこで金盛は東崎から擬装した筏船を流し帰島したようにみせかけ、与那国勢の虚をついて攻撃をかけた。宮古軍は島中の家々をなぎ倒し、人々を切り倒して進んだ。そのうち島の娘の哀願があつて金盛はようやく攻撃の手をゆるめた。そのお蔭で与那国は、かろうじて存続しているのである」。宮古軍の与那国討伐は、与那国の鬼虎の不忠を戒めるためと説かれる。しかし、実際は首里王府による八重山全土の統治という大目的の達成のためのものでしかない。かくて、与那国は琉球国の領土の一部として明確に組み入れられることになったのである（「宮古島在番記（写）」『平良市史』3巻89頁。「忠導氏家譜（正統）」『平良市史』第3巻341・342頁）。

王国の支配下に入った与那国は、他の先島諸島の島々と同様に人頭税で苦しめられることになる。その苦しみは、島中の妊婦を久部良の原野にあつめ、そこに口を開けている岩の割れ目を跳び越えさせ、墜死や流産にいたらしめたという「久部良割れ」伝説、不意に打ち鳴らされた鐘の音を合図に島中の男たちが島の中央部に近い一舛（区画）の田になだれこみ、そこからあふれた者は切り殺されたと伝えられる「人舛田」^{トゥングダー}の話のような残酷な伝説を生むことになった。

与那国航路は古来、航海の難所といわれ、近代にいたっても数々の海難事故が発生してきた。このため、航海の平安を願う気持には切なるものがあつた。別れの悲しみをうたって美しい「どなんすんかに」（『南島歌謡大成Ⅳ』スンカニ4）は、別れをおしむ心と愛しい人の航海の無事を祈る心が綯いあわされて、聞く人の心をゆさぶるものである。「1. ゆなぐにぬ なさぎ／いくとばど なさぎ／^{めて}命の あるまでや／^{とやい}便 しやびら 2. 与那国ぬ ^{とけ}沖や／

いき みぢぐる やしやし わた たば
池の 水心／心 安々と／渡て給り」〈与那国の情はかける言葉が情けである。命のある限り、たよりをさしあげましょう。与那国の渡海は、おだやかな池の水のよう。どうぞ、心やすやすと渡っていってください〉。

90. とうぬすく（登野城）

石垣市字登野城。石垣の四ヶ村を構成する古い村である。登野城は、東からミユトウパカ、ナリトウナリカサナリトウノーパカ、ナカヌハカ、ウヤキドウムリカニムルパカ、キチィパカの五つのパカで構成される。集落の東方に糸数御嶽、後方に小波本御嶽、イヤナス御嶽、牛ヌ御嶽がある。集落内には、天川御嶽、舟着御嶽、真泊御嶽、船浦御嶽、美崎御嶽、イチュムリィ御嶽、テンスイ御嶽、アマスィ御嶽、キチィパカ御嶽などの諸御嶽がある。村の創建については宮島御嶽の伝説の中に語られており、古代よりの村であるらしい。1757年には人口の半分の1050人を割いて大川村が建てられた。

「あかるざ節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌78）に「1. あかるさの む中に／登野城の む中に 2. 九年母木は 植とし／香しや木は さしとし」〈東里の真中に、登野城の真中に九年母の木を植えて、香ばしい木を差して〉とある。「あかるさ」について喜舎場永珣の『アガロウザ』は東の里の転訛である。（中略）島分の村（大川村）の東の里（『八重山民謡誌』51頁）という説を承けると、登野城村は四ヶ村の東端部に位置していることから「あかるさ」と呼ばれたことがあったかもしれないが、なお断定はできない。

登野城は方音で〔tunusuku〕という。その語源について「俗説に曰く、初めトゥノーと称する大木の周囲に人々集り住めりと云ふ。スクはそこ（塞）にして、要害地の内外の隔てなり」という説（宮良当壮『八重山語彙』155頁）、「昔、トゥヌシバラ、イシャナギバラという二つのバラがあり、トゥヌスク村、イシャナギ村となった」という喜舎場永珣説の他、幾つかの民間語源説がある（牧野清『登野城村の歴史と民俗』37～39頁参照）。

91. とうまた

石垣市字崎枝の小字名。名蔵湾岸、屋良部半島の付け根の部分にある。一周道路が名蔵湾岸より離れ崎枝方面へ坂を上っていくあたりで、東方はタカ

ダと接し、西方は内原、赤崎と接する。また、北方は川平のヨーンと接する。

「とまた節」(『南島歌謡大成Ⅳ』節歌 58。喜舎場永珣『八重山民謡誌』では「トゥマタ松節」)には、往時のトゥマタと崎枝の役人の姿が次の様に歌われている。「1. とまた松の 下から／馬ば 乗りおふるすや 2. 誰る へ のと 乗れおふる／つれ へ のと 乗りおふる 3. 崎枝主のと 乗れおふる／主の前と 乗りおふる (下略)」(トゥマタ松の下から馬に乗っておいでになるのは、誰が乗っておいでか、どなたが乗っておいでかを見ると、崎枝村のお役人様が乗っておいでだ)。「とまた松」は、トゥマタの坂の両側に生えた松並木のことである。以前は松の大木が並んでいたというが、大正年間に本土商人の手によって伐採され、現在は松並木というほどのものはない。

「^{うちいばれむら まゆん}内原村の^{かんふちい}真世がなしいの神詞」(『同上書』カンフチィ 2)に「11. (前略)だふた、つぶた、な一た、とまだ、ていふはまた、うふましい、たばりいぬういに」と列挙されている田地の「とまだ」が、崎枝の「とまた」か否かは未詳。

92. とうむり (友利)

竹富町鳩間の異称。「とうむり」の名は鳩間島内では、友利御嶽^{ウガン}にみられる。友利御嶽は島中の御嶽で格が一番高い御嶽である。例えば豊年祭の当日の行事で、前泊御嶽、ピナイ御嶽、新川御嶽の^{ブール トービン}司、手摺り部^{サカサ ティジ ビー}(男性神役)、引は、所属する御嶽での祈願をすませると友利御嶽に集まり、そこで島中の豊年の感謝・祈願をすることになっている。この祭儀のため、前泊・ピナイ・新川御嶽の人々と友利御嶽の人々とが友利御嶽入口で会って、御嶽に入るとき次のようにうたわれる。「1. うぶとうむり まぶる しゅー／うぶしくぬ うやがみ 2. うゆみさ あらばん／なゆみさ あらばん 3. うすば ゆてい うがま／ちかく ゆてい うがま」(ハヤシは省略)〈大友利の守護主、大城の親神、畏れおおくはあっても、畏いことではあるけれども、御傍に寄って拝もう。近くに寄って拝もう〉(沖縄在鳩間郷友会編『鳩間島誌』42・43 頁)。このように神聖・最高の神を祀った友利御嶽の「友利」が鳩間の異称となるのはごく自然であろう。豊年祭に謡われる「ゆーくいじらま」(『南島歌謡大成Ⅳ』ジラバ 72)では「とうむり」と「鳩間」は次のようにうたわれる。

「1. ぱとうまゆーぬ　とうむりゆーぬ　なうらば　2. たるとうゆどう
じりとうゆどう　ていゆます　3. まぶる　しゅーどう　うやがみどう
ていゆます（下略）」〈鳩間の世が、友利の世が稔ったら、誰を、いずれの方
を讃えようか。守護の主、親神を讃えよう〉。「鳩間の世」に対して「友利の
世」とうたっているところに、鳩間すなわち友利であるという意識がよみと
れる。第3節の「まぶるしゅー」「うやがみ」とは、友利御嶽の神を指して
いることも知れよう。『琉球国由来記』に「友利御嶽　神名　ヲトモリ　鳩間
村／御イベ名　大ザナルガネ」とある。

歌謡の中では、鳩間の対語は常に「とうむり」である。

93. とうやま（十山御嶽）

与那国町祖納にある御嶽。鳥居と拝屋、神庭からなる。御嶽は集落の海岸
よりの地域につくられている。与那国島には、ティ^{ウァン}御嶽、トゥマイ御嶽、ウ
ラヌ御嶽、ンダン御嶽、ナウンニ御嶽、アラガ御嶽、ンディ御嶽、クブラ御
嶽、ディティグ御嶽、トゥグル御嶽、ウヤバル御嶽、ヌック御嶽の12の^{ウァン}御嶽
がある。「この十二ヶ所のお嶽の中に、ナウンニお嶽とアラガお嶽とは一山
にあり、ウヤバルお嶽は後世に創設されたもので、十山に入るべきお嶽では
ないと云われ」る（池間栄三『与那国の歴史』136頁）。この十のヤマを一
処にあつめ“総本山”としたのが十山御嶽である。上記の「各お嶽には専属
の側司（スバカ）があり、十山御嶽には大司（ウブカ）がいて側司を支配し
ている」。神名は「チマガニン、ソウダルミ、ミマタ、ヌチ」（池間『前掲書』
135・136頁）。

かつては毎月朔日・15日には13名の司が集まって島内の平安、豊饒を祈
願する祭祀の他、豊年祭、シティ^{シティガン}節、結願祭などがおこなわれた（現在神
女は1人だけである）。与那国の「雨乞の歌」（『南島歌謡大成Ⅳ』雨乞いの
歌23）は「1. だまとやま　かんぬまい　2. ちま　かりる　みてやりや
3. くん　とりる　きわやりや　4. ばんあ　にんあい　にぐがらや
5. くりが　にがい　にぐがらや　6. ぐさぐぬ　みでぬかみ　7. ななさぐぬ
みでぬかみ　8. ふらしやひり　かんぬまい　9. たしきやひり　かんぬま
い（後略）」〈山、すなわち御嶽・十山御嶽の神様。島が枯れる刻だから、国

が渴く際だから、私が願う今夜から、此^{これ}の願う今夜から、5 勺の水の神よ、7 勺の水の神よ、降らしてください神様。助けてください神様」と謡っている。なお、全琉球の御嶽その他、祭祀場を記録した『琉球国由来記』にはこの御嶽を初め与那国島の全ての御嶽（他に 12 御嶽ある）について何の記載もない。

94. なーしきい

比定地未詳。宮良村の異称かと考えられるが、なお断定はできない。「あんがろーまあよう」（『南島歌謡大成Ⅳ』アヨー 23）は「1. あんがろーまぬ 上なんが なーしきいぬ 上なんが 2. なんちゃ盛^{むりい} 黄金岡^{むりい}ば くい とうり 3. なんちゃ盛 黄金岡ぬ 上なんが 4. ばらびん玉 ふだじいば し 5. ふにぶん玉^{びしい} 礎^{びしい}じいば し…」〈アンガローマの上に、ナーシキィの上に、銀の岡、黄金の岡を平坦にして、銀の岡、金の岡に蕨玉を踏み石・礎石台にして、九年母玉を礎石にして…〉と始まる、一種の宝寿ぎ歌であるが、その冒頭にナーシキィは出てくる。このアヨーは宮良村伝来の新築祝いの儀礼歌であり、宮良の伝承では「あんがろーま」は「東方のこと。宮良の村は、石垣の村から東の方角にあるから、アンガローと言う」のだが、「なーしきい」についてはその対句としか言っていない（宮良村古謡保存会『宮良村古謡誌』9 頁）。地元でもナーシキィという名が忘れられつつあるのである。

ナーシキィの比定地は如上のとおり不明である。ただ、ナーシキィの語源が「長塞」、即ち、長い石垣であるとするならば、ナーシキィは宮良村の異称として適当なものであるかもしれない。何故ならば、宮良村の創建にあたっては猪害を防ぐための石垣を「白保ノ東表、川尻ト云所ヨリ宮良ノ西表、高山ト云所マデ二里餘、高五尺積廻シ」（『定本琉球国由来記』493 頁）たというからである。この長い石垣＝長塞^{なーしきい}に因んでナーシキィの名がうまれたのではなかろうか。

95. なーま（長間）

石垣市字大川・石垣・新川の後方にひろがる田畑の名称。古来より、大川・石垣・新川の主要な耕作地であった。宮良当壮『八重山語彙』（167 頁）によると「石垣町の北、真地（マージィ）と嵩原（タキバル）との間に在る東

西に長き畑地にして、土地肥沃、最も農業に適せり」という。フナーシードーに沿った田畑で、苗代田や本田などが広がっていた。大川村に伝承されてきたユングトゥ「兄と妹」(『南島歌謡大成Ⅳ』ユングトゥ 14)に「長間 出でえ いしゃぬめ一本 ^{むと} 選び引き／真地 ^{まーち} 這入り ^{べー} とうの一菜茎 ^{なふさい} 選び摘み／時 ^{やー} 入らなあ ^む 家 ^{べー} 持ち這入り」(長間に出てイシャヌメーの根を選んで引き、真地に行ってトゥノー菜の茎を選んで摘んで、時をかけずに家に持って入って)とあるが、これは、長間の田畑が集落の近くにあつて、村人の生活と密着していたことを語っているといえよう。

同じく大川村の種子取り祭の時にうたわれる「世乞ちいじい」(『同上書』種子取祭の歌 1)には、神の島から豊饒の世を載せてやってきた船を平川森の港に招き寄せて、村中の家・蔵を稲・粟で満たせた後で、五穀の種子を「20. 長間田原ん ^{なま} 蒔きいぼうり／大田原ん ^{うふたばる} うちいぼうり」(長間田原に蒔いて、大田原に打ち蒔いて)と謡っている。これは、長間田原がフナー(フナーシードーの前身)の水の利を得た最良の苗代・本田であったことのあかしであろう。

96. なかすじ (仲筋)

① 石垣市北西部の地名。大字川平に属する。方音でナカチという。川平湾をはさんで川平の集落と向かいあう地域で、古くから川平村に属する小村の仲筋村があったが、1944年に廃村となった。「蔵元はこの地に大きな倉庫を建てて、石垣島裏地区生産の貢納米を収蔵し、川平港から積出していた」という(牧野清『新八重山歴史』154頁)。「川平口説」(『南島歌謡大成Ⅳ』口説 1)に「1. 浮世に 名立つ 川平村／島ぬ 流れや 南北に／黄金お山の その中に (中略) 3. 真謝と 仲筋 打ち渡して／彼方 此方ゆ 見渡しば／民ぬ 竈ぬ 賑わいて」(浮世に名の立つ川平村は、村の流れが南北に伸びて、黄金の山のその中に (中略)、真謝と仲筋方面に渡って村の景色を眺めると民の竈は賑わっている)とあり、川平村の一部としてうたいこまれている。『琉球国由来記』に仲筋村の御嶽として「ネハラ御嶽 神名 嶽名同 仲筋村／御イベ名 マシロ大アルジ」「与那間御嶽 神名 嶽名同 同村／御イベ名 ネットハイモト」の二御嶽が記載されている。いずれも現存し、信仰は

継続している。

② 竹富町竹富の小字。竹富島の中央部に位置する。方音でナージ。この村の創始者は、大和の国から来た武士・新志花重成殿と伝えられ、これは仲筋御嶽の由来（下記）とも重なる。彼は当初「竹富島の南端の地ブサシに城を築き、城主となって住んでいた。ブサシの付近は地形が悪く飲料水が不自由であり、この地では村の発展は望めそうもないと知ったので、重成殿は島の中心に引越し、仲筋村を創始した」という（上勢頭亨『竹富島誌—民話・民俗篇—』12頁）。「仲筋節」（『南島歌謡大成IV』節歌33。一名「仲筋ヌヌベーマ」）は、「1. 仲筋の のべま／ふんかどの 宮童ひ 2. ひとれや ある みどな子／たのきや ある きもの子 3. はなれ夫 もたしふれ／肝の夫 もたしふれ」〈仲筋のヌベマ、国の角の乙女、ひとり居る女の子、独りだけの愛し子を新城島の夫にめあわせ、肝の夫にめあわせて〉と始まる。この歌は、水甕と苧麻の苗のために仲筋村の役人の差配によって新城島へやられた娘を慕い悲しむ母親の心情を吐露する内容となっている。いわば、人頭税制の生んだ悲劇の一つを歌っているといえよう。

仲筋村のンブフルの岡の傍には、犬が発見したと伝えられる仲筋井戸がある。

『琉球国由来記』に「仲筋御嶽 神名 宮鳥ヤ神山／御イベ名 イヘスシヤヲキナワガナシヨリ御渡。アラシハナ」とある。仲筋御嶽は方音でサージオンという。
カサナリ、オガミ初ル

97. なかどーみちい（仲道道）

石垣市字登野城から字真栄里へ通じる道路である。現在の石垣島一周道路から分岐して真栄里の集落へ向かう小道上、その分岐地点にはアコーの大木が立っている。このアコー木は俗に「三番アコー」と呼ばれている。この呼称は、このアコー木が登野城村より東方に向かう道筋に植えられたアコーの木の第三番目にあたるものであったことによる。一番アコー、二番アコーもあった。沖縄民謡の中で最高の情歌である「トゥバラーマ」（『南島歌謡大成IV』トゥバラーマ16）に「仲道道から なかどうみちい 七けーら なな 通うけ かよ／仲筋かぬしゃー なかしいじい ま 相談ぬ ならぬ」〈仲道道から七回通っても、仲筋家の愛しい人は話しさ

えもしてくれない」と歌われ、「仲道道」の名は人口に膾炙している。この歌は、真栄里村の仲筋家に育った評判の美人「カナシ女」をわがものにせんと石垣の士族の青年たちが毎夜のように通ったものの、遂に思いをとげることができなく、無念の思いを即興的に歌いだしたものと伝えられている（喜舎場永珣『八重山民謡誌』144～147頁）。

喜舎場永珣によると「今から70年前ころの筆者の少年時代のナカドウ道は、道幅も狭く、両側には茅、薄、バンザクロが生い茂り、妖怪変化も出そうな暗い道で、妖艶な幽霊が出現した話などもあって、ハブ（毒蛇）もはい出す、石塊の悪道であった」（『八重山民謡誌』145頁）という。1983年12月23日に上記の三番アコーの傍に前引の歌詞に因んで同歌詞を刻んだ「トゥバラマの歌碑」が建立、除幕された

98. なかぬはか（中ぬハカ）

石垣市字大川を構成するパカ（住居区画）の一つ。大川を構成するパカは東から、クシマタパカ、中ヌパカ（ハンナーパカ）、大川パカ、^{フーガー}ブンナーパカと位置していた。しかし、明和大津波の後、ブンナーパカは大川パカに吸収合併され、大川はクシマタ、中、大川の三パカとなった。中ヌパカの名は、クシマタパカをアンヌパカ（東のパカ）、大川パカをインヌパカ（西のパカ）と呼ぶことによるもので、もとの名はハンナーパカと称する。このパカのトゥニムトゥ（宗家）は前上原シン屋である（八重山歴史編集委員会『八重山歴史』157・158頁、牧野清『登野城村の歴史と民俗』528・529頁）。「大川ゆんぐと」（『南島歌謡大成IV』ユングトゥ 22）は「大川村 なかぬはか みやらびヨイ」〈大川村の中のパカの乙女が〉と始まり、その乙女に片恋するウブな青年が、あまりの純情ゆえに遂にその思いを伝えられなかった、ということ述べたものである。

99. なかむり（仲森）

竹富町鳩間島の岡の名。島の中央より南寄りに位置し、標高33.8mで、島の最高地点である。往昔ここは、一帯が^{クバ}蒲葵山で、島の名所であった。「鳩間節」（『南島歌謡大成IV』節歌28）は、この岡からの眺望をうたったもので、

国見歌的内容となっている。歌は「1. 鳩間仲森 走り登り／久葉の 下に
走り登り 2. かいしや もいたる 森の 久葉／清らさ 列たる 辻の
久葉 3. まんか 南風端 見渡せは／浜の 見るそや 小浦の浜 4. 小浦
の浜から 通よ人や／おらの 前の 人こゝろ（中略） 8. 前の渡よ 見渡
せは いく舟 来る舟 面白や 9. 稲や 積付 おもしろや／粟ば 積付

扱見事」〈鳩間仲森に走り上り、クバの下に走り上ってみる。美しく生えた
岡のクバ。きれいに並んだ頂のクバ。島の真向いの西表島を見渡すと、浜が
見えるのはクラの浜である。クラの浜から通う人は、蔵元の前の道を歩く人
のようだ。前の海を見渡すと、行く舟、来る舟の姿のおもしろさよ。稲を満
載し、粟を満載して来るさまの見事さよ〉と歌う。この歌は、農耕地に恵ま
れない小島・鳩間島の人が対岸の西表島にクリ舟で出耕するという労苦を背
景にもっている。「稲・粟を満載して通う舟」というのは、島人のみはてぬ
夢・幻想であって、自らの置かれた苦境の逆倒した像である。歌に詠まれた
光景は美しく、鳩間人の誇りとするものであるが、自然の美しさとは裏腹な
歴史の悲惨さもあるわけである。

この歌にも詠みこまれているクバ林は「明治 35 年（1902）土地整理事業
が施行された結果、測量に支障ありと称して乱伐」された（喜舎場永珣『八
重山民謡誌』327 頁）。現在のクバは、その後、島の人たちの手によって補
植されたものという。岡の頂には、「1924 年（大正 13）に鳩間在郷軍人会
によって建設された」円柱型の灯台と、「1949 年（昭和 29 年）」に建設され
た灯台がある。また、「仲森の物見台」も 1983 年（昭和 58）に「戦前の姿
に復元された」（沖縄在鳩間郷友会編『鳩間島誌』19 頁）。

仲森の東方の岡には、島最高の御嶽である友利御嶽がある。西南麓には
アラカー新川御嶽がある。なお、頂部一帯は鳩間島仲森貝塚と呼ばれる、八重山編年
第Ⅲ期の遺跡である。

100. なからだー（仲良田）

西表島の西部、仲良川の中・下流域にひろがる平地部分に開かれた水田地
帯。この地域の水田は、祖納村随一の良田で「面積はおおよそ 7000 アール位
で」ある（喜舎場永珣『八重山民謡誌』342 頁）。この水田は祖納村にとっ

て重要なものであった。このことは、「仲良田節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌12）が「1. なから田の 米や／はなりつゝ あはん 2. 粒 しらん みぎり、みろくよかほ 3. 年貢上納 上て 御残の 稲や 4. 泡盛ん まらし／おんしゃくん 作て 5. 五日まり 祝ひす／七日まり祝ひす」〈仲良田の稲は、外離島の頂の粟も、粒数が数えられない程に実り、豊饒の世である。これらの稲粟は、上納をすませた残りで泡盛をつくり、御神酒をつくり、五日ごとに御祝い、十日ごとに御祝いする〉とうたっているところにあらわれている。

この歌は、祖納村では豊年祭^{フリ}の神祭りの場で、神への豊饒感謝の意をこめた荘重な奉納芸能のはじめに歌い、踊られるものである。それ以外の場では原則として歌舞されないものであった。仲良田の名を負ったこの歌がこのような神聖性を帯びているところにも仲良田の祖納村の人々の生活における位置が明確に語られている、といえよう。

101. なかんとぅ（仲本）

竹富町黒島の小字。島の南西部にある集落で、島の中では古い歴史をもつ。すなわち、仲本は、最初に誕生したアーザト村が繁栄の後ヤマサキ村、ハイフタ村の二村に分村、その後できたンギスト村、ナハシト村、アンナン村、イリバラ村とあわせた7ヶ村が寄り集まってできた集落であった。これらの7村は黒島の南部から南西部海岸よりの地に立地していたので、黒島を襲った津波の打撃をまともにうけたという。後難を避けるため、ンギスト村の仲本家の祖が現在の仲本集落の地へ移転したのをきっかけに、7村がこの地へ集結、村名もあらたに、仲本村として出発することになったという（知念政範『黒島史』1頁）。

黒島は仲本を中心に発展してきたといわれる。「仲本あやぐ」（『南島歌謡大成Ⅳ』アヨー 53）に「1. 仲本ぬ ^{なかんとぅ} ん中に／どう村ぬ ぴるめに（中略）4. うぶ鳥ぬ ぶりぶん／^{かんどぅり} 神鳥ぬ きぶりば（中略）6. 島 うとうんでどう ^び 坐りぶる／村 うとうんでどう きぶる ^{なかんとぅ} 7. 仲本どう 村 やりい／元村どう ふん やりい」〈仲本の真中に、胴村の広庭に大鳥が止まっている。神鳥が来ている。島を支配するために止まっている。村を守護するために止まっている。この仲本こそが村である。この元村こそが国である〉と、仲本

村を元村と歌い、仲本こそ村・国という。元村の呼称には上記のような黒島における仲本の地位が反映しているとみてよいだろう。「あんがまばーし」

(『同上書』ジラバ 99) にも仲本と元村が対語でうたわれている。「仲本布さらし」(『同上書』節歌補遺 46) は「1. 仲^な本^{かん}の^{とう} 村^ぬや／果^{むら}報^かの^ふ 村^ぬ やりば
／大^う井^ふ戸^かば 中^な なし／迎^む里^{かい} 前^{ざと} なし／村^{まい}立ち^{むら}の^た 美^ぬさ／むてい^ち栄^{ゆら}い
ヨンナ」〈仲本の村は果報な村であるから、大井戸を中にし、迎里御嶽を前にして、村立ちの美しさよ。繁り栄えるよヨンナ〉と、仲本を讃えた歌である。

仲本の南海岸には『琉球国由来記』に記された「迎里御嶽 神名 阿宇慶山 黒島村／御イベ名 サタイ主大神」「ハイフタ御嶽 神名 阿宇慶山 同村／御イベ名 エラビヲタイ大神」の二御嶽があり現在も信仰されている。

102. なぐらおん (名蔵御嶽)

石垣市字名蔵にある御嶽。名蔵村の御嶽で、現在はオンヤー(拝殿に相当)の瓦葺きの建物がたち、その奥にイビがある。「あかばれーゆんた」(『南島歌謡大成IV』ユンタ 89) に「1. あかばれーぬ みようまいぬ うはち 2. ばん ぶどぬ うきいなーたびば うきよーりど (中略) 4. なぐらおん ねがい しーなど いくんで 5. なぐらおん ねがい しーぬ むどりん やー 6. さきだおん ねがい しーなど いくんで」〈アカバレー家の、美御前家のウハチ女は、自分の夫が沖縄旅に出かけたので、名蔵御嶽に安全を祈願しに行くといって、名蔵御嶽へお願いしての戻りには崎枝御嶽にお願いしに行く〉とあって、公用で首里へ上国する男の安全を祈願する重要な御嶽であることがうたわれている。これは『八重嶋大阿母由来記』に「定納船両艘上下両度七嶽御願」云々とある、「七嶽御願」の一環としてなされたものである。石垣の市街地から遠く名蔵・崎枝の御嶽へおそらく徒歩で、様々な祭祀道具を携えて婦人たちが参詣していたのである。

この御嶽はオモト岳の西南麓にある。四つのイベ名があるが、このうち二つは「オモト大アルジ」「ナカオモトナカタライ」の名で、オモト岳との関わりをうかがわせている。雨乞いの時、オモト岳の大シキ(水元=水源)を拝する祭儀の前日は一夜、名蔵御嶽で夜籠りをした。大シキ拝みには名蔵御嶽の司が重要なはたらきをした、といわれる(喜舎場永珣『八重山古謡』上巻

310・311 頁)。

名蔵には多数の台湾出身者が居住、営農活動をしているが、これらの人々によって旧暦 8 月 15 日に、家内安全、商売繁昌を祈る通称「豚祭り」がこの御嶽でとりおこなわれている。

103. なぐらだー（名蔵田）

石垣市字名蔵付近の田地。名蔵付近の平野は、オモト連山から流れだした名蔵川及びその支流の恵みをうけて、古くから石垣島有数の穀倉地帯であった。名蔵村は古くは石垣村に属しており、名蔵の田畠には石垣四ヶ村や平得村などの人々が多く出耕していた。^{カーラ ヤマ}川原山道はその便のために開削されたものであった。「あかんに田ゆんた」（『南島歌謡大成Ⅳ』ユンタ 90）は「1. ぴさいむら ういぬむら かにびらヨー 2. あかきんま くらば かけヨー ぬりば しヨー 3. なぐら田かい あかんに田かいヨー ぬりば しー」〈平得村の、上の村の加仁兄は、赤毛の馬に鞍を掛けて乗って、名蔵田へ、アカン二田へ乗って行った〉と謡いだす。続けて、真栄里村の娘イツケーマが名蔵田へやってきて、加仁兄と野合すること、そこへ大浜村の加仁兄が行きあって、それをみとがめる、という筋を謡いついでゆく。この歌から、平得・真栄里村、更に大浜村の人々までが名蔵に田地を拓いていたことが知れる。

名蔵付近には、登野城村の^{ニンブジャー}念仏者の給地（耕作田）であるニンブジャーダーがあったという。

104. なぐらむら（名蔵村）

石垣市字名蔵。石垣島の村落の中では古い方に属する。方音でノーラ。オモト岳の南西麓の平野部に位置している。古くから風土病・マラリアのため村は再三・再四廃村の危機にみまわれたが、そのつど、石垣・登野城・黒島から寄人をして村を保った。しかし、大正 5 年（1916）、ついに廃村となった（牧野清『新八重山歴史』152 頁）。現在の村は、その後、沖縄や宮古、それに台湾などから移住してきた人々によって興された。

名蔵は、古くは石垣村の管轄であったが、1737 年に「石垣・登野城両村

から 513 人を移住させ 600 人として独立村となった」(牧野清『前掲書』152 頁)。「引越節」(『南島歌謡大成Ⅳ』節歌補遺 4) は、そのことを歌ったものと思われる。同歌は「1. 名蔵てる 島 ぬばしぬ 生^むい頂^{ちぢ} やたし／い
 ちゃたら 昔 知る 人や うらん 2. ゆかて ふんしみ んばしぬ 生
 い頂や／島建てや ならん いすじ 元村に 3. 越しゆたい ありば 御
 検使ぬ ゆいに／目差主 みしよち 頭主ゆ 拝がでい 4. 二十^は原^{たはら}ぬ 人
 夫 お雇いゆ しまち／名蔵野ぬ 広^{ひろ}さ んな原ど やたし 5. しど垣ん
 ちまち はるがちん 立^たていてい／うぬが 原々に かん^うだ 植いくま
 ち」〈名蔵という村はクワズ芋の生える頂であった。往ってしまった昔を知る
 人はいない。優れた風水見が、クワズ芋の生えた頂には村建てはできない、
 急いで元の村へ戻れという。引越したければ御検使役、目差役をお招きして、
 頭役様を拜んでお願いする。20 ヶ村の人夫のお雇いをすませ、名蔵野の広
 さ、荒野原であったこの地に、猪垣を積ませ、畠垣も立てて、それぞれの畠
 に芋葛を植えこませた〉と歌う。この歌には新村建ての際の諸段取りが歌い
 こまれており興味深い。まず、村建ての事業で最も重要な村敷の選定に風水
 師が関わっていること。『球陽』には風水師が村の移転・統廃合に関わった事
 例が 33 例記されている。名蔵の村建てもその 1 例に加えられるものである。
 この名蔵村の移転、寄人による再建は『参遣状』『御手形写』などによって確
 認できる。次に、村建てには目差、頭という島の役人だけではなく首里王府
 から派遣された御検使役が大きく関わっていること。そして、営農上憂慮さ
 れる猪害を防ぐために耕作地と山野の境に猪垣・畠垣を延々と築き立てたこ
 と。畠には、まず主食の甘藷を植えたこと等である。

名蔵村には、オモト岳とゆかりをもつ名蔵御嶽・水瀬御嶽・白石御嶽があ
 り、いずれも『琉球国由来記』に記載されている。その由来神話は特異で、
 沖縄の説話文学の代表的なものである。

105. なしいなむら

竹富町波照間島の名石村のこととされる。名石村は島のほぼ中央部、前村^{マイ}
 と境を接している。村の信仰の中心は大石御嶽^{ブイシ ワー}である。名石村はナイシムラ
 [naiji-mura] と呼ばれる。村名は「長石村の義。ナイシ(長石)を神体と

する神社を中心に発達せる村落」であることに因むという（宮良当壮『八重山語彙』161頁）。明治20年代に描かれた古地図（温古学会所蔵・石垣市刊『八重山古地図展』33頁）に「長石村」とある。歌謡にあらわれる名称は「なし」「なーしなむら」「なしいなむら」「なしなむら」「なしぬむら」「なすなむら」であって、「なし」の形を除くと、いずれも naisi という形と重なるものはない。問題は「なしな」「なーしな」の「な」にあるのだが、これはおそらくは、連体格をあらわす格助詞であろう。「なしぬむら」と「ぬ」で「なし」と「むら」をつないでいる例からもそれがわかる。従って、「なしなむら」（他も同様に）は「名石の村」の意ということになるろう。

名石村の名の出る歌謡は6篇（『南島歌謡大成Ⅳ』アヨー48、ジラバ32・52、ユンタ39・117・131）あって、内容的には同一歌群に属するものである。物語は「1. なしいな村 うにぬや／ばが かぬしい ふなしどう 2. うにぬやとう ばぬとうや／ふなしどうとう くりとうや 3. やるびから みゆとうぬ／くゆさから うちぐぬ（下略）」〈名石村の船頭と私とは、童の頃からの夫婦で、幼い頃から一緒に〉と始まる。その後、事件は、男の移り気によって女は泣く泣く実家へ帰るが、やはり船頭の事が忘れられず、酒や肴を準備して彼を訪ねて行くという形に展開する。八重山のほぼ全域で愛唱されてきた歌謡である。

106. なりいや（成屋）

竹富町西表島の離島、内^{ウチイバナリ}離島にあった集落。近代は「西表炭坑」の中心地として賑わったが、大正年間に廃村となった。古くは、西表島の元成屋崎にあった。仲良川河口に元成屋の地名がある（牧野清『新八重山歴史』162頁参照）。内離島に移ったのは1729年である。

成屋のうたいこまれた歌謡は3篇ほどみえている。「そんばれふし」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌29）、「まるまふんさんふし」（『同上書』節歌45）、「そふすけま節」（『同上書』75）で、いずれも西表島を中心に伝承されてきたものである。「まるまふんさんふし」の第3節に「阿立 大立 おかりに 下原 真山 浮道、成屋 舟浮」という、祖納を中心とした集落名の列举に顔を出し、これらの集落との交流をうかがわせる。「そんはれふし」には、

スシバレー

下原・成屋に生活する男女の婚姻の生態が描かれている。また「そふすけま節」は、成屋村・祖納村の村役人と女頭^{ブナジィ}の人事、それに対する世評を歌うのであるが、いずれの歌謡とも、祖納・下原などの集落との関連が明瞭によみとれるものである。祖納を中心とした交流圏があり、成屋はそれを形成する一集落であった。

107. なんかいざん（南海山）

石垣市字石垣にある南海山桃林寺のこと。南海山は山号である。雨乞いの祭儀も行われた。「雨のちぢ（1）男衆の歌うもの」（『南島歌謡大成Ⅳ』雨乞いの歌①アマチジィ 2）に「1. 南海山の 大権現／八重山所の 主さめ
アマタボリ カミガナシ 2. 雨ぬきや 誰やらん／竜王薩陀に 告げ給い／雨 給ぼり 竜王がなし 3. 竜王がなし 雨 給ぼり／雨 降て 御万人 養ゆり／雨 降しやんど 願やびん」〈南海山の大権現は八重山所の主である。雨ヲ下サイ神様。雨を降らせないのは誰か。竜王薩陀にお告げください。雨ヲ下サイ竜王様。雨を下さい竜王様。雨を降らせて万民を養って下さい。雨が欲しくてお願いをするのです〉と謡っている。桃林寺境内にある権現堂にまつられた権現に、雨を宰領する竜王へ雨を降らせてくれるように祈願するのである。この雨乞いは、百姓の婦女子を中心にして村単位で行ってきた第1次～第3次の雨乞い、蔵元の全役人が桃林寺で4日にわたって読経・祈願する第4次の後に行われる第5段階のもので、第4段階の祭儀をしても降雨のない場合に行われた。この祭儀は「本番（在番の誤か。引用者注）ならびに筆者三人に頭三人、諸役人二百余人は美勝（美崎の誤。引用者注）御嶽、大権現、桃林寺の三所において礼拝祈願をした。その状況は円陣を作りつつ、銅鑼太鼓に合わせて雨乞いの歌を唄い、神殿のウブ（イビ）に向い全員合掌三十三拝の最極の敬虔なる礼拝を行って祈願した」（喜舎場永珣『八重山古謡』上巻 320・321 頁）という。

108. なたはま

与那国島祖納の集落の前方の浜。古くは、与那国島随一の港となっていた。ゆるやかに、かつ、小さく湾入した入江であるが、湾口には小島が浮かんで

いた。湾口が北向きであるため季節風の影響をうけやすく、湾口の小島の存在もあいまって入港するのに困難を極めるのが普通であった。ナンタ港から船出する男を送る島の女たちの気持を歌って、八重山の抒情歌として名高い「どなんすんかに」（『南島歌謡大成Ⅳ』スンカニ 3）は「1. なたはま うりて／むちやる さかじちや／みなだ あわむらし／ぬみぬならぬ 2. なたはままでや／とちに うくらりて／やていく あがりざき／みやるび たまし」〈ナンタ浜に下りて手にした別れの盃は、涙があふれて飲むことができない。ナンタ浜迄は妻に送られて、ダティグ、東崎での見送りは恋人の役分だ〉と、ナンタ港の船出のようすを歌っている。また、宮良長包が作曲し、宮良高夫が作詞した「なた浜」は次のようにナンタ浜の風景をうたっている。「1. 波の花咲き 船足軽く 片帆ちらちら 月影のせて 黄金白金^{こがねしろがね} くだくる波に ゆらるる波は あのなた浜 あのなた浜 イヤホ あのなた浜」（後略）。この歌が、白砂美しいナンタ浜の名を沖縄中にひろく知らしめたのであった。

ところで、「ナンタ浜に船が入ると、島の娘たちはアダンの葉で編んだ草履を浜に並べ、旅人の選びとった草履の制作者がその旅人の面倒をみることになっている」などという話が語られもするが、それは、まれびとを迎える島人のこころもちを一部表現してはいよう。しかし、このような話は与那国島だけのことではなく、八丈島あたりでもみられる。説話学的にみればシンデレラ・ストーリーの範疇に入るものである（アランダンダス編・池上嘉彦他訳『シンデレラ』参照。）

ナンタ浜は、現在、護岸が築かれ、むかいの小島へは橋がかけられた。大型船の接岸できる埠頭がつくられて、近代的な港湾へと変貌しつつある。

109. ぬすく（野底）

石垣市字野底。野底村の創建は享保 17（1732）年で、黒島からの寄人による（『八重山島年来記』56・57 頁）。黒島と野底の関係は、この寄人による村の創建以前から、黒島の人々が舟を操って野底に出耕するという形で存していた。

「つんたら節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌 68）は次のように黒島から野底へ

寄人された悲哀をうたっている。「1. かなしやまと ほんとや／いめしやから、遊びかのしや（中略） 3. 嶋とゝみて 思ふたら／ふんとゝめて 思ふたら 4. 浮名から 美御こゑ／美御前から 御差図 5. 嶋別て おはられ／ふんわかりて、おわれ、6. おばたんか、ときなり／野よ底ん はけられ 7. わんたんか、とき、これしや／ふるしまん、のこさり」〈愛しい人と私とは幼い時からの遊び仲間であった。島のある間是一緒だと思っていたら、国のある間是一緒だと思っていたら、沖縄からの御声で、王様からのお差図で、島分けだと仰せられる。国分けだと仰せられる。貴方一人が除けられて野底に分けられ、私一人はとても苦しく、黒島に残されて〉。歌は18節まで続き、愛する者と生木を裂くように別れさせられた悲しみを切々と訴えている。

「久場山越地節」（『同上書』節歌 69）も同じく黒島からの寄人の悲しみをうたったものであるが、ここでは「9. とはらまや、生れ苦しや、野よ底に はけられ 10. かなしやまや、居り苦しや、黒島に のくされ」〈殿原＝貴男は生き苦しくも野底村に分けられ、哀れな私は居り辛くも黒島に残され〉と歌っている。これらでは野底マーペーの山容にまつわる女性の石化伝説——野底に分けられた女性・マーペーが山に登って黒島の方をみようとするが、オモト連山のためにそれすら叶わず、悲しみのあまり山頂の石と化したという話——とは矛盾する設定となっている。

この黒島からの寄人によって創建された野底村は1934年、ただ一人だけで村を守っていた老女（野底マーペーアーパの名で呼ばれていたという）とともに廃村となった（『八重山歴史』245頁）。

110. ぬすくちぢ（野底頂）

比定地未詳。石垣島北部、野底にある山か。「ちぢ」は頂の意で、山のこと。野底の山は野底マーペー（野底岳。標高282m）が有名である。「野底浜ゆんた」（『南島歌謡大成IV』ユンタ112）に「1. ぬすく浜に むいだる かねーら木ぬ／舟ぬ^{ふに} 胴^{どう} とうらりんとうむよー、夫婦ヌキ カヌサヌキ ナラヌヨー 2. ぬすくちぢに むいたる ぴとうむとうくばぬ 舟ぬ 胴 とうらりんとうむよー 夫婦ヌキ カヌサヌキ ナラヌヨー」〈野底浜に生えたカネーラ木が舟の胴体として伐られても、夫婦別れ、愛しい者との別れはで

きないよ。野底頂に生えた一株の蒲葵^{クバ}が舟の胴体として伐られても、夫婦別れ、愛しい者との別れはできないよ」とある。この野底頂^{ヌスクチデ}がマーペー山を意味するかは、これだけでは分らない。

野底マーペーの名は「目ばぎばだら一ま誦言^{ユングトゥ}」（『同上書』ユングトゥ 24）に「野底まーペー姥^{ヌスク あーば}」という老姥の名として出てくるだけである。

111. ぬばまじいー（野浜地）

西表島の崎山半島、旧崎山村付近にある土地の名。現在、ヌバンと呼んでいる土地がこの「ぬばま」にあたると思われる。崎山村は、波照間島の住民を主体とした寄人によって創建された。新村をこの地に建てることを決定させた要因は種々あったが、まず挙げられるのは、肥沃な農耕地に恵まれていること、良港を有することなどであった（「さきやま」の項参照）。港としては「与那国口」「崎山口」などの津口があり、肥沃な耕地として「野浜地」

「兼久地」と呼ばれる土地が着目されたとみられる。「崎山ゆんた節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌補遺 16）はこのことを次のようにうたっている。「1. 崎山ぬ 新村ゆ 建てたる 2. 与那国口 崎山港ぬ ゆやんど 3. 野浜地 金久地ぬ ゆやんど」〈崎山の新村を建てたのは、与那国津口・崎山津口があるからで、野浜地・兼久地があるからで〉。「兼久地」のカニクとは、海岸近くの砂地帯のことである。野浜地と兼久地が対語となっていることはヌバンのすぐ西方がヌバン浜であることから納得がいく。野浜地もカニク状の土地と受け止められる。なお、「崎山じらば」（『同上書』ジラバ 36）には「野浜大地^{ぬばま ぢ}」と伝承されている。

112. ぬばまふつ（野浜口）

西表崎山の津口。「口」（フチィ）とは、リーフが切れて船舶の出入が可能になっているところで、津口と書かれることもある。場所は、崎山湾から南西方向のリーフの切れ目にあたる。これより入るとヌバンに着く。

崎山村は、崎山湾岸に波照間島住民を主体にして創建された。新村をこの地に建てることを決定した要因は種々あるが、この地が肥沃な農耕地に恵まれていること、良港を有すること、西表島の南西方向海上を望見することが

できることなどが主因であった。野浜口はその良港であった。「崎山ゆんた」(『南島歌謡大成IV』ユンタ 31) は冒頭で「1. 崎山ぬ 新村ゆ 立てだそ 2. なゆぬ ゆん いきやぬ つねんど 立てだそ 3. 野浜ふつ かにく地ぬ ゆやんど」(崎山の新村を建てたのは、何の故に、如何なる理由で村建てしたのだ。それは、野浜口、兼久地の故にである) と謡っている。村建ての理由を野浜口(港)と兼久地(耕地)の存在に求めているのである。

野浜口の「野浜」という名称は、「崎山ゆんた」(『同上書』ユンタ 141)、「崎山じらば」(『同上書』ジラバ 36)に「ぬばま^ぬじ^まじい」、「野浜大地」という地名として出ている。野浜は、現在ヌバンと呼ばれる土地と目される。なお、「野浜口」をとりあげるのは上記引用ユンタと「崎山節」(『同上書』節歌 25)で、「ゆなぐぐち」「崎山口」(「崎山ゆんた」『同上書』ユンタ 141)という形になっているのもある。また、「与那国口」の名もみえる(「崎山節」)。安溪遊地氏の調査によると、ヌバンの前の浜がヌバンヌパマであり、パイミ崎はヌバンザキである(『崎山節のふるさと』57頁)。

113. はいきどー

比定地未詳。「はいきどー」の「はい」は「南^{バイ}」と考えられる。「きどー」については不明。「南^{ばい}きどーゆんた」(『南島歌謡大成IV』ユンタ 65)は「1. 南^{ばい}きどーの^ぬ 下^{しいむ}きどーの^ぬ とうんぎゃーら 2. とうんぎゃーらの^ぬ 女童^{みやらび}の^ぬ 生^{んま}りや」(南^{バイ}キドーの、下^{バイ}キドーのトウンギャーラ、トウンギャーラの、女童^{カニ}の生まれは)と始まって、この娘が母親の目をかすめて隣家の兼兄と恋愛をしているが、兼兄との恋愛を母に伝える(許しを乞う)ように頼むという筋になっている。上記の引用からも分かるように「南^{ばい}きどー」の対語は「下^{しいむ}きどー」である。この両語について宮良当壮は、「村の南部に在る地名。対句の必要上、語を替えて南と下^{バイ}とを用ゐたものである。村落の北部が^{シム}高く^{ウイ}て南方へ傾斜してゐるがために、北が上、南が下、即ち上の村、下の村と呼ばれるのである」と、「南^{ばい}きどー・下^{しいむ}きどー」を石垣四ヶ村の土族居住区である下の村^{シムヌムラ}と考えた。更に「きどー」について「原義不明の語であるが、強ひて想像を逞しうして見るならば門をゾーと云ふから、木で造った門、即ち木戸の意味か、或は又中^{ナカ}ドー道^{バイ}に対して南^{シム}キドー(或は下^{シム}キドー)と云つ

たものか。この場合のキドーは街道の転訛したものであるか。併しながら村の一部分の称であることは疑ふべからざることである。屋号ではあるまい」と考察している（宮良当壮・宮良長包『八重山古謡』第2輯119頁）。

114. はいさこだ（南サコ田）

① 竹富町「西表島南風見村の南西方の崎」（喜舎場永珣『八重山古謡』下巻348頁）とされる。喜舎場の見解は、「生家が南風見村と称する西表島の南方の崎で、2、3軒しかなかった、いたって寒村に生活していた」美しい女が、境遇に恵まれないため、いつしか「誰とも情交をしていた女」という悪評をたてられるほどの生活をしてしまう、という内容をうたった「南サコダジラマ」（喜舎場『同上書』345～348頁）にもとづいたもので、同歌の冒頭部に「1. パイサコダ ムムスリヌ シカラサ」〈南サコダ、ムムスリの淋しさよ〉とある「パイサコダ」について述べたものである。ちなみに、『参遣状』に南風見村を「佐久田村」と改称する申請がなされたことがみえ（喜舎場永珣蔵『参遣状』（三）の乾隆2年の項参照）、南風見付近にパイサコダ（南佐久田）のあることが想像される。

② 竹富町波照間島の地名。富嘉部落の中にある。波照間島に伝えられる雨乞の願詞に次のようにうたわれている。「34. はいさきよだ しきとうしよ はりぬよんがなし 35. 名阿多原 しきとうしよ はりぬよんがなし」〈ハイサコダに雨水が満ちつづけ、ハリヌヨンガナシ、名阿田原に雨水が満ちつづけ、ハリヌヨンガナシ〉（「新 本御願の雨乞」『南島歌謡大成IV』雨乞いの歌③-19）。また、「明宇底御嶽の雨乞」（『同上書』雨乞いの歌③-18）にも「42. はいさこだ ゆどやしよ」〈ハイサコダを淀ませて〉とある。ハイサコダのハイは南、ダは田かと考えられる。サコは迫で、南の方にある迫田（南迫田）であろうか。ただ、波照間島は低平な島で、迫というような地形に乏しいから、迫田という解釈は問題かとも思われる。

115. ぱいふた（南風保多）

竹富町黒島にあった集落。黒島の南部（現在の仲本集落の南方）にあったと伝えられる。島に最初に興ったアーザト村からヤマサキ村とともに分村し

てできたと伝えられる。海岸地帯に立地していたため、往古、黒島を襲った津波の被害を受け、後に立村した仲本村に吸収された（知念政範『黒島史』1頁）。パイフタのマキ泊には八重山の造船史上初の造船所が設けられたと伝えられる。『琉球国由来記』第21巻（八重山の巻）の「船作由来之事」に黒島での造船の事が記されている。この造船所は後、宮里村の船浦に移された（前掲『黒島史』53頁）。

このような位置にあるパイフタ村の村落生活の一面を語ったのが、沖縄古代文学にあって特異な「南風保多ふんたか」（『南島歌謡大成Ⅳ』ユングトゥ59）である。このユングトゥの内容は「パイフタ村のフンタカは三棚船を造船し、父祖の地である宮古島へ曲玉を買いに航海する。フンタカの船は順調に航走し、やがて宮古島へ安着。フンタカは旅の目的であった曲玉の購入を無事すませ、船一杯に満載し帰途につく。意気揚々と帰島したフンタカは、つい、『黒島の神とこのフンタカとは同格だ』と放言、神の怒りをかってしまう。フンタカは神の怒りを解くため、必死の詫言を並べる。そのあまりのおかしさに神もつい笑いをもらし、フンタカの罪を許してくれた」というもの。パイフタ村における造船、曲玉の需要とそれを満たすための航海等々といった興味深い事柄が語られた貴重な口承文芸である。

パイフタ村には『琉球国由来記』に「ハイフタ御嶽 神名 阿宇慶山 同村／御イベ名 エラビヲタイ大神」と記されたパイフタ御嶽があった。現在も仲本集落を中心にして信仰されている。

116. はざま（玻座間）

竹富町竹富の小字。竹富は往昔は玻座間と仲筋の2村からできていたが、玻座間が首邑であった。竹富島に伝えられる「竹富元口説」^{はざまくどうき}「玻座間口説」^{とけとみくどうき}（『南島歌謡大成Ⅳ』口説11、12、13）のいずれにも玻座間は歌われている。「玻座間口説」は「1. 八重に 成り立つ 玻座間島／島ぬ
なが くに まこと ゆたか しがた むら ありさま みわた はざま
流りや 国なりし／誠 豊ぬ 姿なり 2. 村ぬ 有様 見渡しば 波座間
なかすじ なら た みゆとう わぼく そ けしき
仲筋 並び立ち／夫婦 和睦ぬ 其の 景色」〈八重に成り立つ玻座間の村の島（村）の流れは国となり、まことに豊かな姿である。村の有様を見渡せば、玻座間村・仲筋村の2村が並び立ち、夫婦和睦の姿そのままの景色であ

る」と波座間を讃美している。

村の主要御嶽である波座間御嶽は『琉球国由来記』に「波座間御嶽 神名
豊見ヲレ山ノ御イベ名 ハタト大アルジ 屋久島ヨリ御渡。根原
カミトノ、ヲガミ初ル」とある。

117. はていろ一ま（波照間）

竹富町波照間島。八重山諸島中、最南の島である。このことから「下八重山」の異称がある。隆起したサンゴ礁の島で、稲作には適さないが、古くから天水田を拵えて稲作に励んできた。戦後期まで天水田は残っていたが、現在はサトーキビ畑にかわった。マラリヤ等の風土病も少なく、王国時代には再三、他島の新村建てに寄人を出す島分けの悲劇にみまわれた。「崎山ゆんた」（『南島歌謡大成Ⅳ』ユンタ 129）は、西表島の崎山村の建設にたずさわった波照間島の人々の悲しみをつづったもので、次のような内容である。

「崎山の新村を建てたのは、どの役人であるかと問えば、それは、波照間島の首里大屋子役様である。如何なるわけで崎山に村建てをしたのかというと、それは崎山に与那国津口、兼久地の耕地があったからだよ。そのために波照間から女が 100 人、男が 80 人も島分けされていくという。島分けは、道切りの方法でなされるのか、並み切りの方法でなされるのか、誰々が分けられるのだろうか、と思っていたら、なんと我が身のことであったのだ。許して下さい御役人様と泣きすがっても、御役人のいうことには、これは私の考えでやっているのではない。首里の国王様の御考えなのだ、という返事。どうしようもなく、泣く泣く崎山に分けられた。しかし、暮らしてみると崎山もなかなかよい所だと思えるよ。そうしているうちに夏の遊び月となって、村の後のユクイ頂うしろに登って波照間の方を見上げると、いとしい母の顔を見るようで、恋しさのあまり涙があふれて島影も見えなくなる。渡ろうと思っても船路だからそれもできない。泣く泣く、そのまま帰ってきたことだ」。

波照間からの寄人は、明和の大津波（1771 年）の後に石垣島の白保村、大浜村へも渡っていった。白保村には阿底御嶽が勧請・分祀されて波照間御嶽が創建され（同御嶽のオンヤーに掲げられた扁額に「乾隆五拾八年」（1793）の年号が記されたものがあるから、移住後早い時期に創建されたことが分かる）、大浜村には大石御嶽が勧請・分祀されている。なお、白保方言は現在で

も波照間方言と共通の要素を多数保有している。

波照間島には富嘉、名石、前、南、北の5集落がある。なかでも富嘉集落の保多盛家は波照間島創世の神話と関わりをもち、この村の司は他の村の祭祀にも関与する。富嘉には阿底御嶽、名石には大石御嶽、前には大底御嶽、南には新本御嶽、北には美底御嶽がある。これらの村内の御嶽は、野原にある三つのピテーヌワー（野原の御嶽）に所属する。即ち、阿底は^{マートゥリィ}マートゥリィワーに、大石と大底は^{アバティ}アバティワーに、新本と美底は^{シイサバル}シイサバルワーに結びついている。

『おもろさうし』に「又、いなぐにぎやめむ はてるまぎやめむ ともゝすゑ あぢおそいす」〈与那国迄も、波照間迄も、永遠に按司襲いこそ（ましませ）〉（巻11－558）とあるのは波照間島のことである。しかし、上記の詞句の1節前にある「又、やへましまぎやめむ、はたらしまぎやめむ、ともゝすゑ、あぢおそいす」〈八重山島迄も、ハタラ島迄も、永遠に按司襲い様こそ〉とある「はたらしま」は、波照間島ではないだろう。「はたら」から考えられるのは、「^{ハタ}端の^ラ処」か「^{ハタ}二十^{ハラ}原」である。前者だと八重山の地理的位置に因んだ異称、後者だと八重山の村数で八重山を別称したものとなる。「いんしが一ぬ金盛ゆんた」（『南島歌謡大成IV』ユンタ 216）他の歌謡にも「八重山^{はたはら}二十原・宮古^{ゆすはら}四十原」と、この例はみえる。いずれにせよオモロの「はたらしま」を直接「波照間島」と解するには難がある。

118. ばとうま（鳩間）

竹富町鳩間。鳩間島は字鳩間の一村だけであるが、祭儀等では東村と西村の二つに分かれる。鳩間村の村建ては「伝説によれば、西表島のヒナイ村から、6名の移住者によって建てられたといわれている」とする説（牧野清『新八重山歴史』165頁）、「鳩間島は、鳩間儀佐真氏の計画、尽力によって古見村から男8人に女6人の計14人で山林を開拓して小村を建て、古見村の管轄となっていた」（喜舎場永珣『八重山古謡』下巻390頁）という説がある。村建て後の新住民の移住については、人数の相違はありながらも、黒島よりの寄人である点は、牧野氏・喜舎場氏ともに一致している。喜舎場氏はヒナイ村と鳩間村との関わりについて、「比川村」が「マラリヤ病のために人口減少したのでやむを得ず、鳩間島に合併せられ」（喜舎場『同上書』390頁）

たとしている。鳩間島の南海岸にある^{ヒナイ}鬚川御嶽は、牧野氏説・喜舎場説にみえたヒナイ村との関わりのなかからうまれたものであろう。『琉球国由来記』に「ヒナイ御嶽 神名 フチコハラ 同村／御イベ名 イリキヤニ」とある。

ところで、毎年3月の壬の日に行われる「^{ユニガ}世願い」の祭祀でうたわれる「^{ばとま}鳩間元じらば」（『南島歌謡大成Ⅳ』ジラバ70）は、大意次のようにその村建ての経過をうたっている。「我が鳩間を建てたのは、パニスツという村役の叔父様を頭にして古見村から寄人したのである。しかし、これだけでは村は成りゆかず、黒島の内から男女を新たに寄人したわけだ。その時の様子はというと、西表島のカサイ浜に舟を着け、片手では子を抱き、片手では麻笥をもって、ユナラの潟原、フミラ浦の渚を歩いてきたのだ」。村建ての経緯を記した文書そのままに、古見、黒島からの移住を謡い、あまつさえ、往時の島間移動＝交通のありようまでが彷彿とする内容である。また、「^{はとうま}ばが鳩間じらば」（『同上書』ジラバ71）は、古見村からの移住によって村建てはしたものの、まだ古見村の管轄下にあって、蔵元からの「親廻り」「算引合」の役儀の度に「西表に渡って、インダ浜に渡って、カキラ^{チイヂイ}頂道、インダ浜道を歩き、次には由布島の潟原を脛の半ばまで水につかって行く。その後は野底浜道、カケラ越地の峠道を歩いて古見の役所に到る」という苦行をくりかえしたことを謡っている。黒島からの寄人により独立村としての鳩間村は成立した。それによりこのような行政制度による苦痛から解放されることにもなったのである。1701年のことである（『参遣状抜書』上巻54～56頁）。

独立村となった鳩間村であるが、その主要耕作地は西表島の北部平野地帯であった。このため、西表の上原・船浦人との間で農耕地をめぐる軋轢を生じ、新たにインダ、福浜、シィザパナリといった未開地を開墾することとなった。「鳩間節」（『同上書』節歌28）はこの新開の耕地で五穀の豊饒を得る喜びを高らかに歌い、予祝したものである。

119.ばなり（離れ）

① 西表島船浮湾外にある内離島、外離島のこと。「ばなり」は離れが原義で、離れ島のことである。内離島、外離島ともに、主島である西表島より離れているところから「ばなり」と称されたのである。内離、外離の名称も、その

本体は「離」にあるのであり、「内」「外」という冠辞は、西表島に対する両島の位置関係からかぶせられたものである。内離島には成屋村^{なりや}があった。

「西表口説」(『南島歌謡大成IV』口説6)に「1. さてむ 豊ぬ 西表や／じみん豊庫に 立ちまして／まくと 豊な ためしなり。(中略)。6. はなりばなりに くぎわたる／舟ぬ 音声 たえまなく／行くも かえるも おもしろや」〈さても豊かな西表島はジミン(未詳)宝庫に立ちまさり、まことに豊かなありさまである。外離島、内離島に漕ぎわたる舟の艚音は絶え間もなく、行く舟、帰る舟のさまのおもしろさよ〉とある。内離島・外離島には祖納村の村人の耕作する畑があって、そのために舟が往来していたのである。

この島で栽培する粟は、祖納村を守護する神へ奉納される神酒をつくる神聖なものであったようで、「仲良田節」(『同上書』節歌12)に次のように歌われている。「1. なから田の 米や／はなりつゝ あはん 2. 粒 しらん みぎり／みろくよかほ 3. 年貢上納 上て／御残の 稲や 4. 泡盛ん まらし／おんしゃくん 作て 5. 五日まり 祝ひす／七日まり 祝ひす」〈仲良田の稲は、外離島頂の粟も、粒数が数えられない程に実り、豊饒の世である。これらの稲粟は、上納をすませた残りで泡盛をつくり、神酒をつくり、五日ごとに御祝い、十日ごとに御祝いをする〉。内離・外離と西表島の間にある濤のことを「ぱなりみじゅ」という。

なお、内離・外離両島には石炭の鉱脈が通り、明治以後から戦後一時期迄採掘が行われていた。

② 竹富町新城の異称。新城は上地島、下地島の2島よりなる。「ぱなり」とは離れで、離れ島の意である。上地・下地の総称は初め下地島の中央部にあった中城^{ナカスク}の名を選ぼうとしたが、その名が尚王朝の歴代の長男子に冠せられることより、同名の部落名となるのを憚^{アラスク}って新城とされたという。また、パナリの主島は下地島とされ、下地島には七つの小集落があった(安里武信『新城島^{パナリ}』3頁)。歌謡では「パナリ」と「下地」が対語でうたわれている。例えば「離ぬ^{ぱなり} ぬすびやーま 下地ぬ女童^{しむじ みやらび}」〈パナリのヌスビャーマ女、下地島の乙女〉(「竹富ぬぎらいちえーま」(『南島歌謡大成IV』ユンタ210))のようである。

現在、パナリというと陶器のパナリ焼きがすぐに思い出されるようになって

ているが、それは古くからのことであるらしい。「水甕と替えられた娘」の悲哀をうたった「仲筋節」（「仲筋ぬぬべま」とも。『同上書』節歌 33）、「ぱなりちいちいやーみゆんた」（『同上書』ユンタ 218）にそれがうかがえる。後者は次のように謡っている。「パナリの若者、下地島の乙女は早朝から目覚めて、箆を肱にぬき、金串をもって前の嶺に登ってゆく。そこで赤土を掘り出し、前の浜の砂と混ぜて練り揉んで、土鍋・厚鍋を型どって日の 7 日、夜の 6 日干し晒して作りあげる。そして、その土器を自分の船に載せてまずは黒島の保慶村へ運び込み、村の家々を土鍋・厚鍋を買ってくれ、小豆や大豆と替えてくれと廻って行く」。新城の経済・交流を語った古謡として貴重である。

パナリの呼称は、上地・下地の両島が小海峡によって隔てられ、離れている故という説があるが、上地・下地両島が黒島の属島・離れ島であることによることも考えられるか。「しむぢい（下地）」の項参照。

120. ばらびどう

石垣市字登野城の小字の名。登野城村の区画は南の美崎の海岸から北へ、島の中心部・オモト岳の方向へ細長く延びている。バラビドーは、四ヶ村の後方に連なる前山の一つであるバンナー山の北方に位置する地帯である。その北は嵩田で、オモト岳の山中へとつづいていく。つまり、前山と後山にはさまれた地域の一区画である。川平村の^{ひしばら}「猪垣払いの日の猪垣補佐の願詞」（『南島歌謡大成Ⅳ』ニガイフチィ 8）に「（前略）大山しくぬ かしどう ばらびどうな一ぬ まい うる たかばな な一ぱなぬ 大瀬 長瀬へ きぢやん ちみ かきだ ばいや きぢやん ちみん ぶりとうろーり（後略）」〈大山の底のカシドー、バラビドーの前に棲む、高鼻・長鼻＝猪の忌名が大猪垣・長猪垣へ蹄・爪を掛けた場合は、蹄も爪も折ってください〉とあるのは、オモト岳及びその周辺が猪の棲息地帯で、猪害に悩まされてきた地域の証しである。バラビドーはオモト連山山麓から農耕地となる地帯にあって猪害の甚だしい地域であったのである。

121. ばんなーやま（バンナー山）

石垣島南部、石垣四ヶ村の後方にある山の名。標高 230m。バンナー山は「岳の頂 (takinutsidzi) と鞍山 (ffadzan) との間」(宮良当壮『八重山語彙』197頁) にあって、オモト連山の前方に位置する山なみを形成している。この山なみ（多良間嶺^{タラマンニー}、岳の頂^{タキヌチヂイ}、万勢岳^{マイシ}、鞍山^{フファザン}、石底山等々^{イシスクヤマ}）を前山^{マイヤマ}といい、後方に高く連なるオモト連山^{シーヤマ}を後山という。

バンナー山は古来より雨乞いの舞台となってきた。石垣四ヶ村の雨乞の第3次段階の祭祀に「前水^{マイミジウガ}拝み」があるが、これは上記の前山の水源から流れ出している「前水」を拝み、降雨を祈るものである（喜舎場永珣『八重山古謡』上巻 307 頁・308 頁、『八重山民俗誌』上巻 82・83 頁）。この時、次の歌（『南島歌謡大成Ⅳ』雨乞いの歌③-2-1）がうたわれる。「1. しきむと^{うが} 拝むんゆー 2. 水むと 拝むんゆー 3. 側川^{すばがー}に 拝むんゆー 4. 雨欲し^{あみふ} やぬ ならぬゆー 5. 水欲しやぬ ならぬゆー（後略）」〈敷元＝水源を拝みます。水元を拝みます。スバガニを拝みます。雨が欲しくてなりません。水が欲しくてなりません〉。バンナー山の東南方には地城御嶽^{ギシュク オン}があって、平得・真栄里村の祭祀場となっている。前山での雨乞いは四ヶ村の他、平得・真栄里の両村もおこなってきた。前掲『八重山語彙』に「物識川 [munupsī-ka:-ra] あり。早魃の際には平得の巫女等来たりて盛大なる雨乞いの祈を捧ぐ」とある。

122. ぴいさいむら（平得村）

石垣市字平得。異称はウイヌムラ(上の村)。この異称は真栄里をシィムヌムラ(下の村)と呼ぶのに対するもの。平得の方が真栄里よりも上手(山手側)にあることからそう呼ぶのであろう。「あかんに田ゆんた」(『南島歌謡大成Ⅳ』ユンタ 90) に、「1. ぴいさいむら ういぬ むら かにびらヨー 2. あかきんま くらば かけヨー ぬりば しヨー 3. なぐら田かい あかんに田かいヨー ぬりば しー 4. まじどむら しいむぬ むら いつけーま 5. くるきんま くらば かけ ぬりば しヨー 6. なぐら田かい あかんに田かい むかいばしヨー」〈平得村・上の村の加仁兄は、赤毛の馬に鞍を懸けて乗って名蔵田・アカンニ田へ行く。真栄里村・下の村のイツケーマ

は、黒毛の馬に鞍を懸けて乗って名蔵田・アカン二田へ向かって行く」とある。この歌には、平得・真栄里の隣村関係が両村青年男女の関係を通して描かれていると同時に、両村の農耕地の広がり（名蔵田・アカン二田）までが示されている。「いらふねゆんた」（『同上書』ユンタ 105）では「1. ばが ひらーい うーうやきばら」（我が平得、大富裕の村）と美称されている。平得は歌謡語としては「ぴいさいむら・ぴさいむら・平得村・ひらーい」と表記されている。

『琉球国由来記』に平得村の御嶽として「糸数御嶽 神名 国ノ根 平得村／御イベ名 イベスシヤカワスシヤ」とある。「まじどうむら（真栄里村）」の項参照。

123. ぴいさがーむりい（平川杜）

石垣市字石垣にあった杜の名。「ぴいさがー」の名は石垣村を構成するハカの一つであるピィサガーパカに見えている。このパカは集落の海岸部から内陸に及び、集落の西側部分を占めている。パカ名は宮島御嶽の創設説話に語られる「平川カワラ」に由来するものであろう。ピィサガームリィはこのパカにあった森である。喜舎場永珣によると、「平川パカの南方海岸は森林であつたので、平川森と称していた」（『八重山古謡』上巻 288 頁）という。大川村に伝承されてきた「世乞ちいじい」『南島歌謡大成Ⅳ』種子取祭の歌 1）に「13. じいまじいまどう 船着き／どうきやどうきやどう みじゅみちい
14. ^{ぴさがーむりい}平川森どう 船着き／びゅうりい山 みじゅみちい 15. ^{のう}稔る 世
ば ^だ抱き^う下るし／弥勒世ば 取りい下るし 16. ぴさがー森ん 持ちいなぎ
／びゅうりい山ん 積んなぎ 17. ぴさがー森ぬ 余りいんや／びゅうりい
山ぬ 残りんや 18. ^{やー}家ぬ ^{めーかじい}庭毎 持ちいなぎ／きぶりい^{かじい}毎 積んなぎ」〈どこがどこが船着き場、どこがどこが滞道。平川杜が船着き場、ビューリィ山が滞道。稔る世を抱き下ろし、弥勒世を取り下ろし、平川杜に持ちこみ、ビューリィ山に積みこみ、平川杜の余りは、ビューリィ山の残りは、家の庭ごとに持ちこみ、煙＝家ごとに積みこみ〉とある。この歌謡は、神の島から豊饒の世を載せてやってきた船が平川杜の船着き場にやってきて、五穀を積み下ろし、村中の家・蔵を満たせた後で、種子を長間田原・大田原に播種する、という内容の歌謡である。平川杜の海岸が石垣・大川両村の船着き場で

あったことがこれで知れる。

なお、『大波之時各村之形行書』（1776 年）に「蔵元と西下小間壺町拾七間、平川浜と申所二地船すら揚格護仕申候」（『石垣市史叢書』12 16 頁）とあって、ここに船着場・船揚場のあったことが確認できる。ピィサガームリィの対語の「びゅうりい山」の名は、平川杜の一带がクワズイモの繁茂地であったからという（喜舎場永珣『八重山古謡』上巻 288 頁）。

124. ぴいさたばる（平田原）

石垣市字登野城後方にある田畑地名。古来から石垣島有数の水田地帯として耕作がなされてきた。本土復帰後は水稻団地の整備事業が行われ、昭和 52 年度に土地改良事業が完了、基盤目状の水稻団地が完成した。その面積は約 22 ヘクタールで、用水は宮良川の水が利用される（『八重山毎日新聞』1984 年 2 月 11 日）。「久場本節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌補遺 31）は、久場本御嶽・大石垣御嶽の「イヤナス神・タルファイ神」に降雨を祈願したその夜から大雨が降るように謡う。次いで、「給うられぬ 余いや 6. 水道原 溢らし 溢らしぬ 余いや 7. 平田原 溢らし 溢らしぬ 余いや 8. あぶな一井戸ば 溢らし」〈(雨を)下さっての余りは、水道原を溢れさせ。溢れさせての余りは、平田原を溢れさせ。溢れさせての余りは、アブナー井戸を溢れさせ〉と謡って、ついには新川村の前の海が泥水で真赤になるまでの大雨を下さいと謡い納める。ここにあげられた地名の関係から、平田原がフナーシードーの流域、水道原と通称される田畑と隣接することがわかる。

125. ぴないさーら

西表島北部にある滝。西表島船浦湾の南東方を流れるピナイ川にあって、高さ 45m。沖縄で一番高い滝である。遠望すると、白布を山中から垂らし、晒しているように見える。海を隔てた鳩間島からもみえるが、日照りがつづくと望見できなくなる。「さーら」は「下がり・ア」（下がっているもの）の変化した形で、滝のこと。この滝のある地域にはかつて、ヒナイ村があったという。しかし、この村は「マラリヤ病のために人口減少したのでやむを得

ず、鳩間島に合併せられ独立村を廃止せられた」(喜舎場永珣『八重山古謡』下巻 390 頁)。竹富島の「久間原御嶽願い口〈神口〉」(『南島歌謡大成IV』ニガイフチ 74) に「20. なかじら ^{くまーら おん にが ふち} ぴねーるざーる ^う 降りみそーる ^{うー} 大やん ^{しゅ} 主やん」〈仲良山、ピナイサーラ滝に神降りしたまう大親・主親〉とあるのは、やはりこの地が神聖な土地とみられていたからである。「鳩間口説」(『同上書』口説 8) は「4. まえに みゆるわ ぴないさーら／うみに ^{うい} ながゆる たつかわや／ゆゆむ ^{すむ} かわらぬ うむしるよ」〈前に見えるのはピナイサーラ。その海に流れ立つ川の姿は代々も変わることなくすばらしい眺めである〉と、その美しさをうたっている。

126. ひゃんだんだき

比定地未詳。この名称は「ひゃんだんだきあよう」(『南島歌謡大成IV』アヨー 34) にみられるものである。同歌は「1. ひゃんだんだきぬ ももすりぬ ^{うい} ちかさま 2. 上ぬ 道や 山みやらびぬ かゆい道と やる 3. 下ぬ ^{すむ} 道や いしゅみやらびぬ かゆい道と やる (下略)」〈ヒヤンダン岳の ムムスリのチカサマ女、上の道は山の乙女の通り路である。下の道は磯の乙女の通り路である〉と謡いだすのであるが、土地を特定する手がかりはない。ただ、「ももすり」という語が、「南さこだじらま」(『同上書』ジラバ 81) に「1. ぱいさこだ むむすりぬ しからさ」、「ぱいさきよだじらば」(『同上書』ジラバ 118) に「1. ぱいさきよだ むむすでいぬ しかさま」と、「むむすり」「むむすでい」の形で出ている。これらの例では、「むむすり」は「南サコダ」の対語である。「南サコダ」は「南風見村の南西方の崎」(喜舎場永珣『八重山古謡』下巻 348 頁) とされるのみで、「むむすり」に関しては不明である。ヒヤンダンドキのダキが「岳」か否かも厳密に言えば不明。「はいさこだ (南サコ田)」の項参照。

127. ふうがーむら (大川村)

石垣市字大川。石垣の四ヶ村を構成する古い村である。大川村は、東からクシマタパカ、ハンナーハカ、フウガーハカ、プンナーハカの四つのパカ (居住区域) で構成される。集落の後方には村の信仰の中心地である大石垣

御嶽がある。村の創建は、1757 年、登野城村の人口2,110人のうち、1,050 人を分けて新村としたことによる。

年代は確定できないが、「東ぬ井戸節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌補遺 5）に、人居のまだ疎らな時代の大川村の姿が垣間見える。「1. 大川村 ^{とうら} 寅ぬ方／明き屋敷 あまた／井戸 ^{ねん} ねん ゆいどう／人 ^{びとう} や 寄らん／村ぬ 兄弟 ^し しきいみより 2. 所柄 ^{とくるがら} はかてい／井戸敷 ^{かー} ゆ ^{しきい} さだみ／急ぎ 掘りだしゆる／ていだてい すらな／ゆらていくへ うっとうん子。（中略） 7. 屋敷 ^{ねん} ねん ^{うっとうんぐわ} 弟 子／ゆらでい 家 建ていり／清ゆ水ゆ ^{しい} しいでいてい／栄 ^{さか} い ^ふ 誇くり」

〈大川村の東北方は明き屋敷が数多い。それは井戸がないため人が寄りつかないからだ。村の兄弟達よ聞いてみよ。所柄を調べて井戸敷を定めて、急いで井戸掘りの手だてをしよう。寄ってこい弟達よ。屋敷のない弟達が寄り合って家を建て、清水を頂いて栄え喜んでいる〉。

ここで歌われている「東ぬ井戸」は大石垣御嶽の南西約 100m、「宮良医院の東方丁字路に位置している」（喜舎場永珣『八重山民謡誌』131 頁）。喜舎場永珣によるとこの井戸は「大川村の崎原当貴翁が大川目差を勤務しておられた時、（中略）村の東北方の空地に共同井戸を掘らしめた」のによるという。宮良当壮も同説である（「琉球八重山諸島の民謡」『宮良当壮全集』11 巻 398 頁）。崎原当貴は 1846 年の生まれ。

128. ふかい（桴海）

石垣島の北西部、オモト連山の山麓平野部にあった村である。オモト連山の二つの高峰のうちの一つが桴海オモト岳で、桴海の後方に聳え立っている。桴海村は、^{ヤマバレー}山原と荒川の間を村敷としていたが、津波やその他の理由によって大田兼久、大原と移動した。廃村までの村敷は大原にあった（牧野清『新八重山歴史』153 頁）。桴海の村建てについて「桴海布晒節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌補遺 10）に「1. 桴海ている 島や 川平内どう やだそぬ 2. 癸 ^{みんぬとうぬとうり} 酉ぬ 年に 桴海原 ^{みぶきん} 建ていてい 3. 天加那志御恩義 うやき世ば 給ばられ」〈桴海という村は川平村の内であったそう。癸酉の年に桴海村を建てて、天加那志（国王様）のおかげで、富貴の世をいただいて〉とあって、桴海村の川平からの独立を ^{みんぬとうぬとうり} 癸酉の年とうたっている。桴海村は「宝暦 3 年

〈1753〉両村（仲筋村・川平村－引用者注）の人民 144 人に平得村から 100 人を移して独立村とした」（牧野清『前掲書』153 頁）という。宝暦 3 年の干支は癸酉で、前掲歌で「癸酉ぬ年に 桴海原 建てていてい」というのは、正確な伝承ということになる。

桴海村とオモト連山との関わりが「桴海ぬ高ぱんかーぱん誦言」（『同上書』ユングトゥ 33）に「わんど^{ふっかい} 桴海ぬ 高ぱんかーぱん筑登之（中略）、白^{しる}み^{うむとう} 登りよう^{うむとう}り／白^{ふっかい}み^ぎきゃん木^{いちい} 五^ぎき^{いちい}じゃん き^うじゃ^うって^{あか}い／赤^{あか}み^{てい}照^{てい}らしい 登^うぶ^うて^うい 赤^{あか}み^{てい}い^{てい}じ^{てい}ょう 七^{しち}ぎ^{しち}じゃ^{しち}ん き^うじ^う下^うる^うし」〈私が桴海村の^{たかばん}高足カーパン筑登之である。白いオモト岳にお登りになって 白い榎木の 5 本を削って、赤い照らし山＝オモト岳に登って、赤いイジョ木の 7 本を削って下ろして〉とうたわれている。オモト岳は木材の重要な供給地であったことがわかる。

「親廻節」（『同上書』節歌 73）に「2. 川平からの 戻りんや 桴海まで 御供す 3. 桴海からの 戻りんや 野底まで 御供す」とあって、親廻り（王府派遣の高官および蔵元の高官・頭などの地方巡察）の行われた時代には川平、野底の中間にあって、裏石垣の集落として重要な地位を占めていたらしいことが分かる。また、マユンガナシの行事が行われるなど、文化的にも、川平から伊原間・平久保・安良へ及ぶ北部石垣民俗圏の中に位置していたようである。

『琉球国由来記』に桴海村の御嶽として「イテホタ御嶽 神名 嶽名同／御イベ名 ハルケ大アルジ」「ネハラ御嶽 神名 嶽名同／御イベ名 ヲラフムンサケ」の 2 嶽と野底の「野底御嶽」、伊原間の「半嵩御嶽」が掲げられている。『琉球国由来記』成立の頃の桴海村の村域の広さがうかがいしられる。しかし、昭和初期の桴海村の御嶽はニーバル御嶽、マイドゥマリ御嶽、ピューズ御嶽、ピューズ御嶽ノ脇御嶽の四つであって、桴海の本御嶽はニーバル御嶽であったという（新本ニルムイ「桴海のマユンガナシ」『八重山文化』4 号 97 頁）。ピューズ御嶽は川平から分祀してきたという。川平村との関係は相当深かったことが推測される。

129. ふかむら（富嘉村）

竹富町波照間島の集落。波照間の5集落（富嘉、名石、前、南、北）の他の4集落が島の中央部に集在しているのに対し、この村のみが島の西部にある。このことから「ふか」に「外」の字をあて、「外村」と記す場合もある。

この村は波照間島の創世と関わりをもつ村で、創世神話に語られる保多盛家及び同家の東隣りにある阿底御嶽^{アスクワー}が信仰生活の中心となってきた。波照間島の創世神話は次のようなものである。「昔、波照間島は自然の恵みを受け人々は平和にくらしていた。しかし、ある時油雨^{アバアーミ}が降りだし、人々はみな死に絶え、島に生類は存しなくなってしまった。ところが、ある兄と妹の二人は島の美底の洞窟に籠っていてその難を避けることができた。二人は結婚して子供を生むが、最初の子はボーズという毒魚に似た子で、次の子はムカデのような子であった。夫婦はみたされないまま、富嘉部落の保多盛家のある土地まで移動してきた。ここで初めてほんとうに人間らしい子が生まれたので、この地に居処を定め生活することとなった。こうして波照間島は再び人々でにぎわうようになったのである」。この神話からみると、保多盛家の大祖が波照間島の人間の始源であって、保多盛家が現在に到るまで波照間人の信仰的世界の中核に位置してきているのはそれに因んだことであった。富嘉村の神職が自村の祭祀のみならず、他村の祭祀にも関与するのも上記のような伝承をうけてのことである。

阿底御嶽のピテーヌワー^{マートゥリ}は同御嶽と丁度南面する位置にある真徳利御嶽であるが、それ以前にはカルツヤマ、スクナーバリ、ミゾーツなどに拝所を設けたが、いずれも「成功しなかったので最後に真徳利御嶽（マートウルワー）を阿底御嶽から真正面」に建てたら成功にいたったのだという（宮良高弘『波照間島民俗誌』87頁）。

130. ふきむら（保慶村）

竹富町黒島にあった集落。島の西南西部、宮里村の西方に位置していた。黒島の豊年祭は東方、西方の2組に分れて船漕ぎをするが（往古は綱引きであったという）、保慶村は、保里村、宮里村とともに西方を構成していた（東方は仲本、東筋、伊古の3村）。これからすると、ある時期までは島の西部の

村として活力ある生活があったとみられる。「ひゃんかんふし」(『南島歌謡大成IV』節歌37)に、宮里、仲本、東筋、伊久、保里と歌ってきて、最後に「11. 保慶村宮童、村々の 後の つんなみ ほすや 12. またも ひきりいた 西ひざの ほくるべ つけい」(保慶村の乙女は村の後ろの蝸牛を拾い、青年達は西の浜辺のフクルベ魚を突いている)と歌っている。「黒島節」(『同上書』節歌64)は在番・蔵元からの巡検官が黒島の各村を廻るのを歌っているが、ここでも保慶村は最後尾となっている。この両歌における保慶村の位置の合一は単なる偶然であろうか。遠見台であるフヅマリが海岸部に築かれ、それに隣接した位置に番所が置かれていた。番所跡には近代に入って学校が設置されたが、現在はない。

パナリ焼きの製造とそれによる交易をうたった「ばなりちいちいやーみゆんた」(『同上書』ユンタ218)には、「14. ^{あら}新^{ふなちい}ばなぬ 船着き／まはじみぬ 旅下り 15. ふき泊の 船着き／前泊ぬ ^{たびう}旅下り」(最初の船着け、真初めの上陸は、保慶村の泊に船着け、前泊に上陸)とあって、パナリ焼きの土器を積んだ新城船が保慶村を足がかりに、黒島で交易していたことを謡っている。

131. ふさぎい (富崎)

石垣市字新川の小字の一つ。新川の西端に富崎(岬名)はあるが、その一帯が「ふさぎいぬー」(富崎野)である。富崎の名は、この岬が古来より石垣港に出入りする船舶の航行上重要な地点であったことの証しであろう。石垣港に出入りする北方(宮古・沖縄島方面)航路の船は、一般には富崎を廻ることによって姿を見せもし、隠しもする。「ふさぎい」の「ふ」は『おもろさうし』に出てくる、「神のまします岬の尊称」である「ふうまわり」の「ふう」と同一の根から出た語と推察される。海上航行の平安を祈る観音堂がこの地に移転造営された(1742年)のもこのことにちなむものとみられる。

「富崎野ぬ牛なまゆんた」(『南島歌謡大成IV』ユンタ19)は、「朝早く起きて、富崎野に繋いである子牛を世話に行き、富崎の岡の上から見下ろすと、姿形の良い牛がいる。これは我が愛する人の牛だ」と謡って、続けて「富崎野の西の海を見ると船がやってくる。ああこれこそ我が愛する人の乗る船だ。私の方に笑いかけるように向かって進んでくる」と謡う。この歌の背景には、

富崎と航海・航海守護の関係が一つの前提としてあったとみられる。歌謡語として富崎野^{ふさきいぬ}は「くさぎ野・富崎野・ふしゃぎ野」等と表記されている。

なお、富崎の地には竹富島からの寄人 550 人によって富崎村が明和大津波（1771 年）後に開かれた（『大波之時各村之形行書』44 頁）が、マラリアその他で衰微したため、石垣島東部に移されて、そこに盛山村を建てた（『八重山島年来記』91・92 頁）。しかし、この村もマラリアなどのため近代に入った 1917 年廃村となった。

132. ふさぎんどう（富崎渡）

石垣市字新川の西端にある富崎(岬名)の沖合いの海上の名。石垣港に出入りする北方（宮古・沖縄島方面）航路の船舶は勿論のこと、小浜島、西表島、与那国島方面航路の船舶も航行する海上である。「小浜節」（『南島歌謡大成 IV』節歌 21）に「5. 小浜てる 島や／いけみほしやゝ あすが／舟の 道やりは／いきん ならぬ 6. 富崎との、なぬらは／真武佐渡の、なぬらは／けふや いけ 遊て／あちやゝ きゆすか」〈小浜という島は行ってみたいのではあるが、舟で行かねばならない道であるから行くのも叶わない。もしも、富崎渡がなければ、真武佐渡がなければ、今日は小浜に行って遊び、明日には石垣に戻って来るのだが〉と歌われている。対語の「真武佐渡」は竹富島西方の海の称（山城浩『小濱島誌』4 頁参照）。

明和の大津波後、宮良村の再建のために小浜島から移された人々は、毎年の豊年祭に参加するため小浜島に向かって富崎渡を泳ぎ渡ったという。しかし、途中で溺れ死ぬ者が後を絶たなかったので宮良の地にアカマタ・クロマタの神を迎え、祭祀を行うことが許されるようになった。

富崎渡の海域については未詳であるが、石垣市字石垣に伝承される「雨ちぢ」（『南島歌謡大成 IV』雨乞いの歌①アマチジィ 1）の末尾に「前ぬ 渡ん 赤ましようり／富崎渡ん 赤ましようり」〈(村の) 前の海 (の色) も (大雨でおし流された赤土の色で) 赤くして下さい。富崎渡も赤くして下さい〉とあることから、その東端は石垣村の前方海上あたりまで延びていたかと推測される。富崎渡は歌謡語として「富崎と・富崎渡・大石垣渡^{ふしゃぎんどう}」等と表記されている。

133. ふしいま（黒島）

竹富町黒島。仲本、宮里、保里、伊古、東筋の五つの集落より成っている。黒島を歌った有名な民謡「黒島口説」（『南島歌謡大成Ⅳ』口説 14）は次のように歌い出している。「1. さてむ ^{ゆたか} 豊の ^ぬ 黒島や／島の ^ぬ ながりゆ ^み 見渡し ^{わた} ば／島の ^ぬ ながりや ^{はないはた} 鼎形／いやいや ^{ゆたか} 豊なる ^ゆ 世の ^ぬ 印さみへ／雨や ^{あみ} 十 ^{とう} 日越し／風や ^か 静に／作りむじくい ^{まんさく} 満作 ^な そうてど／仲本 ^な 東筋 ^{ありし} 伊古 ^い 保里村 ^ふ 保慶や ^き 宮里／番所 ^{みやざと} 宿々／花の ^{ばん} 遊や ^す 歌や ^{やどやど} 三味線／でんぐる ^{はな} でんぐる ^{あしび} 面白むんさみ／今の ^{うた} はやしに ^{さみしん} 口説 ^{うむしり} 読々 ^{なま} さっさ」。

黒島の村落については、「古老達の伝承によると最初に誕生した村をアーザト村と」称し、それが「ヤマサキ村、ハイフタ村の2村に分村しその後、ンギスト村、ナハシト村、アンナン村、イリバラ村の7村が創立されるようになった」。これらの村は海岸に近かったため津波の被害をうけ、後、現在の仲本村の地に結集して仲本村をたてることになった。これら7村の他にサキバル村、アロスク村、サーバル村、フナト村、ナンザト村があって、これらを総称して東筋村と称するようになった（知念政範『黒島史』1頁）。これが仲本村、東筋村の前史である。前記「黒島口説」にうたわれていた保慶村は、現在廃村となっている。

この島は人口の大きな島だったとみえ、首里王府の新村建設のための寄人の供給地として島分けの悲哀を幾度も経験させられた。例えば、伊原間村、野底村、鳩間村の創建がそれである。伊原間村の創建にまつわる寄人をうたった歌が「船越ゆんた」（『南島歌謡大成Ⅳ』ユンタ 212）で、「黒島にいた我々を伊原間・船越の地に島分けしたのは、宮里村では稲福氏と平得氏。仲本村では生盛氏と向原氏。東筋は崎原氏と前仲氏。保里村は石盛氏と金城氏だ。こいつらが我等を島分けしたのだ。今回は我々が島分けされたが、その次にはこいつらを島分けしてやろう」と悲しみと怒りをたたきつけている。

野底村への島分けについては「つんたら節」（『同上書』節歌 68）、「久場山越地節」（『同上書』節歌 69）が歌っている。「つんたら節」は、島のある限り一緒にいようと誓った男女が王府の命によって、野底と黒島に引き離されてしまう悲劇を切々と訴えた歌謡である。「久場山越地節」も前半部は同趣である。このような悲劇の堆積は野底に分けられたマーペー女が、黒島に残さ

れた恋人を見ようと野底岳に登るが南方の高山オモト岳にさえぎられて果たさず、悲しみのあまり石化して、野底岳は今のような山容になったという「野底マーペー伝説」をも生んでいる。

鳩間島への寄人については「鳩間元じらば」(『同上書』ジラバ70)に「12. 黒島の うちから 13. 男衆 六人 乞いとり 14. 女衆 八人 乞いとり」(黒島の中から男衆100人を乞い取り、女衆80人を乞い取って)と謡われている。

黒島は八重山における造船発祥の地と伝承されているが(『八重山島由来記』『琉球国由来記』)、「黒島最初の造船所はハイフタ村のマキ泊で」「その後宮里村の船浦に造船所を移転し以て造船業を盛んに茲に船浦御嶽を創建したのである」(前掲『黒島史』53頁)という。竹富島に伝えられる「島仲船神願しまなふながんにがい口ふち〈神口〉」(『同上書』ニガイフチィ91)に「7. 船神ふながん 降りみそーるうー 大やんしゅ 主やんたきどうん 8. 竹富なかだき 仲嵩くるしま 黒島さきしま 先島うふいしゃぎ 大石垣や 八重山い 浦とうらうー 降りみそーるうー 大やんしゅ 主やん」(船神がお降りになる大親、主親。竹富・仲嵩、黒島・サフ島、大石垣・八重山の浦渡にお降りになる、大親、主親)とあるのは、黒島と造船との歴史的関係を反映したものであろう。

フシィマ(黒島)の語源については、サフ島(石島)からの転訛説(喜舎場永珣)もあるが、宮良当壮が説くように、クロシマからの転訛であろう。

134. ふなうき (船浮)

竹富町字船浮。方音でフナウキ。西表島の西南部、船浮湾の東岸部に立地している。船浮湾口はクイラ川の河口にあたり、内陸部に大きく切れ込む形となっている。また、内離島があたかもヒンプン(前垣)のように浮かんでおり、船船の停泊には適しており、戦前期には軍港、現在は台風時などの国際避難港として利用されている。集落の成立年は未詳。古くより寒村だったらしいが、沖縄の日本復帰前後の過疎化の波にみまわれつつもなお集落は存続している。

「とのさま節」(『南島歌謡大成IV』節歌60)は「1. 浮世に 名 とたる恋の氏神／祖納の とのさま はんと やゆる／かまとまの 事ば 思ひと／舟浮に 越いる」(浮世に名の知れた、恋の氏神・祖納の殿様は私である。カ

マドマ女の事を思って、船浮に越え渡る」と始まる。この歌には、祖納、船浮の他、「前崎さけ」「高間」「紙屋」等の地名がよみこまれ、西表西部の通交圏の中に船浮も含まれるものであったことがうかがえる。それは「まるまふんさん節」（『同上書』節歌 45）に「阿立 大立 おかりに 下原 真山 浮道、成屋 舟浮」と上げられていることから言えよう。「石の屏風ふし」（『同上書』節歌 10）は、「1. 石の屏風 立て／七重八重うちに／いつよまで 舟浮／みるくよかほ／ 2. 舟浮久葉でさや／枝持の 清らさ／ふなき宮童や／身持清らさ」〈石の屏風を立てて、七重八重の内に、何時の世までも船浮村は弥勒の世界報＝豊年である。船浮村のクバデিশは枝ぶりが美しい。船浮村の乙女は身持ちが美しい〉と船浮村の千秋万歳を寿ぎ、讃美している。

135. ふなくや（船越）

石垣島の北東部、平久保半島の付け根にある。方音でフナクヤー。石垣島の中で陸地間距離の最も短い地点で、その地峡部の幅は約 260 m である。現在は伊原間に属するが、古くは「舟越村」として独立していた。伊原間村に吸収合併されたのは明和の大津波（1771 年）のため壊滅的な打撃を受け、伊原間・船越の両村の生存者に黒島からの寄人を加えて伊原間の新村が発足したのによる。

強制移住という悲劇にみまわれた黒島の人々は「船越ゆんた」（『南島歌謡大成Ⅳ』ユンタ 212）で、その新村建てを大意次のように謡ってきた。「伊原間・船越の村を建てるために我々を島分けしたのは、宮里村では稲福・平得の兩人だ。仲本村では生盛・向原の兩人で、東筋では崎原・前仲の兩人。保里村では石盛・金城の兩人だ。こいつらが我々を異郷の地に追いやったのだ。今回は我々が分けられたが、この次にはそいつらを島分けにしてやろう。それを許した役人衆は頭職にも目差職にも昇進してくれるな。そう思って泣く泣く伊原間・船越に渡ってきたのだ。しかし、暮らしてみたらこの伊原間・船越の方が住みよいよ。粟や黍を作っては実らせているよ」。ここには、あまりにも強大な権力によってふりまわされる人間の怒りがある。しかし、強権の前に、なす術もなく忍従するしかない人間の哀れさの方がむしろ大きい。「伊原間・船越の方が住みよいよ」と自らを励ました人々によって開き、守

られてきた伊原間・船越であるが、現在は過疎という波に揺さぶられている。

136. ふのーら（船浦）

西表島北部にある集落。方音でフノーラという。鳩間島とほぼ相対する位置で、湾口が北方に大きく開き、大型船舶の停泊する港がある。上原、船浦のある半島は、山がちの西表島にあって、広い平野部分となっている。鳩間島民の西表島における耕作地は最初この付近に開かれたらしいが、後にはこの新開の田地から手を引かなければならなくなった。それは、鳩間人と上原・船浦の人々との土地をめぐる確執に原因があったようだ。

船浦は「明和5年（1768）当時上原村で起こった、士族と平民の差別的対立事件に端を発して、上原村の平民12戸が移り住んで 舟浦村を創立したと伝えられている。然し村は建てたが土地問題で意見があわず、上部落、下部落にわかれて住むということになった」（牧野清『新八重山歴史』158頁）という。古い船浦村は、土地問題という難問を背負って出発したわけである。船浦人と鳩間人との土地をめぐる確執を新しい耕地の開墾によって打開した鳩間人は、その新地を「いんた・福浜・下離は舟浦の地よりも良い土地である」と歌っている（「鳩間節」『南島歌謡大成IV』節歌28）。現在の船浦は、戦後、鳩間島その他からの移民によって新たに興された集落である。付近には4～7世紀頃の生活跡とされる船浦貝塚がある。

なお、「船浦」の地名は首里王府によってこの地にスラ所（造船所）が開設された（1748年。『八重山島年来記』70頁）ことに因むものである。

137. ふりむら（保里村）

竹富町黒島の集落。島の北部の、石垣島に面する位置にある。このため、石垣及び他島からの連絡船の出入りする港はここに開かれている。1651年、「ふうり村」の人口282人（『八重山島年来記』30頁）。1737年、「保里村」の人口315人（『参遣状抜書』下巻9頁）とみえる。フウリ村は古くはミントハネマ按司の勢力下にあったが「赤蜂の乱後、1524年蔵元が創設され、1568年八重山御掟を設け保里村と改称したもの」という（知念政範『黒島史』2頁）。「あながまばーし」（『南島歌謡大成IV』ジラバ99）に「2. 保里村^{ふりむら}」

ぬ ん なか にしむらぬ うち
 の 真中に 北村の 内なか」〈保里村の真中に、北村の内に〉と、保里のこ
 とを北村と称しているのは、この村の位置に因んだものである。「ひゃんか
 んふし」(『同上書』節歌 37) の「9. 保里村みやらひ／西ひざの 玉みな
 ふそいゑ」〈保里村の乙女は、島の北の干瀬の玉蜷を拾いに〉という詞句もや
 はり、島における村の位置関係(保里―北の干瀬)を反映したものであろう。

138. へいしん (平真)

石垣市字平得と字真栄里の称。両字の頭文字の「平」と「真」をとって両
 字の総称としたものである。平真の名は小学校の名などに冠されて用いられ
 ている。「たねどりのねがいごと〈その二〉」(『南島歌謡大成IV』二ガイフチィ
 43) に「がっこうぬ しいと、しんし おんがく しおうり ぴいさいむら
 ぬ へいしんぬ しいとうから がっこうしんし ぜんかく おんがく し
 おうり」〈学校の生徒・先生が音楽をなさって、平得村の、平真の生徒から、
 学校の先生全員が音楽をなさって〉とある。ここでは平真の名は、平得村の
 対語の形になって語られているが、平得村のみを指すものではない。平真小
 学校は平得にある。平真地区は人口の都市部集中のため、近年は市街地化し
 ており、登野城の住宅地と接する勢いである。

139. ペーばぐぬ (平久保野)

石垣市字平久保の原野名。平久保村は石垣島の北端部、平久保半島にある。
 方音でペーブグ、ペーバグという。現在の集落は、安良岳の西麓にあるが古
 くは現平野集落のある、半島最北端の地にあった。現在地に移ったのは、
 1724 年に花城村と合併した折りである(牧野清『新八重山歴史』157 頁)。
 古くから北部石垣の一つの中心をなしていたらしく、この地に割拠し専横に
 振る舞い四囲の人民に恐れられた平久保加那按司が、慶来慶田城げらいけ だぐすくようちよ用緒に討
 たれたのは 1483 年のことと伝えられる(『慶来慶田城由来記』2・3 頁。牧
 野清『新八重山歴史』157 頁)。

平久保は川平・桴海・野底・伊原間と続く一つの生活圈を構成していたら
 しく、川平、桴海の伝承に度々登場する。現在も川平・伊原間で行われてい
 るマユンガナシィ(豊饒神)の神事は、この村でも戦前までは行われていた

という。「マユンガナシ文化圏」の北端の地であったわけである。川平村の節祭に出現するマユンガナシの神口（「内原村の真世がなしいの神詞」『南島歌謡大成Ⅳ』カンフチィ 2）に次のようにある。神の国から来訪するマユンガナシは最初「ペーばぐぬ、じゅうわ、たにじいに、たまざら、たばりーぬ ういに ふうゆう、ぴすゆうーば、ふちいぽーりい まきいぽーり、しーおーる」〈平久保野、ジューワ、タニゾネ、玉ザラの田圃の上に大世・広世を打ち放り、蒔き放りして来られる〉という。神が第一歩をしるす土地であったのである。桴海村の前泊御嶽の前方の前泊は、平久保方面の田から収穫した稲束を積んだ川平の村人の舟の出入りする湊であったという（新本ニルムイ「桴海のマユンガナシ」『八重山文化』4号 97 頁）。また、桴海のマユンガナシの神口にも「ペーバグサキカラ／フカイウフパリマディ／マイダフー」〈平久保崎から桴海大田までマイダフー〉（新本ニルムイ「^{フカイ}桴海のマユンガナシ」『八重山文化』4号 97 頁）とあって、桴海の人々の領域意識の一角にのぼっていたのが明らかである。このように平久保の野は古くは、川平・桴海の人々の生活圏に組みこまれていたようである。

平久保には古くから牧場〈方音・マキィ〉があつて、平久保加那按司は近隣の住民を使役して、牛馬 3、400 頭を放牧していたという。平久保牧場は現在も八重山の三大牧場の一つに数えられる優良牧場である。

なお、石垣あたりでは後生（死）へ赴くことを「ペーバグカイ ハルン」（平久保へ行く）と言うが、これは平久保が石垣四ヶ村から遠く離れた“別世界”であったことを示している。

140. ほーまむら（大浜村）

石垣市字大浜。旧大浜間切の中心地であった。明和の大津波によって潰滅的打撃を受けたが、波照間島からの寄人と、南大浜村、黒石村、フルスト村などの付近の小村の集合・合併で新村が再建された。

大浜村は集落の中央を通る中道を境に西側を^{ウイ}上ぬ村、東側を^{シム}下ぬ村と呼び分けている。イタシィキバラ〈祭祀名〉に唱えられる「獅子への願詞」（『南島歌謡大成Ⅳ』ニガイフチィ 54）に「大浜村、^{くる し むら}黒石村ぬ ^{びとうにんざん}上なが、人間ぬ ^{うふぎむ}大肝 ^{くーぎむ}小肝 ^たぴきとーり給ぼーり」〈大浜村、黒石村の上に、人間どもの

祈願をひきうけて下さい」と、「大浜村」の対語に「黒石村」が出ている。また、「雨乞い歌」(『同上書』雨乞いの歌③アマグイ4)に「9. 大浜村上 10. 黒石村上」とあり、「東節」(『同上書』ユンタ109)にも「大浜村上^{うはまむらうい}なが」「黒石村上^{くろしむらうい}なが」とある。大浜村の対語に、大浜に吸収された3小村のうちの黒石村だけが出てくるのも理由のあることだろうが今は不明である。「あかんに田ゆんた」(『同上書』ユンタ90)に「10. 大浜^{ほーま}むら ういぬむら」と出ているが、ここの「ういぬむら」は大浜村の上の村のことであって、大浜村全体をさすのではなかろう。「大浜がじまる節」(『同上書』節歌補遺34)は「1. 大浜^{うはま}がじまるや／枝^{ゆだ}持^むちぬ 美^{ちゆ}らさ／大浜女^{みやらび}乙^{みまゆ}や／目^{ちゆ}眉^めぬ 美^{ちゆ}らさ」〈大浜村のガジュマルの枝ぶりの美しさよ。それに劣らず大浜村の娘たちの目眉の美しいことよ〉と村の娘を讃えている。

141. ほーらやま (大浦山)

石垣島北東部にある山の名。標高 192 m。伊原間半島の基部、西海岸が大きく湾入したところにあって、金武^{きんぶ}岳と相対するように立っている。「ほーら」〈大浦〉の名は、この、大きな湾入＝伊原間湾に因んで、ウフウラと称したことによるとみられる。北にある小湾入は小浦^{クーラ}で、そこに久宇良^{クウラ}の集落がある。山麓の高台から伊原間方面をのぞむ景色は大浦の名にし負うものがある。「内原村の真世がなしいの神詞」(『南島歌謡大成IV』カンフチィ2)に「3. うーと一ど、かーら、くーら、ほーら、ぷくいんだ、ぷくいましい、たばりぬ、ういに ふうゆう、ぴすゆーば、ふちいぽーり、まきいぽーり しーおーる、まゆんがなしい」〈ああ尊、カーラ、久宇良、大浦、プクインダ、プクイ枳の田圃の上に、大世、広世をうち放り、蒔き放りしなさる真世加那志〉とある。これは、神の国から来訪するユンガナシィが平久保に上陸してカーラ・久宇良・大浦と南下し、第4連以下で野底・伊土名・石崎と更に南下をつづけ、川平村に真世を授けることを語る神口の1節である。

142. まーぢい (真地)

石垣市字大川・石垣村後方にひろがる田畑地。長間の南方に位置し、四ヶ村の集落に近接していることから古くから貴重な耕作地であった。地味は長

間より劣るとされている。大川村に伝承されるユングトゥ「^{びぎりや ぶなりや}兄と妹」(『南島歌謡大成IV』ユングトゥ 14)に「^{な-ま}長間出でえ いしゃぬめ一本 ^{むと いら び}選び引き
 /^{ま-じ}真地 ^{べー}這入り ^{な-ふきい}とうの一菜茎 ^{いら つ}選び摘み/時 ^{や- む}入らな一 ^{べー}家 持ち這入り
 /^{びま}暇 ^{や- む}くまな一 ^{す-ない}家 持ち来い/^あ蔬壠ば ^{ぶなりや}壠やあ/妹と ^{びぎりや}二人/兄と 二
 人/旨々と ^{かばかば}んきょうり/香々と ^{かばかば}んきょうったゆう」(長間に出てイシャヌ
 メーの根を選んで引いて、真地に行ってトゥノー菜の茎を選んで摘み、時を
 かけずに家に持って入り、暇をかけずに家に持って来て、和物につくって、
 妹と二人、兄と二人で、美味しい美味しいと、芳しい芳しいといただきましたよ)とある。おかずに作る和え物の材料の野の菜を摘みに走れる近さだった
 のである。マーヂィの名は、真なる土地の意で、マーは、まことの、立派
 ななどの意をあらわす接頭美称辞である。村人がこの地にかけた期待の大き
 さが知られる名称である。

143. まいだき (前嵩)

石垣市字川平にある山。石垣島一周道路から川平集落に入る道路の左手に
 あって、標高 263m である。マンヤマとも呼ばれる。川平の「^{かんふちい}久場川村の
 まーゆんがなしいの神詞」(『南島歌謡大成IV』カンフチィ 1)の「いぬちい
 がふ〈命果報〉」の項に「うーとおーどう、くぬ とぬち、ふうしゆーまい、
 ぐすたれーまいぬ、いぬちんがぶ、ふーですーや、しいたきとん、まいたき
 とん、くさでし」(ああ尊、この殿内の大主様、グスタレー様の命果報と言う
 のは、^{しいたけ}後嵩を、^{クサティ}前嵩を腰当てにして)とあって、前嵩が、川平の村の腰当て
 の山と考えられていることが分かる。このカンフチィでは、前嵩の対語に
^{しいたけ}後嵩の名があがっているが、川平の下村(内原村)のマユンガナシィのカ
 ンフチィでは「ふうだぎいとん、まいだぎいとん、くさでいーし」(大嵩とも、
 前嵩とも^{クサティ}腰当てにして)とある。後嵩の位置は不明であるが、大嵩は川平湾
 をはさんで前嵩と対峙する位置にある。前嵩山頂には、裏石垣地区のテレビ
 の難視聴地域解消のために NHK の無人放送局が昭和 42 年に設置された。

144. まいどうまり (前泊)

西表島祖納の海岸。小さな港になっていて、サバ二等の小型船舶が停泊す

るほどの泊である。「前泊」の名は、祖納集落の前方にある泊ということに由来するのであろう。内離島・外離島方面への往来に利用する泊である。

この泊のある海岸の傍に前泊御嶽がある。この御嶽は一名「穀御嶽」とも呼ばれる。その由来は「或日、北に見える黒船の大影に渡らんとする時、突風の難に逢いパナリ^{ミージュ}海溝に流出した時、ブルッセブスと申す勇者に救いを求め前泊の海岸に上陸した。此処に安住を乞われ、後穀の神と祀られたといわれる」（星勲『西表島の民俗』88頁）。また、この泊は、慶来慶田城用諸の娘が漂着異人とともに船出したという伝説—シチ（節祭）の由來說話—も伝えている。

「ぱなりみじゅゆんぐどう」（『南島歌謡大成Ⅳ』ユングトゥ 39）は、次のように、内・外離島の畠へ出かける舟の浮かぶ前泊の朝を描いている。

「1. しいとうむでいに うきいてい／あさぱなに すりていよ 2. ふたでいるまば とურიむちい／ばが ぴるまば ぴっち ぬき 3. 前泊に^{まいとまり}ぱりうり／船元^{ふなむとう}にぱりいき 4. うとどけや 舟とうり／うぶなまや おりぬり」〈朝まだきに起きて、早朝に目覚めて、蓋付き箆を肱に貫いて、自分の小箆を肱に提げて、前泊に走り下り、船元に走り行き、弟達は舟を浮かべ、兄達はやってきて舟に乗って〉。「前泊」の対語に使われている「船元」は船の出入りする港の意。祖納のシチ（節祭）はこの前泊の浜で行われ、奉納芸能の演じられる場所を特にフナムトゥヌウザ（船元の御座）と呼んでいる。

なお、前泊の前方には「まるまふんさんふし」（『同上書』節歌 45）で有名な小島・マルマボンサンが浮かんでいる。

145. まじいしく（真地底）

石垣市字川平の小字名。川平の集落の北方に位置している。方音ではマーチと呼ばれている。「真地」の名をもつ土地は方々にみられるが、これは、この土地こそはまことの地であるという意で、「真^マ」という接頭美称辞を冠してそれらの土地を呼称したことによるのであろう。川平村の豊年祭^{ブーリィ}の時に謡われる「東かーら^{あがる}」（『南島歌謡大成Ⅳ』ユンタ 2）に「1. 東から^{あがる} 来る 船や ばが 世ぬ たうんきゃら 2. いかしゃから 来る 船や 3. なゆしゃから 来る 船や 4. 片くびや 粟じらどう ぬしゃおーる 5. 片くびや

米じらどう ちみゃおーる 6. 粟でいすや まじいしくに ちかいしより 7. 米ですや 田原しくに うはらし」〈東から来る船は我が豊饒の船。如何して来る船だ。何をして来る船だ。片壁は粟叢を乗せてこられる。片壁は米叢を積んでこられる。粟というのは真地底にお寄せして、米というのは田原底にお招きして（蒔いて）〉と謡っている。石崎に至る北方海岸に面しているため、稲作には適していなかったのであろうか。粟作の地としてうたわれている。同内容の「たらまゆら」（『南島歌謡大成Ⅳ』アヨー 1）、「節ジラバ」（『同上書』ジラバ 3）、「たらまゆらじらば」（『同上書』ジラバ 5）は節祭^{シチィ}にうたわれるものである。これらには「真地地区」「まーちい底」「まじしく」と表記されている。

146. まじどうむら（真栄里村）

石垣市字真栄里。平得村の南に位置するが、両集落の境界は東西に走る、ナカドーミチィ（仲道道。登野城から真栄里に至る道）と三番アコー木の所で二股に分かれて東方に向かう道の下 2 本目の小路で、道の北側（上方）は平得、南側（下方）が真栄里である。方音では一般にマイザトゥ、マジヤドゥという。マジドゥは歌謡語に見られる語形。歌謡ではシムヌムラ（下の村）とも異称される。

真栄里村は最初平得村の北方に位置する地城御嶽の南（カジャウチバル＝嘉謝内原）に立地していた。ペーギナー川の南方にあった平得村が真栄里村の隣地に移転してきて新城村を名乗り、両村は兄弟村として並立することとなったようである。その後両村は南方の上原に移転し、さらに再転して「平得村」を名乗るようになったという。1765 年、平得村は人口が 2600 人を数える大村となったため、同村からの独立が認可され新しい真栄里村が創設されることになった（『八重山島年来記』80 頁。八重山歴史編集委員会『八重山歴史』253 頁では 1757 年のこととする）。しかし、1771 年の明和の大津波で、1173 人の村民のうち 908 人が溺死し、村は跡形もなく引き流され石原となった。残存の人数では村の再建は出来ないため、西表村（これは「黒島」の誤りと見られる。八重山歴史編集委員会『八重山歴史』178 頁、牧野清『新八重山歴史』155 頁には「黒島から」とある。）より男女 313 人

を寄百姓し、残った人数と合わせて558人でカジヤウチバル＝嘉謝内原に村を建てた（『大波之時各村之形行書』23・24頁）。その後同地より現在の村敷へ移転し、現在に至っている。

このような歴史的背景を持つため、真栄里の方言は、道一本を隔てた関係にある平得村の方言とは全く異なり、黒島方言の要素を強く保持したものとなっている。「道一つ違えば言葉が異なる」という沖縄の古い時代の言語状況を見事にあらわした例である。

「真栄里節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌補遺7）に「1. だんじゅ 豊まれる／真栄里原や／中村ゆ くさでい／作場 前 なし 2. 縦横ぬ 道ぬ／直ぐさ ある如とぅに／心持ち 美らさ／情ばかり（後略）」〈誠に名高い真栄里村は、中村を腰当てにして耕作場を前にしている。村を走る道が縦横に真っ直ぐにあるように、村人の心は正直で美しく、情け深いものだ〉と讃えられている。本歌に歌われた「中村とは、平得部落の一部で、真栄里部落と平得部落の中間にあるところ」からの名称で、「旧平得馬場の南方にある部分」という（喜舎場永珣『八重山民謡誌』136頁）。

真栄里村は当初自村の御嶽として地城御嶽を祭祀・管轄していた。しかし、明和の大津波の後真栄里村を再建した黒島からの寄人らが、糸数御嶽を創建した舟道石戸が黒島の人であったことから、平得村の糸数御嶽と真栄里村の地城御嶽の祭祀・管轄の交換を蔵元に申し出て、これが認められて現在に至っているという（前掲『八重山歴史』178頁）。「ぴいさいむら（平得村）」の項参照。

147. まじゃ（真謝）

石垣市字白保を構成する小字。かつて白保村は白保と真謝の小村で構成されていたが、「人口が次第に増加したので、寛永3年（1750）道路を境界として、北の方を真謝村とした」（牧野清『新八重山歴史』156頁）。しかし、1771年の明和の大津波によって白保、真謝の両村とも潰滅的打撃を受けた。その後、波照間島からの418人の寄人で白保村が再建されるに及んで、真謝村は廃村となった（牧野清『同上書』156頁）。「白保節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌27）に「1. 白保村 上なかい みろくよは 給ふられ（中略） 5. 五日

まり 御祝ひ 七日まり 御祝ひ（中略） 7. 真謝の主は つかいし 目差
 おやは つかいし」〈白保村の上に弥勒世《豊饒の世》をくださり（中略）五
 日廻りの御祝いをする。七日廻りの御祝いをする。真謝村の御役人様をお招
 きし、目差役人様をお招きし〉とある。ここで重要なことは、白保村の祭祀
 に招待される役人が白保村の役人と呼ばれるのではなく「真謝の主」と、真
 謝村の名がでてくることである。真謝が白保の名にとってかわっているもの
 とみられ、白保村における真謝村の占める位置の大きさがうかがえる。ちな
 みに歴史文書には「白保与人」「白保目差」、「真謝与人」「真謝目差」がみえ
 ている。

『琉球国由来記』に「真和謝御嶽 神名 中原神本 宮良村／御イベ名 ミ
 ヤライシ」と記録されている。

148. まじゃんがー（真謝ん井戸）

石垣市字白保にある井戸。所在が白保村の小字の真謝にあるので「真謝の
 井戸」即ち「まじゃんがー」と呼ばれる。下り井戸形式の古い井戸である。「し
 やんとうそれ節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌 84）に「1. 白保てる 島や／果
 報の しま やれは／真謝ん井ば こしやて／おやき 前なち」〈白保という
 村は果報の島だから、真謝井戸を腰当てにし、富貴を前にしている〉とある。
 これは、この井戸が白保村の人々の生活にとって重要不可欠な役割をはたし
 てきたことの証である。「この井戸はさいしょ、白保の亀川家の姥が発見し
 て飲料水の井戸にしてあったが、明和8年(1771)の天津波で埋められた。こ
 れを『馬真謝』という首里人が白保村に流罪になってきて、再掘させたとい
 われる」（喜舎場永珣『八重山民謡誌』171 頁）。喜舎場永珣他の『八重山歴
 史』の「シンダスリ節」は、上記の歌詞につづけて「2. 真謝井戸ニ 下り
 ティ／水 汲ムル 女／髪 黒々トゥ／目眉 美ラサ」〈真謝井戸に下りて水
 を汲む女は、髪は黒々と、目眉の美しいことよ〉と歌う。この歌詞から、沖
 縄芝居の喜歌劇『馬山川』が生まれた。

149. まやま（真山）

竹富町西表島の祖納を構成していた小集落。祖納の前方海上に浮かぶ「マ

ルマ盆山」をうたった「まるまふんさふし」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌 45）の第 3 節に「阿立 大立 おかりに 下原 真山 浮道、成屋 舟浮」と列挙される地名の一つである。このうち、成屋と船浮のみが祖納に含まれず、他は祖納内の地名である。真山山には猪害から田畑を守るために猪垣が築かれており「真山山瀬垣」と呼ばれていた。この猪垣は「数回にわたって積まれ、1 回目は石ン屋後崖を通りシドネ崖に向けた。2 回目は西表村と慶田城村堺のニシドゥン（北泊）中岸路から前泊御嶽後のガンパラ崎へ。3 回目は東田原の東側畦崖を辿りサーチ崎に。4 回目は祖納岳上に移し蔵元工事として蔵元役夫を使い本格的な石積垣とした。村々の協力を得て与那田石橋を中心に東方カナザ山を囲み多柄地区へまわし、西方は東祖納区と仲良大字区の堺とし阿良浜に至る長い垣工事は明和 7 年（1770）尚穆王時代に完成した」（星勲『西表島の民俗』66 頁）。「まんかふし」（『同上書』節歌 61）は「1. 真山村 かなほさ／出水の まひけれ／妻や にいの かなぼさ／まんかや にひの まひぎりや」〈真山村の加那叔父、出水家の兄さん、妻はいない加那叔父、女房のいない兄さん〉と始まる。真山村の男女の生活を歌った歌である。

150. まるまぼんさん

西表島祖納の前泊海岸の前方にある小島。「マルマ盆山」と書かれることもあるように、盆の上に供えられた小山然、穏やかな内海に内離島・外離島を背景に浮かんでいる。古邑祖納を象徴する風景である。「まるまふんさふし」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌 45）はこの小島をめぐる四囲の風景を歌いこんだ軽快な曲である。「1. まるまぼんさん／よなへ 見れは／風の根を 知ち／居ちゆる 白さや／2. 祖納津口の 見木の 上に／魚よ ましよんで／居ちゆる あたくや（中略） 4. 離れみじう 漕／舟々 見れは／声よ 並らひて／艫の 歌音」〈マルマ盆山を夜な夜な見ると、風の根を知って坐っている白鷺がいる。祖納津口の標木の上に魚を狙って坐っている海鷗がみえるよ。外離島の水濺を漕ぐ舟々を見ると、声を合せてうたう舟歌がきこえてくるよ〉。喜舎場永珣によると「海岸から約 200 余メートルにあって、島の周囲は目測でおよそ 200 余メートルの岩山でありアコウ、ガジマル等が気根を

下ろして岩山を抱き、アダン葉、黒ツグその他雑木が繁茂している。岩山の高さは目測で約 20 余メートル位」という（『八重山民謡誌』361 頁）。

151. みしゃぎばま（美崎浜）

石垣市字登野城の前方の海岸。ちょうど蔵元の前にあたり、波止場があった。波止場にはガーンキ〈雁木〉を設け、上陸の便としていたという（宮良当壮『八重山語彙』258 頁）。美崎の海が港湾として適していたのは、石垣島の南海岸をとりまくリーフがサクラ口と黒島口の両所で切れ、外海の潮が干満の都度に激しく東流・西流したことによる。この潮流によって美崎の海の底は V 字状に削り取られ、環礁内ながらも船舶の航行・停泊が可能な水深をもつことになったのである。このため、この浜は古くから港として使われるだけではなく、造船場（船蔵）も設けられた。この船蔵の歴史を継いで、近年まで二、三の造船所が事業を営んでいた。

「二月じらば」（『南島歌謡大成Ⅳ』ジラバ 110）は「二月になって島々村々から青年たちが選ばれて石垣島に呼びよせられた。石垣島では朝早くから手に手に槌や鑿をもって造船作業に勤めた。やがて船はでき、いよいよ進水の日がきて、男も女もうち揃って船の綱を引いて海におろしたのだ。美崎小堀に船を引きおろして、その浮く姿を眺めると、三日月・若月のように美しく反り、浮かんでいる。その姿は大和鍋・大阪鍋のようでもある」と謡っている。石垣島の主要な港湾・造船所としての美崎の浜の姿が活写されている歌である。また「みさぎまいじらば」（『同上書』ジラバ 55）には「1. みしゃぎまい ゆるぬ 外 うきやぶる 2. 明るかい 夜はるかい かけやぶる 3. なゆ すんで いか すんで うきやぶる 4. うい 待つんで 風 待つんで 待ちぶる」〈美崎の前に、砂洲の外に浮いている。東に・東方に船掛かりしている。何をすると、如何をすると浮いている。天気を待とうと、風を待とうと待っている〉とあって、順風を待つて停泊する船の姿が謡われている。「くんのーらぬぶなれーま」（『同上書』ユンタ 28）では、古見村の乙女が若夏の季節になって、自分の貢納布を小舟に積んで石垣島までやってくる、と謡う。そして「15. じまど じま 舟着き 16. みしゃぎの 前ど 舟着き 17. じまど じま 宿とり 18. うらぬ 前ど 宿とり 19. なら か

ない とりうるし 20. 十尋布ん だぎうるし 21. 大うらん むちペーリ」
 〈どこがどこが舟着き場だ。美崎の前が船着きた。どこがどこが宿所だ。蔵元の前が宿所だ。自分の貢布を積み下ろし、十尋布を抱き下ろして、大蔵元に持って入って〉とあり、蔵元に納める貢物を積んだ各地の船々が群れる美崎の浜が謡われている。

この海岸には、航海と関わりの深い美崎御嶽、船浦御嶽、真泊御嶽の3嶽が並んでいる。『琉球国由来記』には八重山の御嶽の2番目に「美崎御嶽 神名 大美崎トウハ 登野城村／御イベ名 浦掛ノ神ガナシ」として、オヤケアカハチの乱と八重山島大阿母の由来を語る説話が記されている。この御嶽は八重山における公儀御嶽^{クーギィオン}のうちの最高位に格付けされ、ホールザーマイ（八重山島大阿母）が祭祀を執り行った。航海の安全を祈願する「七嶽タカベ」の第一の御嶽でもある。大川村の人々が祀っている。

152. みやとうれ（宮鳥）

石垣市字石垣にある宮鳥御嶽^{ミヤトゥリイオン}のこと。往古より、石垣村の信仰上の中核として存してきた。『八重山嶋諸記帳』『琉球国由来記』等に伝えられる当御嶽の発祥伝説にも語られるように、石垣四ヶ村の発祥の地である。石垣村の腰当てになる位置にあって——もっとも現在は御嶽の後方にまで集落が拡大しているが——人々の尊崇をあつめ、石垣村の諸祭祀の舞台となる。年中祭祀の一つである豊年祭^{ブーリィ}で、当御嶽の神前で行なわれるミシャグパーシィ〈神酒栄やし〉の時にうたわれる歌（「ミシャグパーシィ」（『南島歌謡大成Ⅳ』フミシャギィ6）に「宮鳥ぬ 御神ぬ みぶぎん／ひ、稔^{のうるゆ}世ば 実^{みぎ}り世ば 給^ゆばうられ」〈宮鳥御嶽の御神の御恩義で、ヒ、稔る世、実入り豊かな世をいただいて〉とあるように、村を守護し育くむ第一の神の坐す御嶽である。また、雨乞いの時に謡われる「雨ちぢ」（『同上書』雨乞いの歌①アマチィジィ1）は「1. みやとれえぬ うふうがん 2. なが山ぬ うふぬし 3. たんで とうど うふうがん 4. があら とうど うふぬし（中略）、7. 雨 欲しゃんで泣きうん 8. 水 欲しゃんで 泣きうん 9. ちぢん 打ち 願がようら 10. かにん ちき 願がようら 11. 宮鳥ぬ うらなが 12. 長山ぬ 上なが 13. たき流し 給ぼらる 14. 山流し 給ぼらる（後略）」〈宮鳥御嶽

の大神。長山の大神。あな尊、大神。あな尊、大神。雨が欲しいと泣いている。水が欲しいと泣いている。鼓を打って願ひましょう。鐘も撞いて願ひましょう。宮鳥御嶽の裏に、長山の上に、滝流す程に雨を下さって、山を流す程に下さって」と謡っている。この御嶽の神に降雨を祈っているのである。石垣村の人々の生活と深くかかわってきた一面がうかがえる。

『琉球国由来記』に「宮屋鳥御嶽 神名 神ヲレハナ 石垣村／御イベ名 豊見タトライ」とある。

153. みやらどんつ（宮良殿内）

石垣市字大川にある。方音でメーラドゥヌヂィという。琉球国時代及びその遺制を継いだ明治 35 年まで、八重山は石垣、大浜、宮良の 3 間切に分けられていた。間切の長は頭（かしら。方音でカサ）と呼ばれ、その頭の邸宅を殿内（ドゥヌヂィ）と言った。^{メーラドゥヌヂィ}宮良殿内は宮良間切頭職の邸宅で、テキスト語形の「みやらどんつ」はこれが沖縄方言式に読まれたものである。波照間島の「大石御嶽のやまぬばん」（『南島歌謡大成Ⅳ』ニガイフチィ 157）の冒頭に「1. みやらどんつ きせーどうんつ おーる うやーん 2. かんとうるつ ういとうるつ おーる うやーん」〈宮良殿内・キセー殿内にいらっしゃる大親神。神殿内・上（神殿内）にいらっしゃる大親神〉とある。この願い口〈願詞〉は、波照間島と関わりの深い島々の場所々々を領く神の名を列挙して、その加護を乞うものである。宮良殿内の名がその冒頭におかれるのは波照間村が古くは宮良間切に属していたことによるのであろう（寛永 6《1629》年当時。後に大浜間切に組みかえられている）。すなわち、波照間を統治する頭職の居宅に坐す大親神こそが、ある意味では島の死命を決するものと考えられたのであろう。同じく波照間島に伝えられる雨乞い歌（「大石御嶽の雨乞」『同上書』雨乞いの歌③アマグイ 21）にも「3. 宮良殿内ぬ 親神よ 雨ゆ 給られ 4. きさい^{どんち}殿内ぬ 親神よ 雨ゆ 給られ」〈宮良殿内の親神よ、雨を下さり。キサイ殿内の親神よ、雨を下さり〉とある。これも上記の宮良殿内と波照間島との関わりのあらわれである。対語の「きさい^{どんち}殿内」の「きさい」の意は未詳。

1972 年、国指定重要文化財となる。なお当家に保存されてきた古文書資

料は、1962 年、琉球大学附属図書館に「宮良殿内文庫」として移管された。

154. むりゃーむら（盛山村）

石垣島の東部、白保の北方にあった古村。明和の大津波後、竹富島から石垣島の富崎に移された人々が更に盛山の地に移されて建てた村（『八重山島年来記』91・92 頁。「ふさきい」の項参照）。大正 6（1917）年に廃村となった（牧野清「盛山」『沖縄大百科事典』）。「盛山どっけま」（『南島歌謡大成Ⅳ』ユンタ 140）という歌に「1. 盛山村なんがよ ^{みやらび} 乙女でん どっけまでん ^{まり} 生ぶれる／踊 しりばん 狂言 しりばん どっけま たんがよ 2. 盛山村なんがよ 乙女でん どっけまでん／なせる 親や 竹富村 ぬ 田福あっぱど まらしおーれーる 3. ^{くやしにんじゅ} 暮人中やよー ^{はっ} じまかいど 走たねら／^{ほった} 食人中やよー ^{ばぬ たんが} じまかいど おったねらー／我 一人 残され いなむぬどっけまよー」〈盛山村に乙女が、ドッケマが生まれている。踊をしても、狂言をしてもドッケマだけだ。盛山村に住むドッケマを、乙女を生んだ親は竹富村の田福《屋号》のお母さんである。盛山村の人たちはどこに行ったのか。暮らしていた人たちは何処へ行ったのかね。私一人残されて、残念ですよ。ドッケマよ〉と謡われている。風土病のため廃村同然となった村に残された娘の寂寥感の伝わってくる内容である。盛山の村建てに携わった人々が竹富人であったことも謡いこまれていて貴重である。

盛山村には、牧那真・南ウロン・北ウロン・外ウロン・西牛種子・東牛種子・盛山などの小字がある。

155. めーらむら（宮良村）

石垣市字宮良。石垣島の東部、宮良湾岸東方にある古い村である。1771 年の明和の大津波によって潰滅的な打撃をうけた。その後、小浜島より 320 人を寄人し、村の再建をはかった。村の一大祭祀であるアカマタ・クロマタはその寄人らの招来したものである（「ふさぎいんどう」の項参照）。村の創建は、『琉球国由来記』では白保村とともに説かれ、現在、白保村にある諸御嶽も宮良村所属として記されている。古くは白保村をも含めて宮良村であったのである。「^{あま}雨ん^ぐ乞い」（『南島歌謡大成Ⅳ』雨乞いの歌③アマグイ 5）に

「1. みしきぴやいば しうりどう 2. むむかぴやいば しうりどう 3. みやらな一ぬ よう ちかさぬ 4. あだどうな一ぬ よう ぶないんち」

〈三ヶ月の日照りがして、百日間の日照りがして、宮良村の司《神女》が、安多手村の女頭が〉とあって、宮良の対語に「あだどうな一」の名がみえる。宮良村の御嶽には仲嵩御嶽、山崎御嶽、外本御嶽、小浜御嶽がある。小浜御嶽は小浜島からの寄人らが勧請・分祀したものである。

伊波普猷らの琉球史料叢書本の『琉球国由来記』に「本宮良村」があるが、これは誤解によるものである（外間守善・波照間永吉『定本琉球国由来記』559頁の下段16－1、19－1の注参照）。なお、「大野だきあよう」（『同上書』アヨー9）に「5. 旅かいしゃ 石垣ぬ^{うふぬ} 主／路かいしゃ 宮良ぬ主^{めーら}」〈旅の立派な《平安な》のは石垣の頭、海路の美しいのは宮良の頭〉とあるが、この「宮良ぬ主」とはキリスト教法難事件（1622年）で焚刑にあった石垣永将とされる（喜舎場永珣『八重山古謡』上巻139・140頁）。石垣永将は本宮良頭といわれた。

156. めんざとう（宮里）

竹富町黒島の集落。島の南西部にある。方音でメシトゥという（『黒島史』には「ナンザトゥ」とある）この村の西方に、かつては保慶村があったが廃村となった。豊年祭には、その保慶、保里村とともに西方の組を構成してきた。黒島の風物をうたった「ひゃんかんふし」（『南島歌謡大成IV』節歌37）、「親廻り節」（『同上書』節歌補遺45）、「いやり節」（『同上書』節歌補遺43）などは、まず、宮里村からうたいだし、仲本、東筋、伊久、保里、保慶村と歌いついでゆくことになっている。これは理由のあることであって、「ぺんさあ」（『同上書』豊年祭の歌23）に「2. 宮里の^{めんざとぬ} 若者よ／親村の^{ばはむぬ} 男達^{うやむらぬ} ぎらやた^{ぎらやた}」とあるのは宮里が親村であるという意識に因むのではないだろうか。

「ひゃんかんふし」に「1. 宮里みやらひ 前の干瀬の ひゃんかん とうれい 2. またん ひきりいた 干瀬の 外の 墨もつ うちい」〈宮里の乙女は前の干瀬のヒヤンガン蟹をとり、青年達は干瀬の外のクロムツ魚をとる〉と歌われ、「いやり節」では「1. 宮里乙女の^{めんざとぬ} 土産や^{めらびぬ} ぎらまぬ^{いやり} 塩漬^{あーし}ど いやりす」〈宮里乙女の土産は、シャコ貝の塩漬けが土産〉と歌われるの

は、これらの魚介類が宮里を代表する産物であったからにちがいない。

157. やいま（八重山）

現在の八重山の島々の総称。『おもろさうし』にでる「やへましま」「やゑましま」は八重山島で、八重山のことをさす。このオモロの例のように古くは、八重山のことを「八重山島」と呼んでいたらしく、王国時代の古文書の書名にも『八重山嶋諸記帳』等のように「八重山嶋」と冠したものが多い。

この「八重山嶋」という名称は口頭伝承の分野でも使われており、「いんしがーぬ金盛ゆんた」（『南島歌謡大成IV』ユンタ 216）に「6. ばが宮古島や^{ゆ す はら}四十原ぬ ふんや 7. ばが八重山島や^{は た はら}二十原ぬ^{ふん} 国や」〈我が宮古島は、40ヶ村の国は、我が八重山島は、20ヶ村の国は〉とある。この歌謡は16世紀初期の宮古軍による与那国征伐の叙事歌である。「八重山島」をうたいこんだ歌謡は他にもあり、「いしゃじょうにゆんた」（『同上書』ユンタ 56）に「^{や い ま}八重山島^{まじまかしらゆ}頭主ぬ 乗りやわるよ」〈八重山島の頭主がお乗りになる〉とあるし、「そうそうまじらば」（『同上書』ジラバ 12）にも「やいま島 ぷりかーぬ ぱじまりよ」〈八重山島の掘抜き井戸の初発であるよ〉とある。広く使われていたのである。

八重山の対語として出た「^{は た はら}二十原」という名は、八重山の村落の数に困むものであろうが、もとより厳密な数ではない。例えば、「浦船じらば」（『同上書』ジラバ 117）には「^{や い まばら}八重山原^{ぐむじい}みしよ原 貢物待ちどう」〈八重山村、30ヶ村の貢物を待っている〉とある。『おもろさうし』にでる「やへましま」の対語の「はたらしま」は「^{ハ タ ハラ}二十原」とも考えられるが、「^{ハ タ}端^ラの^ラ処」の意かと思われる。

また、八重山の対語には「^{しいむ}下八重山」がある。「^{まい つ ばあ}真乙姥ゆんた」（『同上書』ユンタ 55）に「^{や い ま}ばん八重山^い帰り行き^{しいむ}下八重山^く下だり行き」〈我が八重山に帰って行き、下八重山に下って行き〉とある。「下八重山」という呼称はふつうは波照間島の対語である。

「八重山」は石垣島の異称としても使われる。与那国では石垣島に行くことを「ダマンキ ヒルン」〈八重山に行く〉という。「しょんかね」（『同上書』スンカニ 2）に「与那国とう 八重山とう 縁ぬ 糸 延ゆてい／面影ぬ

たつば 互に 引かな」〈与那国と八重山《石垣》と縁の糸を延えて、面影が立ったら互いに引こう〉とある例もそうである。

158. やしらだき（安良岳）

石垣島平久保半島にある山。標高 365m。西麓に平久保村がある。古くは東麓の平野部に安良村があったが、近代に至って廃村となった（1912 年）。安良は方音でヤッサという。村の創建は 1753 年で、竹富島・白保村・伊原間村からの寄人によるものであった。しかし、1771 年の明和の大津波で壊滅的打撃を受け、以後は平久保村の属邑となった（『八重山島年来記』76・92 頁。『大波之時各村之形行書』36・37 頁）。

石垣島大浜村に伝承される雨乞い歌「すばんがに節」（『南島歌謡大成Ⅳ』ニガイフチィ 53）は、水神に型通りに「雨を下さい」と述べた後、「10. あらばぢみぬ ぬぶりんや 11. まはじみぬ ぬぶりんや 12. やしらだき ぬぶりようり 13. かんぬたき はいぬり 14. やしらだき に うるな 15. かんぬたき に さすな 16. うんからぬ ぬぶりんや 17. きんぶだき ぬぶりようり（後略）」〈最初の上りは、真初めの上りは、安良岳にお上りになり、神の岳に這い上り、安良岳に根を下ろすな。神の岳に根差すな。それからの上りは、金武岳にお上りになり〉と謡いおこす。それから、金武岳にも降らさず南方のオモト岳へと乞い、更にオモト岳にも降らさず、鞍山へシナンガーラと謡い継ぎ、結局はこの鞍山にも降らさず七川原に降らせて下さいと謡う。石垣島の北方から水神を招きよせる歌であるわけだが、神の足がかりとする第一の山が安良岳であったことがよくあらわれている。

なお、この山の付近で、明治、大正、昭和の一時期、銅鉱石の採掘事業が行われたが、いずれも失敗におわった。

159. やていくちぢ

与那国の東端、東崎アガリにある。岬の突端への入口の手前の岡である。ダティグチディと方言では呼んでいる。チヂ・チディは頂の意である。東崎は西表、石垣島方面から往来する船が一番最初にみえるところであるから、船影を確認するとすぐに狼煙を上げ、役所に通知するための施設がこの地には

設けられていた。火番小屋と現在称しているのがこれである。現在この番小屋跡にはコンクリート製の小祠が建てられ、「毎年旧暦八月の第一丙子の日」には祭事がおこなわれる（与那国町文化財調査委員会『与那国町の文化財』11頁）。また、祠の傍には、往時用いられた方位石が保存されている。このように望見のきく場所であるから、船見送りの人々がこの地を訪れ、航海の平安を祈願したものらしい。「しょんかね」（『南島歌謡大成IV』スンカニ 1）に「11. やでいく頂^{ちじい}までいや 恋女^{みやらび}に送らりてい／渡中^{となか} 押し出^{でい}りば 御風^{うかじ} どう 頼^{たぬ}む」〈ダティグチディまでは恋人に見送られて、沖に出れば御風を頼む〉と歌っているのにそれはうかがえよう。「やていくちち」をダティグチディというのは、与那国方言ではヤ行音がダ行音に変化するのによるもの。

160. やまがーおん（山川御嶽）

石垣市字川平にある。川平の4ヤマの一つでヤマ御嶽^{オシ}と別称される。豊年祭等の年中行事が行われる他、シーヌ願^{ニガ}い（猪害防止の祈願）もここで行われる。神名は嶽名と同じ。イベ名はナアナ大アルジ（『琉球国由来記』493頁）。

御嶽の由来は宮古島の山川部落との関わりを説く。すなわち、平田主^{ヒサダ}と仲間松主の二人が首里へ公用のため上國中、難破し山川部落に漂着した。しかし村人の協力と山川の嶽神の加護により大任をはたすことが叶った。このことに感謝して、川平に山川の御嶽の神を分祀し、山川御嶽として崇敬することになった。御嶽の香炉は宮古の方に向けられて居る（『川平村の歴史』67頁）。

川平村を讃えた「川平口説」（『南島歌謡大成IV』口説 1）に「6. 群星御嶽に 山川え／赤い宮鳥 観音堂エイ／御守護 賜り 有難い／千秋万歳^す 目出度けれ」と、川平村を守護する聖地として群星御嶽、赤イロ目宮鳥御嶽、観音堂とともに歌いこまれている。

161. やまざき

竹富町黒島にあった古集落。この村は、黒島に最初に誕生したアーザト村より分かれた2村の一つである。同時に分かれた今一つの村がパイフタ村である。村敷は、丁度、島の南部の海岸地帯にあったと伝えられている（知念政範『黒島史』1頁）このため往古の津波の被害を受け、後、仲本村に吸収

合併されることとなった。

「山崎節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌 36）は、山崎の色好みの老爺が、ンギシャマ、ナビスケーという二人の乙女を騙し、賺して、ついに兩人とも自分の妾婦にしてしまったことを歌ったものである。ところで、山崎の名は「ひゃんかんふし」（『同上書』節歌 37）に「7. 伊久村宮童 山崎の しんなま すくゑい」〈伊古村の乙女は、山崎のシンナマ魚を掬い〉とみえる。ここに出る「山崎」が、山崎村の山崎であるか否かは即断はできない。というのは、伊古は島の東北方にあって、丁度、反対側にあたっているからである。しかし、小さな島のことであるから、このことが特に問題とはならないとすれば、山崎村を指しているとすることはできる。もっとも、喜舎場永珣『八重山民謡誌』の「ヒャンガントウレー節」は「7. 伊久村女童 山^{ドゥマリ}泊ヌ シンナマ^{スク}抄エ」となっており、山崎の名は出てこない。

162. やまばれー（山原）

石垣島の北西部、川平湾東方の地名。字川平の小字である。オモト連山の北西麓で、前方はすぐに海である。喜舎場永珣によると「山原村はその創立年代の徴すべき文献なきために判然としないが、古い時代に創立されたように思われる。川平村や桴海村の古老等の伝承によると、山原村の保護林として植えた松林が（中略）、沖縄一の松林と称され（中略）、この松林の林相から伺っても 400 年以上の年数を経た」ものといわれ「この林相からすると山原村もその創立は比較的古い村落であったように想像される」（『八重山古謡』上巻 114 頁）という。川平から桴海へ到る行路の中ほどにあり、宿駅として利用されていたらしい。このことは、桴海村で御用布を織製し、石垣の蔵元に貢納しに行くことをうたった「桴海布晒節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌補遺 10）に「8. 吉る^{ゆか} 日ゆ 撰らでい／上ぎてい しでいら 9. 山原ぬ^{やまばれ} 道から^{うりすく}／下底ぬ 道から 10. 杣山ば^{すまやま} ちいかいし／ばん 女頭^{ぶなじい} 御供す^{うとうむ}」〈吉き日を撰んで御用布を上げて光栄に浴そう。山原の道から、下底の道から 杣山役人を先導にし、私、女頭が御供をする〉とみえること。山原村の青年男女が、神祀りの夜、皓々と照り冴える月光にさそわれて浜遊びをすることをうたった「やまばれーゆんた」（『同上書』ユンタ 85）の冒頭に「1. やまばれー

ぬ しくぬやーぬ ぬずぎやーま」〈山原の、宿の家のヌズギヤーマ〉とあること等からうかがえる。「宿の家」は『村番所』のように村民の集会所の意で、『宿』(シュク)とは宿場のことで馬継場にあたり宿駅とも称した」(喜舎場永珣『八重山古謡』上巻 114 頁) ところである。

163. やらぶだき (屋良部岳)

石垣島の西端部の屋良部半島にある山。標高 216.5 m。竹富島や小浜・鳩間・西表島から東北方を望むとき、オモト岳と並んで一つの峰を形成する山である。「鳩間口説」(『南島歌謡大成Ⅳ』口説 8) に「3. あれに みゆるは うむとうだき／やらぶ たきどうん くばまだき／くんぬ やいだき ばとうばなり」〈彼方に見えるのはオモト岳、屋良部岳、竹富島、小浜岳、古見の八重岳、鳩離島〉とあって、鳩間の人々の視領域の一角に位置を得た山であったことが分かる。

この山はこのように目立った存在であるせいか、神の坐す山とも考えられていたようである。川平村の「群星御嶽願い口」(『同上書』ニガイフチィ 13) の 1 節に「24. 大屋良部根元 御神崎 降りおる 大親」〈大屋良部の根元、御神崎にお降りなさる大親神〉とある他、竹富島の「久間原御嶽願い口〈神口〉」(『同上書』ニガイフチィ 74) にも「17. うむとうだぎ 屋良部岳 降りみそーる 大やん 主やん」〈オモト岳、屋良部岳にお降りなさる大親神、主親神〉とある。前者の方では、屋良部岳と共に御神崎が神の降臨する地であることが明示されている。

御神崎は古来より航海の難所であり、神の領く岬として人々に畏れ、崇められてきた聖地であった。後者の例に出てくるオモト岳もまた、さまざまな神話・伝説に彩られる聖なる山であった。このような聖なる岬・岳には神である「大親」「主親」が鎮座ましますと信じられていたのである。屋良部岳の聖地性を証明する詞章である。

屋良部半島の南端の平野には 1734 年、竹富島からの寄人によって建てられた屋良部村があったが(『八重山島年来記』58・59 頁)、廃藩置県の頃には風土病マラリアのために廃村となっていたようである。

164. ゆくいていち（憩い頂）

西表島崎山半島の地名。現在の呼称はユクイティチである。「ゆくい頂」の「ゆくい」に「憩い」の文字をあてるが、八重山方言で、憩うこと、憩いをユクイと言うことに因んだのであろう。「ティチ」はツヂ（チヂィ）の訛音で、頂の意である。この頂に登ると遠方がはるかに望見できるのであろうか、崎山村の建設のために波照間島より島分けされた人々が、故郷をなつかしんでこの頂に登ったことが「崎山ゆんた」（『南島歌謡大成Ⅳ』ユンタ 129）に「19. ゆくい頂 遊びばなに 登りより 20. はてろまぬ 下八重山ゆ み^あ上ぎりば 21. 我やぬ 母 産しやる 親ぬ 真面 見るそんね」〈ユクイ頂 遊び端頂に登って、波照間の、下八重山を見上げると、我が家の母、産んでくれた親の真顔を見るように〉とある。この頂からはば南方の海上に波照間島がみえるのである。「ゆくい頂」は、「崎山ゆんた」（『同上書』ユンタ 141）、「崎山ゆんた節」（『同上書』節歌補遺 16）では「ゆくや頂」と謡われている。「崎山節」（『同上書』節歌 25）の「よくい辻」は「ゆくい頂」の異表記。なお、「ゆくい頂」「よくい辻」の対語は「遊びばな」「あそびはな」（いずれも、「遊びをする高い所」の意）で、「ゆくや頂」の対語は「たきやばな」「たきや頂」（いずれも、「岳の頂」の意）と異同がみられる。

165. ゆなら（与那良）

西表島の東端・野原崎より南方一帯の地名。この一帯の干潟をユナラ^{カタバル}潟原と呼ぶ。また、西表島の野原崎からカサ崎に至る海岸と小浜島との海峡をユナラドウという。ドウは「渡」で海・海峡のことである。この海峡は八重山有数のもので、常時、川のような急流が南北に流れていて、クリ舟などの小型船にとっては航海の難所であった。この激しい潮流のため水深のある水路となっており、波照間航路の大型船はここを通る。^{ばとうまむとう}「鳩間元じらば」（『南島歌謡大成Ⅳ』ジラバ 70）は、鳩間村の村建て（1701 年）のために古見と黒島から島分けされた人々が、鳩間島へ向けて舟と徒歩で移動していくのを叙事的にうたったものである。この中に「15. かさい浜に 舟着き 16. 片手しや 子 抱き 17. 片手しや ゆしぬま 持て 18. 与那良潟原ぬ 外から 19. ふみら浦 ぴざぎわから」〈カサイ浜に舟を着けて、片手では

子を抱き、片手では苧麻笥を持って、与那良潟原の外から、フミラ浦の汀から歩いてゆく」とあって、ユナラが移動のルート上にあったことが知れる。

166. ゆのーんふちい（与那国口）

西表島崎山半島の前方にある津口。「口」（フチィ）はリーフが切れて船舶の出入が可能になっているところである。「与那国口」はユノーンフチィと呼ばれる。崎山湾のうちの、北よりにあるリーフの切れ目にあたる。もう一つ、南西部にある津口がヌバンフチィである。

崎山村は、波照間島からの寄人を主体にして創建された村であるが、この地に村建てすることとなったのは、ここが農耕地と津湊に恵まれていたからである。「崎山節」（『南島歌謡大成Ⅳ』節歌 25）はその事を次のように歌っている。「1. 崎山の 新村よ たてたす 2. たるの 主の つりの 親の たてたね 3. なをの よい いかの つにやんと たてたね 4. 与那国口 のばま口の よいんど」〈崎山村の、新村をたてたのは、どの御役人が、いづれのお方がたてたのかね。どのようなわけで、いかなる理由で村をたてたのかね。それは与那国津口、野浜津口の故にだよ〉。この歌には農地の名が歌いこまれていないが、野浜地が予定されていた。なお、「崎山ゆんた」（『同上書』ユンタ 41・129）に「ゆなぐぐち」とうたわれる津口も、おそらくは「与那国口」のことと思われる。与那国口の名称は「与那国島行きの船の発着する所なれば云ふ」（宮良当壮『八重山語彙』293 頁）。ちなみに、宮良当壮はユナグニグチとしている。

167. ゆぶ（由布）

竹富町由布。西表島の東端、野原崎とカサ崎の中間程の地点にある砂地の小島。対岸の西表島との距離はわずか200mしかない。この間の一帯は俗にいう^{カタバル}潟原で、干潮時には砂洲があらわれ干潟となる。潮の状態にもよるが、徒歩での往来も可能である。

ユブの地名は泥砂を意味をする方言ユブ（沖縄方言でイーブ、イフなどと言う）にちなむもの。「^{はとうま}ばが鳩間じらば」（『南島歌謡大成Ⅳ』ジラバ71）に「7. ゆぶぬばだ道から かたばるぬ 道から 8. しいになからきいりいば し

むむなからきいりいば し」〈ユブ島の端道から、潟原の道から、裾を臍の半ばまでたくしあげて、裾を股の半ばまでまくりあげて〉とあるのは、ユブ付近の潟原を徒歩で行くさまを表現したものであろう。この歌は、鳩間村が古見村の属邑で（鳩間村の古見村からの独立は 1701 年）、王府・蔵元からの巡検のたびに古見村まで出向かなければならない不便をうたったものである。これは歴史的にも確認されることである（『参遣状拔書』上巻 54～56 頁）。上記引用部分には往時の交通の実体が描かれているといえる。

168. ゆぶしいおん（群星御嶽）

石垣市字川平にある。川平の 4 ヤマの一つで、川平の中心的御嶽である。ンニブシィ^{オン}御嶽とも称される。川平の年中行事のうちでも最も重要な結願祭はここで執り行われる。また、他の祭儀もここを中心に行われる。神名は嶽名と同じ。イベ名はシロキ大アルジ。（『琉球国由来記』）。『琉球国由来記』には「稲ホシ御嶽」（『八重山嶽々由来記』などに「稲干御嶽」）とあるが、大正初期に部落民により「群星御嶽」と改められた。この表記は御嶽の由来を反映したものと考えられる。すなわち、その由来は、川平村の宗家の南風野家の娘がある夜、中天にある群星と南風野家の庭の間を霊火が昇降するのを見た。この現象はその後も続き、それを怪しんだ村人が霊火の降下する場所を調べると神の標象が記されてあった。これが群星御嶽の始まりという（『川平村の歴史』65 頁）。川平村を讃えた「川平口説」（『南島歌謡大成Ⅳ』口説 1）に「6. 群星御嶽に 山川え／赤い宮鳥 観音堂エイ／御守護 賜り有難い／千秋万歳 目出度けれ」と、川平村を守護する聖地として第 1 番目に挙げられ、歌われている。

169. よーん

石垣市字崎枝と字川平の間にある小字名。川平村に属する。ヨーンという名の語源は「松の原生林の巨木が天日をさえぎりひる尚暗いので闇（ヨーン）」という名が生れたと伝えられている」（『川平村の歴史』25 頁）。「ヨーン」は「やみ、闇、暗黒」を意味する石垣方言である。川平村の節祭^{シチィ}に出現するマヤヌ神^{カン カンフチィ}の神口^{うちいばれむら}（「内原村の真世^{かんふちい}がなしいの神詞」『南島歌謡大成Ⅳ』カンフチィ

2) に「9. うーとーど、くいちいたーま、なーちやあ、ゆかざ、よーんたばりぬ ういに、ふうゆう ぴすゆーば、ふちいぽーりい、まきいぽーり、しおーる、まゆんがなし」〈ああ尊、越地、ターマ、ナーチャー、ユカザ、ヨーンの田圃の上に大世、広世を打ち放り、蒔き放りなさる真世神様〉とある。

現在、ヨーンを通る石垣島一周道路の沿道には、ヨーンの名のおこりとされる松林の形見のような琉球松の並木が保護・造成されている。

170. んぶふり

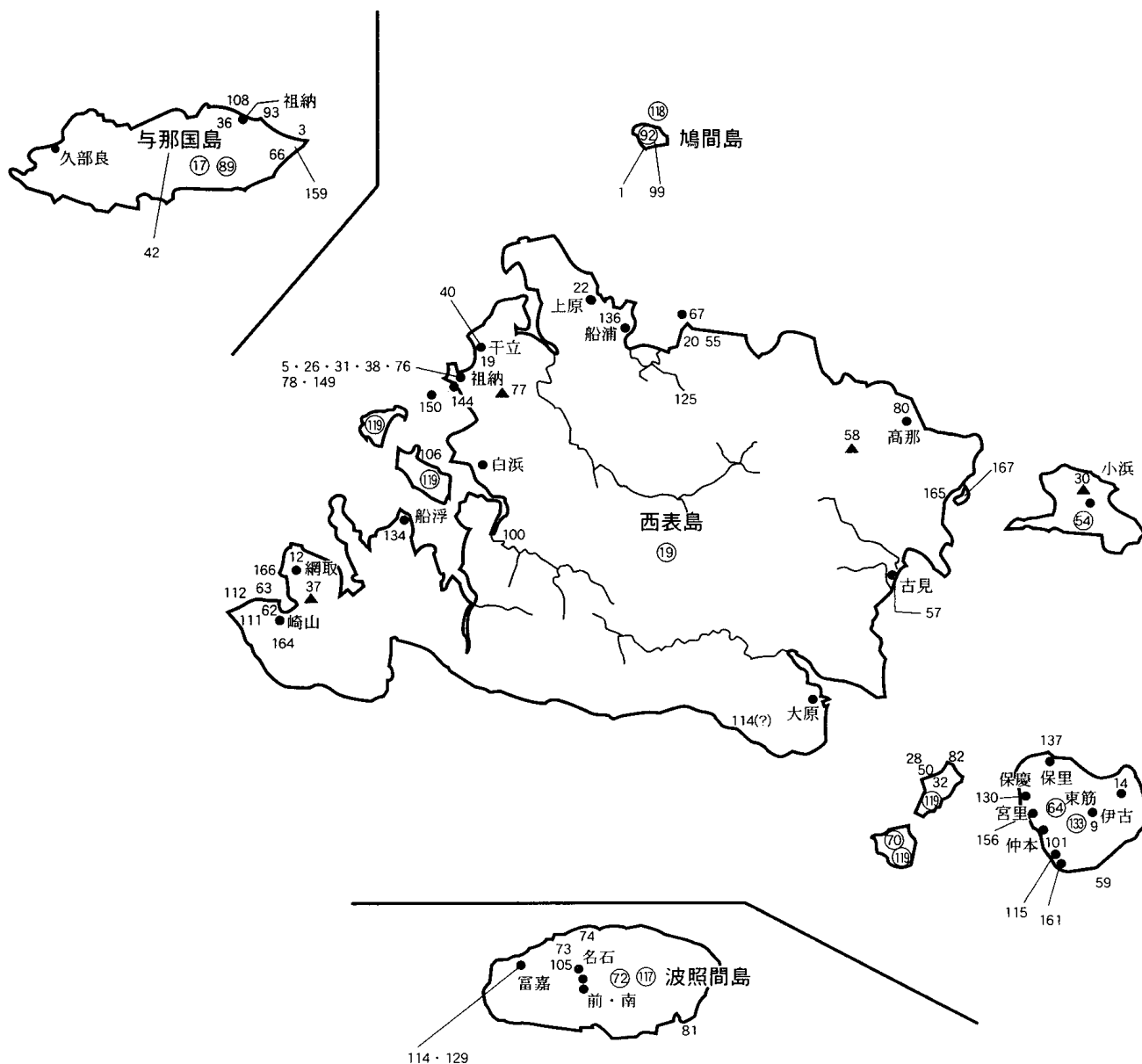
竹富町竹富島の地名。玻座間村と仲筋村のほぼ中間にある石岡である。この岡の地質は、島の核ともいえる古成層の珪岩で形成されており、島の各所にみられる珊瑚石炭岩の地質とは異なっている。この岡の傍を通っているのがンブフル道で、仲筋と玻座間を結ぶ石畳状の坂道となっている。一名「^{うしむる}牛岡」とも称される。その由来は「仲筋村を創始した新志花重成殿は仲筋の地に見張台を築こうとしていたが適当な場所がなかった。と、そんなある夜、部下の飼育する牛が角で土石を突き上げ、夜明けには高い岡をつくり、その上でンブフル、ンブフルと鳴いていた。新志花重成殿はそれを見て、この地に見張台を築くこととし、この岡をンブフルと命名した」という（上勢頭亨『竹富島誌—民話・民俗篇—』12・13 頁参照）。

「^{あさどうやー}安里屋ゆんた」『南島歌謡大成IV』ユンタ 13) は、安里屋のクヤマに袖にされた役人が、その面当てに仲筋村へ行き、「真加戸の娘・イツケの娘」を乞い取ってくることを謡う歌であるが、その終末部はつぎのようになっている。

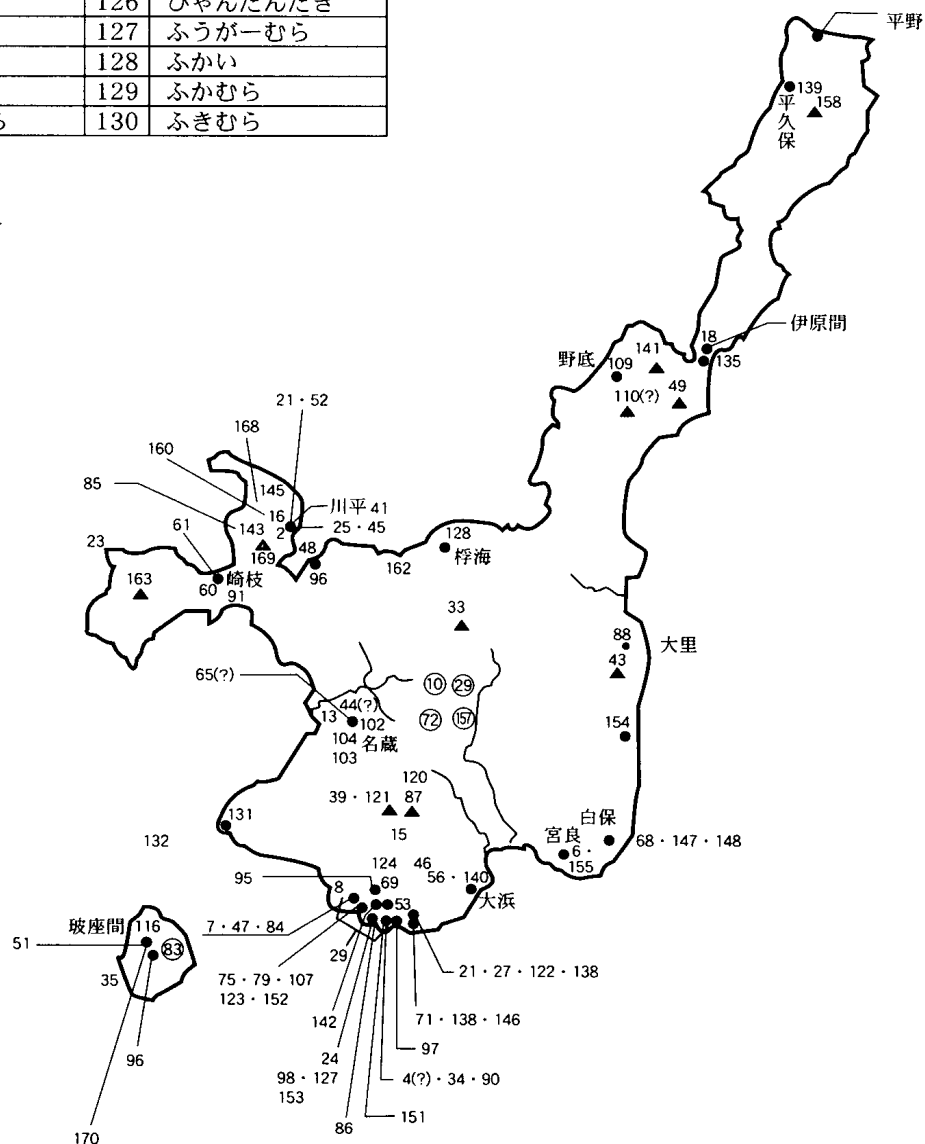
「15. 余ぬ ^{あま}さにしゃんどうよう どうきいぬ ふくらしゃんどうよう
16. んぶふる道から ^{みちい}地やんざん ^{じい}踏まさなよう 17. 石原路から ^{いせーらみちい}地やんざん ^{じい}踏まさなよう」〈あまりの嬉しさに、たいそうの喜ばしさに、ンブフル道から地面さえも踏ませず、石原路から地面さえも踏ませずに〉。「石原路」というのは、石ころの道、石だらけの道のことで、この道の実際を反映したものとなっている。

ンブフルの傍には、犬が発見したと伝えられる仲筋井戸^{がー}がある。

1	あーる	21	ういぬむら	41	かびらむら	61	さきだおん
2	赤イロ目宮島おん	22	ういばる	42	かみんぐばた	62	さきやま
3	あがりざき	23	うがんざき	43	からだき	63	さきやまふちい
4	あがろうざあ	24	うしやぎいやま	44	がらだき	64	さふしま
5	あだてい	25	うちいばれーむら	45	かんぬんどう	65	ざらだき
6	あだどうなー	26	うちいみじい	46	ぎしゆくおん	66	さんにぬだい
7	あらかー	27	うふあんおん	47	きだむりいばか	67	しいざばなり
8	あらびけー	28	うふいし	48	きふあ	68	しいさぶむら
9	ありしん	29	うふいしやなぎ	49	きんぶたき	69	しーどうばる
10	あるじしま	30	うふだき	50	くいぬばな	70	しいむぢい
11	あろぎてー	31	うふだてい	51	くーしく	71	しいむぬむら
12	あんとうり	32	うふどーちいじい	52	くばがーむら	72	しいむやいま
13	あんぱりい	33	うむとうやま	53	くばんとうおん	73	しびらばなみち
14	いく	34	うやきどーかにむりばか	54	くもーま	74	しむたばる
15	いしすく	35	うらかいじ	55	くらぬばま	75	じらばが
16	いせに	36	うらたばる	56	くるしむら	76	すない
17	いっぶんじま	37	うりちいだき	57	くん	77	すないだき
18	いばるま	38	おかり	58	くんだき	78	すんばれー
19	いりむてい	39	かーらやま	59	けーんふち	79	そうそうまかー
20	いんだ	40	かびや	60	さきだ	80	たかな



81	たかなざき	106	なりいや	131	ふさぎい	151	みしゃぎばま
82	たかにく	107	なんかいざん	132	ふさぎんどう	152	みやとうれ
83	たきどうん	108	なんたはま	133	ふしいま	153	みやらどんつ
84	たきにしいばか	109	ぬすく	134	ふなうき	154	むりゃー
85	たていしばれー	110	ぬすくちぢ	135	ふなくや	155	めーらむら
86	たぶさがー	111	ぬばまじいー	136	ふのーら	156	めんざとう
87	たらまんじ	112	ぬばまふつ	137	ふりむら	157	やいま
88	とうざとう	113	はいきどー	138	へいしん	158	やしらだき
89	どうなんじま	114	はいさこだ	139	ペーばぐぬ	159	やていくちぢ
90	とうぬすく	115	ばいふた	140	ほーまむら	160	やまがーおん
91	とうまた	116	はざま	141	ほーらやま	161	やまざき
92	とうむり	117	はていろーま	142	まーぢい	162	やまばれー
93	とうやま	118	ばとうま	143	まいだき	163	やらぶだき
94	なーしきい	119	ばなり	144	まいどうまり	164	ゆくいていち
95	なーま	120	ばらびどう	145	まじいしく	165	ゆなら
96	なかすじ	121	ばんなーやま	146	まじどうむら	166	ゆのーんふちい
97	なかどーみちい	122	びいさいむら	147	まじゃ	167	ゆぶ
98	なかぬはか	123	びいさがーむりい	148	まじゃんがー	168	ゆぶしいおん
99	なかむり	124	びいさたばる	149	まやま	169	よーん
100	なからだー	125	びないさーら	150	まるまぼんさん	170	んぶふり
101	なかんとう	126	ひゃんだんだき				
102	なぐらおん	127	ふうがーむら				
103	なぐらだー	128	ふかい				
104	なぐらむら	129	ふかむら				
105	なしいなむら	130	ふきむら				



⑮
(八重山・総称)

比定地未詳番号：11.44.94.110.113.126
○内の数字は島名およびその異称。